

---

# 微妙な勇者と最強なヒロイン

柳条湖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

微妙な勇者と最強なヒロイン

### 【Nコード】

N65560

### 【作者名】

柳条湖

### 【あらすじ】

俺は……駄目人間だった。そんな俺は、ある時『別の世界で人生をやり直さないか?』という何者かの声を聞く。その言葉に頷いた時、俺はどことも知れない草原に放り出されていたのだった。しかも、何故か全裸で。さらに、可愛い女の子までセットで……えっと、どういう状況?

異世界召喚系主人公最強物……でも実は主人公の強さ微妙。

「っていうか、ヒロインが最強過ぎて俺に出番が無いんですけど!」

## 一章 “ 始まりは現状認識から ”

視界が開けた。

朦朧とした俺の脳髄はまだ活動することを拒んでいるが、しかしそんな呑気な事を言っている状況ではない事だけは分かった。

何が起こったのか、ちよつと冷静に考えてみようと思う。  
まずは現状認識から始めよう。

俺

名前：來生賢人<sup>きすぎけん</sup>……これは良い、問題ない

年齢：18歳……未成年万歳！イエーイ

体力：15 / 15……少ない

魔力：0 / 0……なんじゃそりゃ？

生まれ：一般庶民……父は普通のサラリーマンに母は専業主婦

装備：頭 黒髪ボツサボサ

胴 肌色の防具

腕 肌色のガントレット

足 肌色のレギンス ……つまり全裸。そう今をとき

めく流行の最先端Z・E・N・R・A！

よし、自分についての認識完了。

どこへ出しても全く問題のない変態っぷりだ。

さて次。

### 周りの状況

ステージ：果てしなき草原……ここどこ？

足元：シュウウって草が若干燃えてる……火事後？

周囲：オオカミに似てるけどよく分からない生物が三匹ほど……怖  
っ！

目の前：女の子（全裸）……めっちゃ可愛い

以上、現状認識終了。

どういうことですかこれは！？

いやいや落ち着け。

とりあえず大切な事から始めよう。

俺の真正面にいる女の子

名前：不明……だって初対面だし、一言もまだ交わしてないし

年齢：同じ年くらい？

肌：ガラス細工のようにきめ細かく、透き通るように美しい……触  
ったらスベスベしそう

容姿：破壊的に可愛い……特記事項無し

髪の毛：紅色でストレートのセミロング……ファンタジック

スタイル：谷間の見える豊満なバストにキュツと締ったウエスト、  
そして括れを強調するようにお尻のラインは女性らしい丸みを帯び  
ている……素晴らしきボン！・キュツ！・ボン！の体型。参考まで  
に我が母のスリーサイズは上からB100・W100・H100と  
いう素晴らしきボン！・ボン！・ボン！である

ヤバイ。

俺、この子のためなら死ねる。

「ゲルル……」

なんか唸ってる！

周りのオオカミみたいなの、めっちゃ唸ってる！？  
女の子の事観察してる場合じゃなかった！！

「あの……」

そこで初めて女の子が口を開いた。  
ちょっと高めの可愛い声だ。

どうしたんだろう？

オオカミみたいなのをどうにかする方法でも教えてくれるんだろうか？

「いくら私でも……その……殿方に素肌をマジマジと見られては……照れます／＼／」

わーい、周りのオオカミもどき完全無視だー

頬を上気させてるの可愛いけど、それどころじゃない。

今にも襲いかかってきそうなオオカミみたいなのを何とかしないと、俺はこんな意味の分からない状況で最後の時を迎えることになってしまう。

可愛い女の子に看取られて死ぬのなら良いかなーとも思うけど、その可愛い女の子も死んじゃうかも知れないとなれば話は別だ。まずは生きなければ。

「グルル……ガウツ！」

吠えた！？

オオカミみたいなのを吠えた！？

痺れを切らしましたか？腹減りましたか？

俺と女の子はどちらが美味しそうに見えますか？

女の子に決まってるよね？

だって三匹とも女の子の方に襲いかかる気満々っぽいもん！

助かる？俺、助かる！？

「そんなの駄目だ！」

俺、猛る。

俺の人生、俺が死のうが生きようが、俺の目の前で女の子が傷つくことだけは断固として許さない！

「あつ！」

俺は女の子の前に躍り出て、女の子を庇うように両手を広げる。しかし、勢いを殺せないまま三匹のオオカミみたいなのにタックルを食らい、地面に押し倒されてしまう。そしてオオカミみたいなのは「まあ男でも良いか」と俺の肉を噛み千切るために口を開けた。

ああ……俺の人生終わっ……て堪るかああああ……！！！！

「とりやつー！」

奇声を上げながら、俺のあ……ん……ところ……に噛みつかうとしていたオオカミみたいなのを膝で蹴り上げ、同時に俺の胴体の上に乗っているオオカミみたいなのを右腕の肘で突きながら俺は体を起こす。もう一匹は俺の頭に噛みつかうとしていたので顎に頭突きをくれてやる。

たったそれだけでオオカミみたいなのはキャンキャン言いながら逃げ去って行った。

フン、お前らの動きなんぞ止まって見えるのさ。

「怪我はありませんか？お嬢さん。」

そこでビシッと格好つけるのだけは忘れない俺（全裸）。

「はい、ありがとうございます。」

と、先程までは何も危険を感じていなかった様な口ぶりだったくせに律儀に礼を言ってくれる可愛い女の子（全裸）。

待て待て待てえ！！

もう一回状況を考えるぞ！？

今の状況

ステージ：果てしない草原……やっぱりここどこよ？

人影：俺達以外には見当たらない……つまり二人つきり

男：全裸……俺

女：全裸……可愛い

どうしてこうなった！？

まずはここに至るまでの経緯から考えよう。

女の子に欲情するのはそれからだ……うん。



## 回想 “駄目人間とは俺の事”

例えば、人よりちょっと勉強ができなくて、人よりちょっとスポーツが苦手で、人よりちょっと変なポリシーを持っている男がいるでしょう……つまり俺だ。

ちなみにここでいう“ちょっと”とは、蟻と百階建て超高層マンションの身長差くらいだと考えてくれて良い。

勉強は、平均点が70点のテストで赤点スレスレを低空飛行。平均点が60点を割るようなテストだと一桁だって珍しくない。お、俺が勉強出来ないんじゃないんだ……周りが出来過ぎるだけなんだ……

運動についてだが、身体的能力は決して低くは無いと思う。

50メートル走のタイムでいえば5秒台前半を叩きだせる。

高校生としては中々な数値なはずだ。拍手されたし。

さらに俺には特技がある。

名を『動体視力』……動きながら物を見る力、及び動いている物を見る力だ。

何故かやたらこの力が発達しているらしい俺は、あらゆる物の動きが写真送りに見えるのだ。

本気を出して一つの物に集中すれば、130km/hくらいの速度なら止まって見える。

ただ、生来の不器用さゆえかボールを使った競技など大の苦手。バットを振れば幼稚園児だってヒットが打てそうなスローボールを空振り、サッカーボールを追いかければドリブル中にボールを踏ん

付けて転び、卓球をやった時などボールの代わりに台を打って手首を捻った。

……こういうの、宝の持ち腐れって言うんだと思う。

高校は中退。大学には行かず絶賛二ト街道爆走中。

何故かというと、つい一週間前、教師の一人を顔の形が変わるまで盛大に殴りまくったからだ。

うわー……なんという不良……

自分で思っただけ自己嫌悪。

でもあの時は仕方なかったんだ。

あの教師、女の子に暴行しようとしてたし……

途中で他の教師が介入してきて三人がかりで俺を抑えつけた為に事なきを得たが、もしあのままだったら教師は死んでたかもしれない。

一応女生徒を助ける為だったということで、本来なら警察沙汰になるところを放校処分という温情措置で済んだらしい。

ってか「どうせその成績じゃ卒業できないし、金の無駄だからさっさとやめろ」って親にまで正面切って言われた。

……これはやめざるを得ない。

そう、俺には『俺の前で女の子が傷つくことを許さない』というポリシーがある。

ポリシーというか、もはや体質という次元にまで昇華しているといっても過言ではない。

キレるのだ。

女の子が傷つくという状況に遭遇すると、俺はキレてなんとしてでも女の子を助けようとするらしい。

らしい、というのは時々記憶が飛ぶくらい完全にブチギレることがあるからで、今回の教師の件はそれ。

心配しなくてもほとんどの場合は理性を保っている状態での行動だ。

俺は自分で考えて自分で行動した結果、なんとしても女の子を守るために行動をする男なのだ。

そんなポリシーがあるのならさぞかしモテることだろう、と思うかも知れない。

が、残念ながら彼女いない歴『生まれてから今この瞬間まで（絶賛記録更新中）』である。

なぜか？

俺が訊きてえ！！

強いて考えればキモいのだろう。

俺はブサイクではない（と信じている）が、決してイケメンという容姿ではない……中の下といった感じだと自分では評価している……いや、これは重要な事じゃないな。

俺にとって『女の子を助ける』という行為に特別下心があるわけじゃない。単に幼い頃より女性を守るのは男の務めだと教え込まれていたことが原因である。

しかし彼女たちには、ちょっとしたことでも全力で助けようとする俺が気持ち悪く見えるのだろう。ってか、そうとしか思えない。そうでないと困る。それ以外の原因なんて俺には思い付かない……まあつまり、（良心的に解釈して）俺はせいぜい良い奴どまりなのである。

「ハア……」

必殺『溜息トルネード』

効果：幸せが逃げる（自分のみ）

「もしかして、俺って究極の駄目人間なのではないだろうか？」

と、マイホームの自室で一人ごちる。  
週に七回くらい疑問に思う内容だ。

- おい、駄目人間 -

なんか聞こえた。

「誰だ！駄目人間を俺なんて呼んだ奴は！！」

どこから聞こえたのかも分からない不気味な声に俺はいきり立つ。  
馬鹿にされて黙っているほど俺は温厚じゃない。

- 逆だ、逆…… ツツコミどころ満載な奴め -

なんか姿無き声にまで呆れられた？

- まあ良い…… おい駄目人間、一つ訊いてやる -

なんか随分偉そうだ。

誰だよ？お前。

- チツ、面倒くさい奴…… こっちでは先に名乗らないといけ

ないのか…… -

なんかぶつくさ言ってるけど、名乗るのは重要な事だぞ！

- 神だ -

ありがとう。

どこか遠い世界で幸せになってくれ。

- 待て待て！貴様の様な駄目人間に呆れられたとあつては末代までの恥になってしまふ！話は最後まで聞け！！ -

仕方がない、聞いてやろう。

- なぜ貴様、そんなに偉そうなのだ -

聞かなくてもいいんだが？

- うわ！待て待て！話す話す！！話を聞いてくれ！！ -

分かった分かった、焦らなくて良いから。

そんなに俺に呆れられるのが嫌なのか？

- クソッ……まあ良い。我はある世界を支配する神だ -

………寝て良いか？

- 駄目だ。さて、名乗ったところで一つ訊いてやる -

全然、納得できないんだが……

- 黙ってる。おい駄目人間。貴様、やり直したくは無いか？ -

うん？

どういうこと？

- つまり、勉強はできず、スポーツでは折角の特技を持て余し、おまけに奇異な信念のせいで人には忌み嫌われる…… -

待って！？俺って忌み嫌われてるの！？ショックだ……

- ああ、死んだ方が良いとまで思われてるようだな。貴様、友達いないだろう？ -

言われてみれば、俺に友達……いたっけ？

……いない。

「鬱だ。死のう。」

俺はダンスに仕舞ってあるタオルを適当に擦ると首に巻き付け……

- 待て！だから、そんな駄目な人生を別の世界でやり直してみたくはないか？と訊いたのだ！！ -

俺はその言葉を聞き、ゆっくりとタオルから手を離すと、

「やり直したい！」

即座に答えた。

- 良からう -

そんな満足そうな姿無き声が聞こえた後、俺の目の前の風景がグニヤリと歪み、やがて視界がホワイトアウトした。

.....

.....

.....

.....

.....

...

現在に至る.....意味わかんねえ!!

## 二章 “とりあえず服を着たい”

どうしようわけが分からない……

冷静に自分の行動を振り返ってみただけ、あの意味不明な声に「人生をやり直したい」って答えたらこんな状況だった、っていうことにしかないよなあ……

「どうしたら良いんだろう?」

独り言は癖だ。

友達がいらない(ついさっき自覚)俺には、俺自身が数少ない話相手である。

だから、独り言に心の中で答えるというのは一つの俺のコミュニケーション手段なのだ。

ただし、自分一人に限る。

「あの……」

その時、女の子から声をかけられた。

破壊的に可愛い、紅い髪の女の子だ。

ただし全裸……当然、俺には直視できず。

「お名前を、教えていただけませんか?」

そう恐縮気味に俺に問うてくる。

確かに、お互いこんな意味不明な場所で全裸で出会った人間同士だ。コミュニケーションを取るためにも名前は必需品だよな。

「あ!私、フィニフィアンって言います。フィニフィアン・



シウルツです。長いのでフィニって呼んでください。」

人に名を尋ねる時は先に名乗る礼儀だと思い出したのか、女の子は丁寧な口調で自身の名を告げる。

「分かったよフィニ。俺、來生賢人。後に来るのが名前で、前のはファミリーネームね。」

「ケントさんですね……わあ、変わったお名前なんですね。」

日本ではまったく珍しくないんだけどね、そう言おうとしてやめた。

その代わり「俺は『フィニ』って呼び捨てにさせて貰うし、フィニも俺の事は『ケント』って呼び捨てで良いよ」と言っておく。

フィニは「じゃあそうさせて貰いますね、ケント。」なんて良い笑顔で言ってくれた……めっちゃ可愛い。

「ところで、フィニってどういう状況でここにいるの?」

そこで俺は一番気になっている事を聞く。

なぜならフィニは俺と同様にこの場所で全裸でいるのだ。

俺がここへ来る際に巻き込まれたこの世界の人か、もしくは別の世界からこの世界へ来た俺と同じ境遇の人が、という二つの可能性があるからだ。

結果として、予想通りフィニは後者だった。

「私は……その……」

そこでフィニは口ごもる。

「ああ、いや、言いにくい事は言わなくて良いんだけど……」  
「いえ、信じていただけるか不安で……」

その時のフィニは随分と弱々しく見えた。

「心配しなくても、大概の事は受け入れる器をもつてと思うぜ、俺は。なんせ俺自身も、ついさっき信じられない体験をしたとこだしね。」

だから俺はそう極めて明るく言ってる。  
俺の予想が正しければ、フィニはほぼ俺と同じ境遇なのだから。

「ありがとう、ケント。私、実は自分の周りの世界に嫌気が差してて……そんな時に不思議な声を聞いたんです。『別の世界で人生をやり直してみないか？』って……気付いたらこんな場所に……」

やはりそうか。

「でも、信じられませんか。別の世界なんて……」  
「いや、信じるよ。実は俺もなんだ。」  
「え？」

驚いた様な声は出したが、表情はそれほど驚いているようには見えない。  
恐らくフィニも俺の質問や言葉から、俺の大凡の境遇は当りをつけていたのだろう。

「俺も自分の世界が嫌でさ。俺って駄目人間じゃないのかな？なんて悩んでたんだよ。そしたら『別の世界でやり直さないか？』

なんて変な声が聞こえて、気付いたらここにいたってわけ。」

「そうなんですか？じゃあケントは、また私とは違う世界からここに来たんですね。」

俺にとってもフィニにとっても、もうこの場所が自分たちの住んでいた世界ではない事は疑いようが無い。

謎の声は『別の世界』と言っているし、口振りからして世界は沢山あるようだから、俺とフィニのいた世界もまた違うのだろう。

「うーん、あの声は自分の事を『ある世界を支配する神だ』なんて言ってたから、今いるこの世界が多分その世界なんだと思うけど……」

「私も聞きました。でも、その神様は何がしたいんでしょう？」

困った。

何に困ったかというと、手を顎に当てて顔を傾げるフィニが可愛過ぎることに。

しかも全裸。

そうだ、いつまでも全裸でいるのは良くない。

特に女性の裸なんて直視できない初心な俺の精神衛生上良くない。

ただどこは草原のど真ん中。

大事な所だけでも隠そうにも、ここには細長くて丈の低い雑草しか生えてないっばいから、それすらできない。

「こういう時はアレだ！」

「何ですか？アレって……」

俺はそこでとある妙案を思い付いたが、どうやらフィニには分らなかったらしい。

「簡単だよ。責任者出てこい！」

そう例の“声”を呼び出したらしい。

神様なんだし、人生をやり直すにしても、今どうなっているかの説明くらいはさせるべきだろう。

後、服も用意させよう……これ重要。

「……………」

「あの……何も起きませんね。」

静かだった。

「なんだ？」

「うわっ！ビックリしたぁ……………」

まさかの時間差攻撃だ。

きつとこの神様は性格が悪いに違いない。

「あの、ケント？どうしました？」

すると、そこにフィニが心底不思議な物を見る表情で声を掛けてくる。

あれ？この自称『神』の声聞こえてない？

「自称ではない。我は本当に神だ……まあ良い。今は貴様だけに声を掛けておる。」

ふうん。

で？

- 我を呼んだのは貴様であろう？ -

そうだよ。

だから納得のいく説明を要求する。

- どうもこうもあるまい。我は貴様の様な駄目人間に人生をやり直す機会を与えてやったのだ。感謝しろ -

分かった！

お前馬鹿なんだ！

やゝい、バアカバアカ！

「あの……ケント？」

そこでフィニが怪訝な表情で再度俺に声を掛けてくる。

「ああ、なんか例の“<sup>バカ</sup>声”が俺だけに話しかけてるみたい。」  
「え……と……アハハ。」

だから俺は包み隠すことなく真実を答える。

俺のあまりにも言い方に流石にフィニも苦笑いをするばかりだ。

- 齒に衣着せぬ小僧だな、まったく……だが、そこまで真実を求めるならば仕方あるまい。教えてやろう。貴様ら二人は元の世界の神に嫌われた存在なのだ。嫌われた経緯は違うがな -

え！？

俺って神様に嫌われたの！？

- うむ。生まれてくる前から嫌いだったそうだな。だからそんなに駄目人間なのだな。ちなみに我も貴様の事は嫌いだぞ -

うつさい……泣くぞ。

- 貴様らの世界の神は貴様らを世界から手放したかったのだ。物の都合、我も自分の世界の事で悩みがあつたのでな、解決のためにも貴様ら二人を引き受けることにした -

悩みて？

- 今は知らなくて良い -

そうかい。

まあ何だかんだで俺がこの世界に来る破目になつた経緯は分かつた。で、俺達はどついたらいいんだよ？

- やれやれ……その場所から西に10キロほど進んだ場所に小さな村がある。そこで勝手に情報収集しろ -

なんてぞんざいな神なんだ……

ところで、キリってどういう単位？

- 1キリは貴様の世界で言う1、467キロメートルに相当するこの世界の距離の単位だ。分かつたな？では我は行く。我も忙しいのでな。さらばだ -

あ！消えやがった……

「待ちやがれ！」

そう叫ぶが、“声”が応える事は無かった。

「ケント？」

突然叫んだ俺にフィニがやや不安げに声を掛けてくる。

「ああ、何でも無いよ。それよりここから西に行ったところに村があるらしい。目的も分からないし、とりあえずそっちに行ってみようか？」

『元の世界の神に嫌われた』というフレーズが嫌に引っかけたが、しかし俺はそれをフィニに告げることはせず、“声”が教えてくれた方向を指差しながらフィニにそう提案する。

「そうですね。そうしましょう。」

フィニは何を疑問に思う事もせず、俺の言葉に柔らかく微笑んで同調してくれた。

「あ！服どうしよう!？」

なんかだんだん自然になってきて忘れていたが、俺もフィニもまだ全裸なんだった……

なんで全裸なんだよう……肉体しか世界を転送できなかったってどうせ言うんだろ？神のくせに……

こんな可愛い子に全裸を見られるなんてトラウマだよ？よく考えた

ら自殺もんだよ……

まあ、代わりに可愛い女の子の裸が見れたから、それで帳消しだけ  
どき。

「あ、それなら大丈夫です。」

「大丈夫って？」

「私とケントに服を」

「へ？」

瞬間、温かな光に包まれたと思ったら、気付けば俺の体は確かな  
布の感触に包まれていた。

簡単なイラストの入った白地のＴシャツに前を止めずにジャケッ  
トを羽織り、下はデニム生地のパンツという俺の私服だ。

「わあ、それがケントの世界の服なんですね。」

そう感心したような声を出すフィニも衣服に包まれていた。  
なんだか服を着ちゃって残念な気もするけど、そこは考えない。

フィニの格好は日本人の俺からすれば一風変わった格好に見えた。  
黒っぽい色をした簡単なブラウスの様なものに袈裟掛けのスカーフ  
をつけ、何かの獣の毛で編み込まれたであろうシンプルな柄のマン  
トの様な外套を羽織り、セミタイトスカートを思わせる赤っぽい  
落ち着いた色合いの下衣であった。

よくフィニに似合っていて可愛らしかったが、今はそれどころじ  
やない。

「え？フィニ今……何した？」



### 三章 “言霊術師”

ほんとに今何が起きた？

だってフィニが一言口にした瞬間に俺とフィニが光に包まれて、そして服着てて……

で、折角の女の子の裸なのに……じゃなくて！！

「何したの？」

「あの私……実は言霊術師なんです。」

そんな世紀の秘密暴露みたいな顔されても、『コトダマジユツシ』なるものに全く聞き覚えのない俺としてはどう応えて良いかわからない。

「コトダマジユツシって何？」

仕方なく、俺はそのまま問い返す。

フィニは気を悪くした様子もなく、むしろ分からなかった事が嬉しいような表情で、それならばと説明を始めてくれた。

「えーとですね……私の世界では言葉には魂が宿るという信仰があるんです。」

それは何となく分かる。

日本にも似たような風習はあるからだ。

「その言葉に宿る魂を具現化する術がありまして、それを『言霊』と呼びます。」

「なるほど。その言霊を使える人を『言霊術師』っていうわけだ。」

フィニはそこで頷く。

コクという擬音が聞こえてきそうな控え目な頷きで、なんとも可愛らしい。

「それで、言葉に宿る魂を具現化するってどういう意味？」

「例えばですね…… 案山子よ」

フィニが何も無い空間を指差しながらそう言つと、途端にその場に人型に象られた木の人形が現れた。

「燃えよ」

次いで、フィニがその案山子を指差しながらそう告げる。

すると、いきなりその案山子が凄い勢いで炎を上げて燃え始めた。ほんの十数秒で案山子は燃え尽き、そこには単なる燃えカスだけが残る。

「え……と……まさか……」

「はい。私は自分の言葉をほぼ何でも現実にする事が出来ます。」

「例えば、フィニが『死ね』って言ったら……」

「……死にます。」

それ、なんてチート？

「ちなみにさ、言霊ってフィニの世界じゃ珍しいものでもな

いの？なんかさ、誰でも使えるものではないけど、割と使える人もいるよ的な……さ？」

最後の方は俺も不安になりながら訊いた。

「いえ、言霊は忘れ去られた過去の遺物です。恐らく、使い手は私だけかと……」

フィニが自身を『言霊術師』だと名乗った時のあの苦渋の表情は、つまりはそういうことなのだ。

行き過ぎた力は畏怖の象徴であり、侮蔑の対象……

同時に俺はフィニが『神に嫌われた』ということも理解した。

言葉を現実にするなんて、いかにも神の所業……フィニは神に近付き過ぎたのか……

「あのケント……私は、その……」

俺が衣服について困った表情を作ったのを見て、思わずフィニは言霊を使ってしまったのだろう。

それはフィニの優しさだ。

それでフィニが傷付くなんて間違っている……そして俺は女の子が傷付くだけは決して許さない男だ。

「そんな悲しそうな顔すんなって。言葉を現実に出来るなんて凄いいじゃないか！羨ましいぜ！」

そう極めて明るく言う。

実際、俺は嘘を言っていない。

そんな事が出来たらどんなに良いか、なんて一度も考えた事が無い

奴がいるはずがない。

「でも……私は……化物なんですよ？」

きつと元の世界で心無い連中にそんな風に呼ばれたんだろう。  
それこそ言霊の力で住み易い世界にでもしてやればいい物を、優しいフィニにそんな事は出来なくて……

「フィニが化物なら、俺は馬鹿者だな。ほら、俺の方がよっぽど悲惨だ。」

おどけて言う。

あくまで冗談という色を強く、同時に言霊なんて物は大した事じゃないという俺の本意を乗せて。

「プツ、クスクス。」

「お、笑ったね。その方が良いよ、うん。」

可愛い子は笑ってるともっと可愛いね。

「可愛い子は笑ってるともっと可愛いね。」

「え？……あの……／＼／＼／＼／」

はっ！？

思った事をそのまま口に出してしまった……！！

俺の言葉を聞いて思わず赤面するフィニ……めっちゃ可愛い。  
って、そうじゃなくて！

俺、今フィニに正面切って何を言いました？

「可愛い子は笑つてるともつと可愛いね」……死んだ方が良いですか？っていうか死んで良いですか？

「ご、ごめん。つい本音が……」

[ / ! ! / / / / / / / ]

何を言っているんだ俺え！！！！

本音って！おい！！

もうフィニの顔が湯でダコみたいに真っ赤で、このままだと頭に血が上って気絶する勢いだ。

それはまずい。

だから俺はこれ以上墓穴を掘らない内に頭を下げた。

「ごめん！悪気があったわけじゃないんだ！」

「……うん」

ちよつとフィーは泣き顔だった。

でも傷付いた感じの泣き顔じゃなかったのだから俺は安心した。

これがもし、傷付いた泣き顔だったら、俺は自分が女の子を傷つけたという事実になんて耐え切れずに自殺したことだろう。

「ほんと、ごめん！」

「そんな……謝らなくて、良いよ。ビックリしたただだから……そんな事、言われた事、無くて……」

その言葉には思わず顔を上げる。

「フィニほどの可愛い子が『可愛い』って言われた事が無いって？」

そんな馬鹿な。

フィニは元の世界でいたいだけ酷い扱いを受けたんだ……

「でも、そんなこと悪気があって言えたら凄いかも、クスクス。」

でもフィニは笑ってくれている。  
今、笑ってくれるのなら大丈夫さ。  
俺の傍にいる限り、フィニがこれ以上傷付く事が無いよう俺は全力を尽くすのだから。

「じゃ、じゃあ、村の方、行ってみようか？」  
「う、うん。」

まだいろいろと顔の赤い俺とフィニだが、とりあえず西にあると言う村へ向かって歩き始めた……歩き始めようとした。

「で、西ってどっち？」  
「その……どっちでしょう？」

見渡す限りの果てしない草原には方角を示す様な物は何一つ無かった。

「どうしよう？」  
「大丈夫ですよ、ケント。方角 西を示せ …… あっちみ  
たいですね。」

傷付けないと誓ったその場で俺はフィニの言霊言霊に頼ることになってしまった。

「なんか……ごめん。」

「アハハ。謝らないでくださいケント。心配せずとも、私は言霊を使う事にそれほど抵抗があるわけではありませんから。」

そう言うフィニの笑顔だけが救いだった。

良かった、傷付いてなくて。

ホッと俺は息を吐き、そして俺はフィニの指差した方向へ向かって、フィニと共に今度こそ歩き始めたのだった。

## 四章 “無気力な村”

俺とフィニは相変わらずの草原が続く代わりない景色の中を歩いていた。

「そういえばさ、さっきの獣は何だったんだと思う？」

「私たちがこの世界に来る際に都合悪く近くにいたこの世界の生き物なのではないでしょうか？」

フィニがそう予想を言ってくれる。

俺もそう思う。

なんせ、気付いたらあのオオカミみたいなのに囲まれていたのだ。もしかしたら彼らのテリトリーに入り込んでしまっていたのかも知れない。

彼らは侵入者を排除しようとしたただけだ。

食われるとこだったけど……

「元の世界でさ、あの獣に似た生物っていた？」

「そうですね、私の世界にはオオカミという生き物がいました、それに近かったような気はします。」

「そうなの？ いや、俺の世界にもオオカミっていてさ。やっぱり似てるよ。」

「そうなんですか？」

こうして話をしながら俺達は世界についての情報を交換していく。

話の中で分かった事だが、生物については俺の世界とフィニの世界では大きな違いは無い。



イヌやネコ、今の話で言えばオオカミなど俺の世界にいる生物はフィニの世界にもいるようだ。

ただ、俺達の世界では伝説の存在とされているドラゴンとかペガサスとかいう存在はフィニの世界では割と普通に生息しているらしい。

俺達の世界では超能力や魔法と言った物は眉唾であるが、フィニの世界ではそれが技術としてすっかり浸透しているとのこと。

俺の世界での文明が電気の力で発達したように、フィニの世界では魔法の力によって文明が発達したそうなのだ。  
また機会があれば詳しく聞いてみたいところ。

「あ！あれがそうじゃありませんか？」

三時間も歩いた頃だろうか、果てしない草原の中にポツンと孤立するように一つの集落が見えた。

自称『神』が言っていたように、確かに小さな村だ。

恐らく人口は500人にも満たないであろう。

「ケント、行ってみましょう。」

「あ、ああ。」

何が嬉しいのか、フィニは俺の手を引きながら少し歩調を早めた。

そんなことしなくても村は逃げないって……と、手を握られて気恥ずかしさ百億パーセントの俺は咳かなかった。

村の入口らしき場所に立っていた老人に「旅の方ですか？」と訊かれた。

老人は見た感じ年齢70といった風体で、腰を大きく曲げて杖を突いていた。

服装は貧乏な農夫といった感じで、半袖で継接ぎだらけの薄い生地  
のシャツのような上着にクウォーターパンツのような下衣。

老人は遠慮なく俺とフィニを舐めるように見渡し、そして怪訝な  
表情を作ったの先程の質問だ。

多分、見慣れない服装の俺とフィニに警戒心を抱いているのだろう。

旅人かどうか、なんと答えるか迷った俺はフィニに視線を送る。  
フィニも困ったような視線を俺に返してきた。

「まあ何でも良い。我々は余所者きみたちを歓迎しない。が、特段拒  
絶もしない。」

そう呟くように言う老人の声は甚く弱って聞こえた。

「だから、せめて村の者だけは傷付けなしてくれ。」

老人は祈るようにそう言って、村の中へ消えて行った。

「……」

「どういう……意味なんでしょうか？」

俺は何も言う事が出来ず、フィニも言葉の真意が分からないよう  
で俺にそう投げかけた。

勿論、俺はそれに答える事は出来ない。

「ま、まあ拒絶しないって言われたんだし、とりあえず入っ

てみようぜ。」

「そうですね。何か分かるかも知れせんし。」

疑問は残るが、とりあえず俺達は村の中へ足を踏み入れた。

現代日本で暮らしていた俺にはある意味新鮮な景色だった。

藁で編み込まれた屋根を四本の本が支えているだけの、壁さえ無いテントの様な家屋が並び、どの家も大きさも形も大して変わりが無い。

どの家にも近くには5メートル四方ほどの田畑が備えてあり、まさに農村と言った風体だ。

だが……

「なんか……おかしいな。」

「ええ。」

違和感にはすぐに気付いた。

村人たちに一様に覇気が無い。

脱力し切って動きが無く、まるで人形の様だ。

畑もまるで荒らされ放題で、新鮮な野菜など一切見当たらない。

形の崩れたキャベツらしき野菜などが申し訳程度に転がっているだけだ。

「ケント！あれを。」

「っ！」

その時、何かに気付いたのかフィニがある方向を指差す。  
俺も即座にそれに気付き、二人でその人物に駆け寄った。

その人物は完全に腕が折れていた。

腕がまったく有らぬ方向に曲がり、骨が皮膚を突き破る寸前なのか  
薄らと白い色が肌の上から見える。

だというのに、痛そうな素振りさえ見せず、切り株の上に座ってた  
だ空を無気力に眺めていた。

「あの！」

フィニが声を掛ける。

腕の折れているその人はフィニの声に微かに反応を示した。

「ああ……旅の人……か？」

声は消え入りそうなほど力が入っていない。

男性だった。

全く整えられていない無精髭を伸ばし、髪もクシャクシャで脂っば  
い。

頬はゲツソリとしていて今にも死んでしまいそうだ。

「その腕、大丈夫なんですか？」

俺は男の質問には答えず、腕を指差しながらそう問うた。

「ああ、何でも無いよ、こんなのはね。」

男は何かを諦めたかのようにそう答える。

「…… 治れ」

フィニがその痛々しさを見ていらなかったのか、男の腕を指差しながらそう口にする。

その瞬間男の腕はみるみる内に元の形に治った……医者いらずなんだな、なんて場違いな事を思う。

男は一瞬目を見開いたが、すぐに無気力な眼差しに戻る。

「これは驚いた。お嬢さん魔術師だったのか。ありがとう。でも……」

魔術師という単語は気になるが、それよりも男が言葉を切った話の続きの方が気になる。どうも楽しい話ではなさそうだが……

「意味が無いよ。この村は今日、滅ぶからね。」

どこか遠くから耳を劈く様な甲高い生物の鳴き声が聞こえた。

## 五章 “国崩しの竜”

一気に村の雰囲気が変わった。

何をするでも無く惚けているだけだった村人たちが、鳴き声が聞こえた瞬間両掌を合わせて何事かを祈り始めたのだ。

それは異質な光景だった。

村人たちは皆が皆頭を足れて、そして涙を流しながら鳴き声が聞こえた方向に向かって一心に祈っているのだ。

それはどこか宗教染みていたが、しかしそれは神の降臨を尊ぶ人間の表情ではない……終わりを向かえる顔だった。

「な……何だ!？」

「ケント!見てください!!」

フィニが促した方を見る。

すると、そこには山と見紛うほど巨大な生物の姿があった。

いや、今まで遠くに見える山だと思っていたのだろう。

それが見る見る内に大きくなり、やがてその姿の全容を現した。

それは竜と形容すれば良いのだろうか、それとも別の何かだろうか……

極めて猟奇的な鋭い牙がずらりと並ぶ巨大な口を広げた“そいつ”は、羽撃けば辺り一面を吹き飛ばしそうなほどの広大な翼を広げ、天を向いて一度大きく鳴き上げた。

「ハハ……なんだよ、アレ……」

自然と口から笑い声が漏れた。

人は恐怖の限界を超えるとむしろ笑えてくると誰かから聞いた事があつたが、まさか体験するとは思っても見なかった。

足が諤々と震える……咆哮によって震えた空気の振動は容赦なく俺の体を叩き付け、逃げなければならぬという考えすらも押し込めさせてしまう。

一瞬、あの竜に踏み潰されて死ぬ光景が克明に頭に思い浮かんだ。

「ケント！しつかり！！」

今にも気を失いそうな俺の意識を踏み留めさせたのはフィニの声だった。

フィニも泣き出してしまいそうな表情で俺の服の袖を摘んでいる。

「あれは私の世界でも生息しているカレイプスという種のドラゴンです。あの巨大さと、一匹で国に甚大な被害を起こす事ができるほどの強靱さから『国崩しの竜』と呼ばれています。」

しかしフィニは気丈だった。

なんとか俺を落ち着けようとしているのか、震える声で目の前の巨大な竜について教えてくれる。

フィニ自身も、そう口にする事で怯えている自分を必死に鼓舞しているようだ。

そのおかげで、俺は何とか冷静さを取り戻す事が出来た。

「ああ、ありがとうフィニ。」

落ち着く事のできた俺はフィニに礼を言う。

「いえ……それでケント、どうしましょう?」

フィニが問うているのは逃げるかどうかということだろう。  
どういうわけか、この村の人間は誰も彼もが全てを諦め、あの竜に  
踏み潰される事を受け入れているようだ。

それに、あんな生物を相手に立ち向かえるとは思わない……

「……っ!」

「ケント!」

しかし俺は見つけてしまう。

ついに村を踏みつぶせる位置にまで差し掛かったカレイプスの足下  
に、死にたくない<sup>……</sup>と泣きじやくりながら母親であろう女性に必死に  
縋りついている女の子を。

フィニの声すら耳に入らず、俺は全力でその親子に向かって走る。  
幸いな事に、何とか親子が踏み潰される前にカレイプスの間に躍り  
出ることが出来た。

同時に俺ごと親子を踏みつぶさんと足を振り上げるカレイプス。

あれ?女の子が傷付かないために割り込んだは良いけど……どう  
やって助けるの?

もしかして、俺……ここで死ぬ?

「う……おおおお!」

死のイメージを頭から叩きだした俺は声を張り上げて守るように



両手を広げる。

たとえ俺が死んだって、女の子だけは傷付けさせないために。

だが、どうやら神は俺の事を見捨ててはいなかったらしい。

まあこの世界の『神』ってアレだけど。

「守れ！ 弾け！」

フィニの澄んだ声が響き渡った。

俺を踏み潰さんとしていたカレイプスの足は見えない壁に阻まれたように止まり、そして押し戻されるように足を弾かれたカレイプスはたたらを踏む。

「ケント！ 大丈夫ですか？」

「あ、ああ…… た、たず、助かった……」

自分が助かったという実感が湧かなくて、俺はしどろもどろになりながらフィニに返事を返す。

フィニはその様子を見て、安心した表情を作る。

「ケントは優しいですね。」

フィニは俺を見てそう柔らかく微笑んでいった。

そんな仕草に俺は思わず心臓が跳ね上がったが、しかしそんな場合ではないと思い直す。

カレイプスは足を弾かれた事で崩した体勢を持ち直し、新たに現れたフィニを邪魔者と認識したようで、再び踏み潰さんと足を振り上げた。

「ごめんなさい。」

フィニの呟きは小さくて、それは隣にいた俺にしか聞こえなかっただろう。

今にも泣き出しそうな表情で、しかししっかりと意志を持ってカレイプスを見つめるフィニの表情を見る事が出来た俺にしか……

「倒れなさい」

瞬間、カレイプスは何も無い空間で足を踏み外したようにひっくり返る。

ドシン！という衝撃が襲い地面が揺れたが大した事は無い。

「本当にごめんなさい……」

最後にフィニはさらに小さくそう呟き、そして……

「消え去れ」

その光景は衝撃だった。

カレイプスがまるで空気に溶けていくように消え去ったのだ。

サラサラと砂が舞うように体が欠けていくカレイプスの姿はやがて完全に消え去り、後には影一つ残らなかった。

## 回想 “願いを叶える力”

私は一人、商店の連なる通りを歩いていた。単に夕食のための食材を買うためだ。

「あの………すみません。」

いくつかの店を見て周り、やがて目当ての魚屋に辿り着いた私は控え目な小声で奥にいる店主に話しかける。

「はい！なんですよ………おっと、これはこれはフィニフィアン様、今日はいかがいたしました？」

私の顔を見て、今まで威勢の良い大声で客に対応していた店主の声が一転して慇懃な物に代わる。

「はい、この魚とこの魚を………ください。」

「ありがとうございます。」

他の客が相手であれば「へい、まいど！」と声を張り上げる店主が、まるで気味の悪い人形のように丁寧に腰を折って挨拶をしてくれる。

「お値段は？」

「いえいえ、フィニフィアン様から金など取れませんよ。無料です。」

そう言って頑なに私が財布を取り出そうとするのを防ごうとする店主に私は折れて、一度だけ礼を言つと、私は魚を受け取って店主

に背を向けた。

背後で「チッ」と舌打ちをするような短い音が聞こえた。

「おい見ろよ。シユルツのお嬢様だ。」

「馬鹿。指を差すな。それで機嫌でも損ねられたらどうする気だ？」

そんなやり取りが聞こえた。

私は溜息を吐きたいのをグツと我慢し、気付かぬふりして通り過ぎる。

「ああ悪い。でもさ美人だよな。お近づきになりたいぜ。」

「救国の英雄だぜ？死ぬ覚悟があるなら、俺は止めないけどよ。」

「ああ、御免だね。女に命を賭けるにしたって、あんな化物はな。」

「同感だ。」

背後からそんなやり取りが風に乗って私まで届いた。

「……フウ」

今度こそ私は小さく溜息を吐いたのだった。

私には物心付いた頃から不思議な力があつた。  
ものを願い、そしてそれを口にする事で、どんなものでも叶うとい  
う力だ。

言葉にすればどんな願いだって叶う……それは言葉には言い表せ  
ない喜びだった。

一言でどんな人だって助けてあげられる。一言でどんな難問だって  
解決する。一言で国を襲う驚異すら退けられる。

やがて人は私を恐れた。その恐れが初めて形になって私に向いた  
のは、私が国を滅ぼすほどの強大な嵐を一言で鎮めた時だった……

二度とその力を使わないで欲しいと母に言われた。

「なぜ？」と訊き返しても母は首を振るばかりで何も答えてはくれ  
なかった。

「なんで使っちゃ駄目なの？私、人を助けたよ？国を救ったよ？  
それって悪い事なの？」と……私はあまりに幼い……あまりに幼い  
衝動的な感情で母に詰め寄った。

母の怯えた顔がやけに癪に障り、気付けば私は一言呟いていた……  
「教えてよ」「と……

結果、母の口から告げられた、私に対する恐怖と戦慄は、幼い私の  
心を砕くには十分だった。

言霊は失われたはずの伝説の魔法である。もはや、風化が激しく  
て何を書いてあるのかさえ分からない様な歴史書に薄らと書かれて  
いるという程度にしか現代には残っていない。

故に、もはや言霊がどんな物であったかすら、現代では分からない  
とされている。

古代蔵書図書館の禁書庫の奥の奥。

一国の王ですら閲覧することを許されぬ領域に、私は願って侵入した。

母の言葉に受けたショックで茫然自失状態だった私はこの時の事を良く覚えていない……ただ、ここなら過ぎた力が人に受け入れられる方法だって見つけれられるかも知れないと、そう思っただけだった。

時に置き去りにされたかの様な空気の流れる禁書庫のさらに奥、封印指定とされた数々の古書の中に『言霊』とだけ題された簡素な拵えの本が一冊あった。

私は惹かれるようにその本を手に取り、震える手で一頁ずつ捲っていた。

書かれていた内容は、私の持つ『願った言葉を現実にする力』について。

そう、私の持つ力は古代に失われたとされた伝説の魔法『言霊』だった。

涙が出てくる思いとはこの事だろう。

本の中には言霊術師の宿命まで書いてある。

『ただ一言で世界を救い、ただ一言のために嫌われよ』……と。

思えば私は人のため以外には言霊を使った事が無い。

今回、ここへ侵入するためだったのが最初と言えば最初だ。

私はいつだって言霊術師の役目を果たしていた。私はそのために生まれた存在だった。

それが何とも誇らしくて、それで私は涙を流したのだ。

だったら、私は嫌われたって良い。どれだけ傷付いたって良い。人を助け、国を救って、そして世界を守る。それが言霊術師として生まれた私の宿命だと感じたから。

でも、数年の時が経ち、私の決心は鈍っていた。

人を助けても感謝されない、国を救っても恐れられるだけ。見返りを求めたわけではないけれど、言霊を使うたびに私に向けられる忌諱の視線が強くなって行く事に、私は段々と辟易していった……それでも私は言霊を人のために使う事を辞めなかった。

やがて両親は死に、私一人が残された。

その頃には私は『救国の英雄』なんて呼ばれていた……人に忌み嫌われる救世主なんて笑ってしまう。

そう、いつだったかも忘れてけれど、私は急に気付いたのだ。言霊が……いや、私がこの世界で誰からも必要とされていない………されていなかったことに。

- 別の世界で人生をやり直さないか？ -

だからだろうか……私はどこからともなく聞こえて来たそんな言葉に、自然と頷いていた。

私と言霊が必要とされる、そんな世界を夢見て。

回想 “願いを叶える力” (後書き)

地の文ばかりで読み辛かったですかね(汗  
すいません^^;



## 第六章 “フィニの優しさ ケントの優しさ”

一つ思う……言霊ってスゲー！

何と言えいいのか分からない。その凄さを言葉に出来ない。ただ凄い。

フィニはカレイプスが一匹で国に甚大な被害を与えと言った。つまりカレイプスは 少なくともフィニの世界では 国が総力を挙げて倒さなければならぬレベルの相手だったという事だ。

それほどの敵を一撃……いや、一言で屠る力……  
忌み嫌われると言うのも分かるが、それ以上に俺はそんな力を扱えるフィニを尊敬した。

「う……う……ううう……」

しかしどうしたことが、フィニは泣いていた。

大粒の涙を眼からポロポロと溢し、手で口元を抑えるも止まらない  
嗚咽の音が甚く俺の耳に残る。

そう……フィニが傷付いている。

それは言霊術師であることによつて元の世界で受けた扱いを思い出したのか、それとも今フィニが“消し去った”カレイプスを想つてなのか……

きつと後者だ。

フィニは優しい。それこそ俺なんか足元にも及ばないくらい、その心は慈しみに満ちているんだろう。

人を簡単に殺す、ただいるだけで人にとって害悪を撒き散らすような、そんな存在であったカレイプス相手にだって、殺してしまう事を本当に悔い、涙するほどに。

「フィニ……」

傷付いたフィニに何と声を掛けて良いか分からない。

ハッ……女の子が傷付く事を許さない、なんてとんだお笑い草だ。現にこうしてフィニは傷付き、その傷を癒してやる事すら出来ないなんて……

何が、フィニが傷付かぬよう全力を尽くす……だ！

俺は……俺は……

「ケント……どうしてそんな泣きそうな顔をしているんですか？」

涙は止まったらしく、やや充血した眼を俺に向けてフィニはそう訊いてくれる。

今まで泣いていたのは自分なのに、泣き出しそうな俺の心を救うために、フィニはそう声を掛けてくれる。

「フィニこそ……っ！」

そこから先は言葉にならなかった。

フィニがまだ涙を流していたから。

「あれ？あれ？おかしいな、ちゃんと止まったと思ったのに……なのに、なのに……だって、ケントが泣きそうだから、傷付い

てるから、私が泣いてちゃ駄目なのに……」

どこまでフィニは優しいのだろうか。

自分が傷付いて悲しい時に、人の事を想うだなんて、言葉にするほど簡単な事ではないのに……

「良いよフィニ。俺は傷付いてなんかいない。フィニが傷付くのを助けられなかったのが悔しかったただけだから。」

俺がそう言つて、フィニは顔をあげた。

「そんな！私は傷付いてなんか！」

やや語気を強めて、フィニは意地を張つてそう言う。

俺にはそんな風に強がつて見せるフィニがとても痛々しく見えた。

「じゃあフィニは……言霊で生物を殺した事が……あるのか

？」

「っ！！」

そう言う事なのだ。

フィニは元の世界で生き物を殺した事が無い。  
その重圧がフィニを今押し潰そうとしている。

「殺してなんか……」

「同じ事……なんだろう？」

「……」

フィニは無言で頷いた。

フィニが口にした言葉は 消え去れ だった。  
だから文字通り、存在ごと消し去ったのだろう。

それはある意味において、命を奪うよりもさらに残酷な行為なのかも知れない。

でも、フィニは敢えてその言葉を選んだ。

なぜか？そんなもの答えるまでもない簡単なこと。

フィニは優しくかったのだ。

優しいから、フィニは村の人を殺そうとするカレイプスを止めたかった。

でも優しいフィニはカレイプスにだって苦痛を与えなくなかった。

だから、例えそれが命を奪うより残酷であろうと、フィニはカレイプスを“消し去る”事にしたのである。

それらは全て俺の推測だけど、その後で大粒の涙を流したフィニを見ていれば、俺の考えが間違っていないであろうことは分かるはずだ。

「フィニ。悲しいなら言っただけいい。傷付いたのなら強がらないで欲しい。」

強がるという行為は己を強く見せる為の行為であり、つまり心の傷を見て見ぬふりをする行為なのだ。

それを女の子が傷付かぬようにと行動していた俺は経験的に知っている。

「フィニには傷付いて欲しくない。傷付いたのなら、その傷を広げて欲しくない。」

フィニは俺の言葉を真摯に聞いてくれていた。  
口を挟まず、噛み締めるように、一言ずつ。

「だからさ、そんな悲しそうな顔で人の事まで気に掛けるのはやめろよ。まずは自分の傷を癒してから……それからだろ？」

「……………うん。分かった。」

もうフィニは泣いていなかった。

やや腫れぼったい眼をしていたが、でももうその表情に憂いは残っていない。

「やっぱそうだよ。可愛い子は笑ってないと。」

「フフ。もうそんな言葉で取り乱したりしませんよ。」

と、ちよつと顔を赤くしたフィニからの返事だった……………めっちゃ可愛い／＼／＼／

むしろ俺の方が赤面した。

でも、それを前面に出すのはさらに恥ずかしいので、

「そりゃ残念。」

と、軽く肩を竦めて誤魔化した。

「ケント。」

「ん？何？」

さて、祈った状態のまままだ状況が分かってない村の人たちに何を言おうか、と考えているとふいにフィニから声を掛けられた。

「ありがとう。」  
「っ！／＼／＼／」

完全に不意打ちだった。

今までの様な微笑みではなく、しっかりとした笑顔に思わず俺は顔を背けてしまうほどに動揺したのだった。

「ああ、いやいや、どういたまして……」

噛んだ……

「ブツ、クスクス。」

笑われた！？

悔しいので反撃する。

「こつちこそありがとな。」  
「ふえっ！？」

俺の感謝の言葉にフィニは素っ頓狂な声をあげて驚いた。

「ほら、カレイプスに踏み潰されそうになった時さ、助けてくれたろ？」

「ああ、いえ……はい、どういたしまして。」

そう言つて頭を下げた。

「あ、あんた達……もしかして……カレイプスをやっつけちゃったのかい！？あの災害の竜を！？」

その時になって、漸く状況に気付いたのか、俺が守ろうとした親子の母親の方が俺達に声を掛けて来た。

## 七章 “村長宅にて”

この世にはどうしようもない事がある、その体現だった。

フィニの世界で『国崩しの竜』と呼ばれていたというカレイプスは、この世界では『災害の竜』と呼ばれており、実際その有り様は災害その物と言えるだろう。

カレイプスは普段は自身の住处で大人しく寝ているだけの竜だが、至極たまに起き出して人里を襲う事があるのだそうだ。それがここ最近活発になっていたらしく、この近隣にあつたいくつもの村や町があのかレイプスに襲われて見るも無残な姿に変えられてしまっていたのだ。

当然、人は抵抗する。反撃もする。倒そうとする。

しかし、人智の到底及ばぬ絶対的な力の前に、成す術もなく人は散っていくのだ。

先程の腕が折れていた人物は、他の村がカレイプスに襲われそうになった際に急遽その村の救助に向かった人物であった。

しかし、そこにあつたのはカレイプスが畑を荒らし、家屋を吹き飛ばし、人を踏み躪る凄惨たる地獄。

男は打ち壊された家屋の一つの下敷きになって腕を折り、しかし運良くカレイプスに踏み潰されずに生き残った人間の一人であった。

男は助かった数名の仲間と共に命からがら村に戻って来られたが、村の中の空気は生き残った英雄を迎えようと言う物ではなかった。男が村に辿り着いた日から三日後、今度はこの村をカレイプスが襲うだろうという“予言”があつたからだ。



もう村の人たちは諦めた。

どれほど抵抗しようとも、人間などは紙屑の様に蹴散らしてしまうカレイプスの前では無に等しかったから。

また、カレイプスの恐ろしさを直接その目で見た男たちが、カレイプスが今度はこの村に來ると知った瞬間、幼子の様に恥も外聞もなく泣き出してしまったことも大きい。

絶望は瞬く間に村中に伝播したのだった。

「なぜ、逃げなかったのですか？」

フィニが問う。

「逃げた後、我々に生きていく場所はない。この村が我々が生まれた場所で、そして死に場所なんだ。」

入口からは見えないが、村の裏手には墓地があるという。  
この村ができてから、この村の中で死んだ人間全員の眠る歴史の刻まれた広大な墓地が……

それが、村で生まれ、村で生き、村で死ぬ我々の覚悟なのだ、と村長は語った。

「おにーちゃん、助けてくれてありがとね。」

ふいに脇から声を掛けられた。

俺が守った……守ろうとした、泣いて母に縋り付いていた女の子だ。

そう、親子は偶然にも村長の配偶者と娘だった。  
だからこうして感謝の言葉と手厚い歓迎と共に俺とフィニは村長宅に招かれている。

ちなみに村の入り口にいた老人は前村長であり、現村長の父親。  
この村では村長はこの家の長男がなるといふ決まりがあるとのことなのだ。

村長の奥さんは旅人らしき人物が村に来たという前村長の話を聞き、すぐに立ち去るよう俺達に警告をしてくれるために外へ出、それに娘が付いて来てしまったところでカレイプスが現れた……そういうことらしい。

ちなみに今、奥さんは家の奥に引込んでしまっている。  
なんでも腕に縋をかけて俺達を歓迎する料理を作ってくれるのだとか……なんか、申し訳ありません。

「だが、何度も言わせてもらうが、娘と妻を……そして村の者を助けてくれてありがとう。君達にはどれだけ感謝しても足りない。」

娘が俺達に感謝の言葉を告げたのを見て、また感極まったのか村長は涙ながらに俺達に頭を下げる。

「（実際、何度目だっけ？）」  
「（アハハ……何度目でしょう？）」

こっそり、聞こえない様にフィニと言葉を交わす。

村長はカレイプスについて話してくれながら、話の途中、何度も

何度も礼の言葉を繰り返してくれた。

勿論、助けた側として礼を言われることは吝かではないし、嬉しい事だ。

でも、数え切れないくらい同じ内容で頭を下げられては、いくらなんでも居た堪れなくなってくるという物だ。

「いえ、そんな大したことはしていませんので。」

俺は掌を振りながら村長に応える。

実際、俺何もしてないし……

「カレイプスを倒した事を何でも無いだなんて！そうだと聞かせたい！一体、どんな方法であのかレイプスをやったのですか！？」

村長がやや興奮した面持ちで俺に詰め寄ってくる。

「あ、あの……それは……」

フィニがまた思い出してしまったのか顔を暗くしてしまう。

フィニを傷つけた村長を思わず殴ってしまいそうになる。が、村長は言霊の事など知らないのだ……当然、フィニがカレイプスを消し去った事でどれほど心に傷をつけたのかも……

だから、俺は何とか殴ってしまう事だけは思い直す。

どうやら村長は俺が倒したと思い込んでいるようだし、これ以上フィニを傷付けないためにもここは全て俺の手柄にしておこう。それが優しさと言う物だ。

「この俺がグルツと投げ飛ばしてスパコオンと吹っ飛ばしたんですよ。」

「……………」

最低だった……まさかのダダ滑りだった……泣いて良いですか？  
フィニだけが、気を使ってくれてありがとう、とでも言うような表情をしていてくれたのが救いだった。

「あ！そうですか！これはお察しできずに申し訳ありません！」

すると村長による謎の謝罪。

まさか！俺のギャグを察せなかった事を！？

やめて！ギャグを察せなかった事を謝るのはやめて！！むしろ死にたくなるから！！

滑ったのならスルーしてよ！フォローとかやめよ？ね！？

それもう虐めだから！滑った人をギャグを言われた側がフォローするとか虐めだから！

「勇者様は自身の力をそう軽々しく人に教えたりは出来ませんよね……………すいません。」

時間が止まった気がした。

はい？ユウシャ？ユウシャって勇者？

何それ？新手の虐め？

「勇者って俺が？」

「はい！」

村長はいい歳して屈託のない笑顔でそう言った……言い切った。

「わー！おにーちゃん、ゆーしゃさまなの？」

女の子がキラキラした眼で俺を見ている。

その目の中に輝くお星様やめてっ！眩し過ぎるよ！

「え」と……勇者って何ですか？」

その俺の疑問が解消される事は無かった。

村長が何か答える前に、村長宅の扉がノックされたのだ。

「おや？どなたでしょう？少しお待ちくださいね。」

村長が席を立ち、扉に手を掛ける。

しかし、扉は村長が開くよりも前に、扉を跳ね飛ばさん程の勢いで開け放たれた。

そこには若い端正な顔立ちをした金髪の美青年が立っていた。

青系の装飾の施された鎧を着込み、腰には剣を携え、背中に盾を担いだ騎士然とした青年は、その表情を厳しく引き結んでいる。

差し詰めは初任務に張り切る若い兵士と言った風体だ。

「私は帝国騎士団シュレン隊隊長シュレン・クル・ルグタン  
スと申します！貴殿の依頼を承り、カレイプス討伐のため馳せ参  
じ  
た！」

いろいろ言いたい事はあるが、とりあえず一つ思う。  
こいつ……めんどくさそー

## 八章 “口は災いの……”

村長は嬉しさ反面、困惑したような表情を浮かべていた。

「おや？来ては頂けないものと聞いておりましたが？」

何となく察した。

村長はカレイプスがこの村を襲うと知った時、国に救助を依頼していたのだろう。

だが、国からの返事は芳しいものではなかった……つまりこの村は国に見捨てられた村だったわけだ。

「なんか……あの神様殴りたくなってきた……」

「あ、アハハ……」

俺のそんな呟きにフィニは苦笑いを洩らすが否定はしなかった。

「自分が無理を言って部隊を出させて頂きました！民を守るのは我々の務め！国が民を見捨てるなどあってはならぬ事です！！」

美青年……シュレンはそう熱く語る。  
なるほど……空回り野郎か……

「それで？カレイプスはどこです？我々シュレン隊が蹴散らしてくれましょう！」

おー言い切ったよ。

国崩しの竜だぜ？災害の竜だぜ？

それを倒すだけならいざ知らず、蹴散らすときたか。

「ちなみにフィニの世界ではカレイプスを倒すにはどれだけの人間が必要だった？」

「そうですね……国の最強クラスの精鋭たちが200人……といったところでしょうか？普通の兵士では1000人は欲しいですかね。」

つまりフィニは文字通り一騎当千というわけだ。

さて、このシュレン隊とかいうのがどれほどの規模か知らないが、扉の外の気配からして一個中隊もいるとは思えない。

当然、俺に気配を読むなんて高尚な事はできないが、まあ百人単位で人がいればさすがに俺みたいな一般ピーポーでも分かるよ……多分。

「それはそれは、わざわざこんな辺境の村にまでありがとうございます。ですが御心配には及びません。こちらの勇者様が既にカレイプスを倒してしまわれました。」

「勇者？」

そこでシュレンは初めて気がついたと言わんばかりに怪訝な表情を俺達に向けた。

いや、睨んでいると言っても過言ではない。

「貴様ら、何者だ？」

まあ見るからに怪しい俺達だ。警戒するのも分かる。でもさ、いつだって抜刀出来るように手を剣の柄に添えるくらい敵

意を剥き出しにするのはやり過ぎだろう。

そんな目で睨むなよ……反抗したくなるだろ？

「人に名の聞くならずは先に名乗るのが騎士道つてもんだろ？まさかそんな格好しておいて、自分は農民です、なんて言わないよな？」

「な！貴様！」

シュレンのその端麗な表情を怒りに歪め、語気を強める。

え？なんでわざわざ怒らすのかって？

イケメンは敵だ！……とか思っていますよ。ええ、思っていますとも。

元の世界でイケメンに好きな子盗られた恨みとか全く持っていますよ。持っていないって。

「け、ケント！？」

俺の露骨な挑発にフィニが不安そうな表情を俺に向ける。

大丈夫だって。

今時こんな挑発、小学生だって乗らないよ。

と、そういう意思を込めて軽くフィニに手を振って応える。

「よかるう。私はシュレ……」

「シュレン＝クル＝ルグタンスさんだろ？知ってるぜ。」

「き、さま……馬鹿にしているのか！？」



シュレンの表情が怒りのあまり見る見る赤く染まっていく。

「ああ、俺ケントツ一の。よろしく。」

最後にあくまで軽い口調で名乗る。

騎士道を重んじるタイプにはこういうのも結構イラッてくるんだよね。

まあそれだけなら俺の立場はちょっと嫌なやつ程度で済んだんだろうけど……

「貴様ら臆病者の役立たずが国で尻込みをしているうちにこの勇者様がカレイプスなどやつつけてしまったわ！ほれ、帰れ帰れ。」

村長が火に油を注いでいた……おいおい。

まあ考えてみれば、この騎士達の到着はカレイプスがこの村にやってくるのに間に合っていない訳で、俺達がいなければこの村は間違いなく滅んでいたんだよね。

そこへいくと、村長からすれば国から見捨てられたと感じる訳でまあ実際見捨てられていた訳だけど 国への恨みはこの若い騎士に向く訳だ。

となれば、俺の挑発に乗っかって言いたいことを言ってしまうおうという村長の……まあなんだ？よく言えば子供心ってやつだ。

「だいたい貴様のような若造などカレイプスに敵うか！馬鹿者。」

いやーシュレンって俺よりは年上に見えるけどねー

あ、ちなみに女の子はシュレンが家に入ってきたのを見て、大人の話だと察したのか奥へ引っ込んでいった。  
空気が読める子って素敵だね。

「貴様など勇者様の手にかかればちよちよいのちよいだ!」

あれ? 話が変な方向に……

と、思ったときには遅かった。

「つまり、私はその男よりも劣った存在だと、そういうことですね?」

あれ? あれ?

なんかシュレンの握り拳がプルプル震えてません? 額に青筋生えてません?

こういうのって何て言うの?  
いわゆるキレた状態ですか!?

「ケント、私の国には愚か者を戒める『戒訓』というものがあるですよ。」

「へえ、そうなんだ。」

日本で言う諺みたいなものかな?  
でも、なんでフィニは今そんな話を?

「その中に『争いは口から起こる』というものがあります。」

あーなんかそれ聞いた事ある。

日本にもあるね。『口は災いの元』っていうの。

「私、シュレン＝クル＝ルグタンスは貴様に決闘を申し込む  
！」

へ？

「ケント、頑張ってください。」

ニッコリ微笑みながら俺にそう言うフィニの口調には、なんだか責めるような気配が漂っていた。

## 九章 “決闘って……喧嘩？”

シュレンが「表に出ろ！」と言うので仕方なく後ろについて外へ出た。

そこには二十人余りの似たような格好をした兵士たちが並んでいたが、どうもその表情は微妙な物だ。

まあそうだろう。カレイプスなんて強大な敵に立ち向かうと思って気を引き締めてやって来てみれば、そこにあつたのは喜び勇んで涙を流す村人たちの姿だったのだから。

つかむしろ、シュレンは村長の家に着くまでこの空気に気付かなかったのかと問いたい。

多分気付かなかったんだろうなーなんかシュレンって顔は良いけど馬鹿っぽいしー

「また隊長の悪いクセが出ちゃったぜ。」

「ああ、あれさえなければな……」

「全く……鬼神の様に強いくせに、なんでああも頭が弱いのか……」

そんな周りの騎士たちの話し声が聞こえる。

やっぱりか、と呟きたい。つか、それで良いのかシュレン隊の諸君……

「それにしてもあの男は何者だ？」

「シュレン隊長との決闘に応じるなど正気とは思えんな。」

「隊長と一騎打ちで勝てる人間など、帝国内には一人しかお

らぬというのに……」

聞こえてるよ皆さん……

この人そんな強いのか？

悪いけど、俺って一般人ですよ？

ちよつと喧嘩は強いかなーってぐらいの、素人なんですけど！？

「なんでも村長がああ男を勇者だと仄めかしていたとか。」

「勇者って、ああの『鳳印』<sup>ホウイン</sup>のか！？御伽話じゃないのか！？」

「それは分かんが……しかし、もし伝承通りの勇者だとすれば……あるいは……」

すまん……期待には応えられそうもない。

だって俺って駄目人間なんだもん。(自虐)

あと、仄めかしてないぞ。盛大に言い切ったよ。

あーあ……調子に乗った結果がこれだよ……

「ケント！頑張って！」

なんかフィニの応援が辛い……

謝ったら許してくれないかなあ。

「ね、ねえフィニ？」

「何ですか？ケント。」

「ごめんなさい、許してください。」

「駄目です。挑発したのはケントなんですから、ちゃんと責  
任取らないと。」

敵しかった。

でも一つ言わせて貰いたい……実際ブチギレさせたのは村長ですよ？

「勇者殿！どうぞグルツと投げ飛ばしてスパコオンと吹っ飛ばしてやってください！！」

ってか村長テメエ、それが見ただけだろ！

それが見たいただけにシュレンを俺に喉けやがったな！

「では、行くぞ。」

シュレンは腰の剣を鞘から抜き放って右手に握り、左手に盾を構えて言う。

剣は真っ直ぐな両刃の刀身が80センチほどある、確かロングソードとかいう西洋風の剣だ。

いつの間にか俺とシュレンは他の騎士たちに囲まれた円の中で向かい合っていた。

つまり彼らが立会人にして、逃がさないための柵ってわけか……

村人達も流石の物々しい雰囲気、なんだなんだと野次馬の様に集まって来た。

「おい待て！お前は丸腰の人間相手に剣を抜くのか！？」

今にも襲いかかって来そうな雰囲気シュレンに向けて俺はそう叫ぶ。

「フツ。グルツと投げ飛ばしてスパコオンと吹き飛ばす男に

武器がいるのか？」

こいつ……村長の言葉聞いてたのか……

「では、参る！！」

シュレンは右手の剣を大上段に振り被り、俺に向けて叩き付けて来た。

あーこれは直撃したらしぬなーと、俺はどこか他人事のようにその動きを観察していた。

剣の切っ先が俺の脳天を掠め、刃は迷う事無く俺の眉間にめり込むだろう。

そんな剣の軌道が見えた。

「メタルスライムってきつとこんな心境なんだろうな。当たったら死んじゃう。」

某有名なゲームの凄まじい回避率を誇る敵キャラの名前を呟きながら、俺は体を半身にし、また少しずつ事で難なくその剣を回避した。

「なに！？クッ！」

シュレンは驚いたようだが、すぐに振り下ろした剣を切り返し、俺が避けた方向へ今度は横薙ぎに振るってくる。

剣の切れ味とシュレンの実力次第だが、とりあえず当たれば俺の上半身と下半身が両断される軌道だ。

「でも、まあ当たらないよね。」

しゃがんで避ける。

避けられるとは思っていなかったであろうシュレンは、剣を思い切り振り抜いたせいで体勢を崩した。

「とりやつ！」

「アゲツ！？」

流石に鎧部分を殴っては俺の手が壊れてしまう。

そんなわけで、俺が最も気に入らない部分、すなわちイケメンの顎に思い切りアッパーカットをブチ込んだ。

シュレンは吹っ飛ぶような事は無かったが、流石の衝撃にフラフラと二三歩後退した。

「俺ってさー実は地味に喧嘩だけは強いんだよねー」

駄目人間かも知ないけどさー、と付け加えようとして……やめた。理由は……推して知るべし。

「ふん、戯言を。この程度で倒れる私ではないー！」

まあ若いっばいけど、むしろ若くして隊長なんて役職についているだけにそれなりに歴戦の勇士なんだろう。

油断していたから今一発入れれたけど、多分もうそんな隙は出来ないよな……

「うわっ！おっと！うひっ！」



迫りくる止まらない斬撃を俺は全てギリギリで避ける。

ロングソードは片手で扱うための剣だと、昔誰かに聞いた事がある気がするけど、それにしたってこんな速度でガンガン切り返せるなんて異常だ。

俺には一応動体視力って言う特技があるし、身体能力もそれなりに自信あるから何とか避けられるけど、これはそこらの奴ではあつという間に細切れにされてしまうだろう。

俺だって気を抜いたら一瞬でこの世からサヨナラだ。

いや待て待て……『俺だって』って……調子に乗るなよ俺……  
今こうして俺が避けられてるのが既に奇跡だろうがよ。

とか考えていたら、ふいに斬撃が止まる。

うん？と思ってシュレンを見ると何やら不敵な表情で俺を睨んでいた。

「なるほど、その身こなしは素人ではない。」

素人ですけどね。

「カレイプスを倒したというのもまんざら嘘と言うわけではなさそうだ。何か切り札があるんだろうな。」

倒したのは俺じゃないし……まあ、切り札って言えば確かに最強のがあるけどさ……

「ふん。私の剣術はそれほど褒められたものではないが、そ

れでもここまで避けられるのは流石に悔しいな。」

え？寝められたものじゃないって？

でもあんだ、『帝国』とやらで二番目に強いんだろ？

さっき部下達が言ってたぜ？

「ならばもう小手調べはやめよう。少し力を出そう。」

出さなくて良いって！！

「おい！隊長がアレを出すぞ！」

「分かってる！総員！村人に被害が出ないように全力で守れ！

！」

「「「「「はっ！！」「」「」」

ああなるほど。俺達を囲んでいる騎士は何も俺を逃がさないための柵だけじゃなく、シュレンが実力を出した時のとばっちりが周りに行かないように守るためでもあるのか……

……そんなに危険なのかよ！シュレンのアレとやらは！！

「【精霊よ】」

シュレンは剣を腰の鞘に戻し、空いた右手を上空にかざしながらそう唱える。

「【破壊を求める業火の理】」

その右手に何やら言い知れぬ力が収束していくのを感じる……言うまでもなくヤバげだ。

「【獣を象りて敵を撃ち砕け】」

シュレンが上空にかざしていた掌を地面に叩き付ける。

瞬間、地面から噴出した何本もの火柱がグネグネと蠢いて何かを象り始め、最終的には何匹もの炎の獣が出現した。

うん……俺、ピンチ……

## 十章 “喧嘩両成敗”

えーと……1、2、3、……6匹……

何度数えても6匹の炎の獣がシュレンの足元に出現している。

何だよそれ……反則でしょ？

「卑怯だぞ！決闘つてのは一対一じゃないのかー！」

「何を言うか！魔術は我が技術であり我が身の一部！故にこれらは全て私の分身たちだー！」

マジユツね……あーはいはい、魔術ですか……なるほどなるほど。

「つまりシュレンとやらは丸腰の人間相手にも大勢でないと怖くて戦えない臆病者と言う事でオーケー？」

「貴……様………まだ私をそもも愚弄するか！」

あれ？プライドを煽って魔術とやらを引っ込めさせる作戦だったんだけど……

もしかして、失敗？

「許さん！その罪！全霊をもつて贖わせてやるー！掛れー！」

「ってえー！やっぱりそいつら嚇けてくんのかよおー！」

シュレンが右腕を振った瞬間、6匹の炎の獣が一斉に俺に向かって襲いかかってくる。

俺は右方向に身を投げ捨てるように飛び込んで何とか初撃は回避。次の攻撃が来る前にすぐさま立ち上がる。

炎の獣は散開し、6匹で円を描いて俺を取り囲んでいた。

「これはアレですか？逃げ場無しってやつですね……」

そんな事をばやく。

炎の獣は俺から絶妙な間合いを取りながら、いつでも飛びかけられる体勢を取って俺を睨み続けている。

俺が一瞬でも隙を見せようものなら一気に襲いかかってくるだろう。

「謝れば、今なら許してやるぞ？」

そこにシュレンのありがたいお言葉。

そうだと謝ってしまえ。

そつすりや騎士道を重んじるであろうシュレンの事だ。

戦意の無い相手に襲いかかるような真似はしまい。

だから俺は一度ぐくりと喉を鳴らし……

「御免だね。お前みたいな頭の悪そうな奴に下げる頭は持つてねえんだよ！」

気付けばシュレンに向かって一気に駆け出していた。

丁度炎の獣同士の間隙にシュレンは立っていて、即座に殴りかければ炎の獣に襲われる前に一発くらい殴れるかも知れない。

「愚かな……だが、その心意気は認めてやろう！」

シュレンは腰の剣に再び手を掛け、抜刀する。  
同時に、周囲から炎の獣が襲いかかって来た。

予想より動きが速い。

俺とシュレンの距離は約2メートル……一歩で踏み切れなくもない距離だ。

だが、この速度では俺の拳が届くより、炎の獣が俺に突撃する方が早い。だから……

「だからテメエはアホなのさ！」

「何！？」

俺は殴るのではなく、そのままダイブしてシュレンの脇下を潜り抜ける。

殴るにはロスタイムがあるが、もともと身体能力の高い俺だけに、そのまま飛び込むなら殴るよりも遥かに速い。

結果、俺を追いかけていた炎の獣はシュレン自身が壁となり、そのまま“壁”に激突する。

「ガッ……ハアッ！」

シュレンは右手の剣を一閃、炎の獣を薙ぎ払った。

故にシュレンにダメージは通っていない。

しかし、切り札まで避けられては、シュレンの精神的ショックは相当だろう。

そう思ったのだが……

「なるほど。これでも駄目か。面白い。」

なんかむしろ良い表情をしていた。

あれ？切り札って破られたらショックなもんじゃないの？

「ハイルルにはとても敵わないが……貴様、ケントと言ったな？」

「ああ、そうだけど？」

「良いな。貴様、丁度良い。私は実力が近い相手と戦いたかったのだ!!」

ヤバイ！？なんか凄い良い顔してる！

「いかん！隊長は本気を出す気だ！」

「総員！命を捨てる覚悟で挑め!!」

「ハッ!!」「ハッ!!」「ハッ!!」

待つて！？とばかりが周りに行かないようにする人たちが命懸け！？

銃口を直接向けられる俺はどうすればいいの！？  
死にたくないんだけど!!

「【精霊よ】」

今度は剣を握ったままシュレンは唱え始める。

「ケント、反省しましたか？」

しかし、そこでシュレンの動きなど何でも無いかのような気楽な

口調で背後からフィニに話しかけられた。

「うん！反省した！もう二度と軽々しく挑発なんてしません！」

とてもシュレンから目を話す事など出来なかった俺は、その姿勢のまま心の底からそう叫ぶ。

「そうですね。それなら……」

フィニはそこで一旦言葉を切った。その間にもシュレンの詠唱は続く。

「【崩落を求める破滅の理】」

ゴゴゴゴと地響きが鳴り響き、シュレンの持つ剣が何やら怪しい輝きを帯び始める。

「【剣に纏いて大地を切り裂く力となれ】」

ピッカー！と眩しいほどの輝きを放つ剣をシュレンは上段に振り被り、俺との間合いなど関係なくそのまま振り下ろす……振り下ろそうとする。

「止まれ」

フィニが小さくそう呟いた瞬間、シュレンは剣を上段に構えた体勢のままピタリと制止する。

「なっ！？なんだこれは！！貴様！何をした！？」



俺は何もしてないけどね。

この後、何が来るか何となく分かった。

だから俺は何とか堪えようと両足を踏ん張ることにした……意味無かったけど。

「喧嘩両成敗」

「ブゲツ！」

「ゲハッ！」

上からの膨大な圧力が俺とシュレンを纏めて叩き潰した。

## 十一章 “ 帝都への招待 ”

勿論、フィニが俺達を殺そうとするはずなんて無いから、言霊の威力も俺とシュレンの意識を奪う程でもなかった。

「痛い……」

痛くて泣きそうだ。

きっとフィニは分かってないんだ……意識が飛んだ方が楽な事もあるって……

「う……くっ……今のは一体？」

シュレンはそんな事を呟きながらゆっくりと体を起こす。  
同時に俺もシュレンに隙を見せぬよう起き上がった。

「おい今の……」

「ああ、隊長を地面に倒れさせるなんてハイラル騎士団長以外に出来る奴がいたのか！？」

「ケントとやらと一緒にいるあの女が何か言っていたが、魔術が発動した形跡はないし……まさかあれが勇者の力だと言っのか！？」

「しかし、その割にはケントも一緒に倒れたぞ？」

「力が膨大すぎて扱えていないのか？」

次々とそう囁き始める騎士達。

なんだか話が勘違いの方向に収束し始めているような気がする。

「いや、今は……」

「凄いなお前!!」

全部フィニの仕業です。俺は何もしていません。と、そう言おうとして、その前にシュレンに割り込まれた。

地面にキスする羽目になったというのに何て良い笑顔なんだろう

……

「すまない。私は君を……ケント殿を見くびっていたようだ。無礼を詫びさせて頂きたい。申し訳なかった。」

そう言つてシュレンは俺に頭を下げる。

その表情は本当に申し訳ない事をしたという反省に満ちていて、もの凄く心苦しくなった俺は思わず謝り返した。

「いや、こつちこそすいません。よくわからない意地を發揮して変に挑発したりして……ごめんなさい。」

悪い事をしたときには素直に謝れる男になれば、とは俺の父の教えだ。

残念ながらシュレンに先に謝られたけど……

「そんな！ケント殿は謝らなくても良いのです!! 大体私がケント殿に武器を向ける事自体既に間違っていました。」

ああ、うん……それは確かに。

「カレイプスを討伐したのはケント殿だと村長も言っておられましたからね。我々が間に合わなかったのに、この村が無事なのはあなた方がいたお陰だった……まさかそのような方に一時の感情だけで決闘を申し込むなど……どうか、この未熟な私を許してほしい。」

そう言ってシュレンは再度頭を深々と下げる。

うーん……悪い奴じゃないし真面目な人なんだけど……挑発したのは俺だし、喉けたのは村長だし……あれ？シュレンってどこが悪いの？

ああ、そうか……そもそも俺達が恩人であるというそこに考えが回っていなかった頭が悪いのか……

「そこまで言われて許さないような人で無しじゃないぜ、俺は。」

「では！」

「ああ、許すさ。だから、挑発したりした俺の事も許してくれるか？」

「はい！」

そこで俺とシュレンは握手を交わす……友情の誕生だ。

「大丈夫ですか？」

「ああ、フィニにも迷惑をかけたよな。悪い。」

まさか罰として文字通り叩き潰されるとは思わなかったけど。

喧嘩両成敗か……フィニってことなくお母さんのだよな。

「ところで、貴女は？」

そこでシュレンがフィニに声をかける……こいつはフィニにすら  
気付いていなかったのか……

「あ、はい。私はフィニフィ……フィニと申します。」

フィニはフルネームを名乗ろうとして、途中で止めた。

フィニのフルネームは『フィニフィアン・シュルツ』。対してシ  
ュレンは『シュレン・クル・ルグタンス』。ついでに俺は『來生賢  
人』。

つまり名前の違いのせいで変に疑惑を持たれなくするためだろうと  
俺は勝手に推測した。

「そうですか。ではケント殿、フィニ殿。先程は大変迷惑を  
おかけしました。どうか、お詫びをさせていただきたく、帝都まで  
ご一緒していただけないでしょうか？」

そう、シュレンは言った。

まあなんだ？

シュレンのフィニを見る目が若干熱っぽいのは、まあフィニは美人  
だし許してやるとして、俺とフィニを帝都に招くって？  
なんか……どっかおかしい気がするぞ？

……ああ、分かった。出会って五分で決闘騒ぎがヒントだ。

シュレンは行き当たりばったりなんだ……もしかして、俺より馬  
鹿なんじゃ……

ほんと、困難が隊長で大丈夫か？帝国騎士団とやらの諸君……

「ああ分かった。折角だからそうさせて貰うよ。フィニも良  
いだろう？」

「ええ。」

フィニも笑顔で頷いた。

シュレンの目線に気付いている様子無し。

ちよいと鈍いんでないかい？

「たださ、ケント殿なんて他人行儀な呼び方やめろよ。さっ  
きまで貴様とかお前とかだったじゃん？仲直りもしたわけだし、ケ  
ントって呼び捨てにしるよ。な？シュレン。」

「そうですか？ではそうさせていただきましょう。」

なんか堅い奴だな。

実直と言つか何と言つか……

「それでしたら、私の事もフィニと呼んでください。その…  
…敬称をつけられる事に慣れていないので……」

そこにフィニがおずおずと発言する。

きつと化物なんて呼ばれる事に慣れ過ぎているんだろっ……  
フィニだったら様をつけて呼んだって良いくらいなのに……

「はい、分かりました。」

シュレンはそれだけだったら思わず見蕩れてしまいそうなほど爽

やかな笑顔でそうフィニに応えた。

「隊長、帰還しますか？」

そこに隊員の一人であろう騎士がこっそりとシュレンに声をかける。

「そうだな。カレイプスを討伐したという勇者を迎えての帰還だ。そう伝令を飛ばしておいてくれ。」

シュレンはその言葉に少しだけ黙考し、そして、そう隊長の表情で告げた。

隊員はそれに敬礼で応え、すぐに他の隊員に内容を伝える。

「さて、ではケント、フィニ、我々は今から帝都ランクルー  
トに帰還するが、よろしいか？」

伝令の手段が伝書鳩なのか、携帯電話みたいな遠距離通信機器なのか、それとも別の何かなのか、帝都とやらの文明レベルが気になるどころだが、それを見る前にシュレンに声を掛けられた。

『帝都ランクルート』か……多分町の名前なんだろうな。

「えーと……ああそうだ。村長さんそこには挨拶しとかな  
いとな。」

「そうですね。」

そういつわけで、俺とフィニは村長の前に並ぶ。  
いつの間にか村長の奥さんと娘さんも一緒にいた。

「そんなわけで村長さん、お世話になりました。」  
「お世話になりました。」

そう言いながら俺とフィニは一緒に頭を下げる。

「とんでもない！こちらこそ命を捨てねばならぬ所を助けて  
いただいて、本当に感謝してもし足りないほどのです。また我々の村  
にお越しく下さい。その時は村人総出で歓迎いたします。」

村長は、そう笑顔で返事してくれた。

わざわざカレイプスを倒した手段見たさにシュレンを挑発したよ  
うな子供っぽい村長とは思えないほど、それは大人な返事であった。

「おにーちゃん、行っちゃうの？」

村長の娘である女の子が俺の服の裾を軽く掴みながら、やや涙目  
で俺にそんな事を言う。

う……ここで、俺が出発したら女の子が傷付いてしまう……  
だからって残っていても何も分からないし、連れて行くわけにもい  
かない……

だったら、俺は絶対にこの女の子を傷付けないように……

「ごめんな。俺は行くよ。」

「そんなぁ……おにーちゃん、行かないで？」

そんな泣きそうな顔で俺を見ないでくれよ。

「俺は君の事を忘れない。君も俺の事を忘れないでいてくれ



よ。そしたら、俺はきつとまた君に会いに来るからさ。」

「ほんと？」

「ああ、本当本当。俺のせか……国ではね、嘘を吐いたら針を千本も飲まなくちゃいけないんだ。だから俺は嘘をつかない。君も嘘ついちゃ駄目だよ？」

「うん！私嘘つかない！！私、おにーちゃんのこと絶対忘れないからね！」

「ありがとう。」

そう言つて笑つて、女の子は俺の服から手を離れた……これで女の子は傷付かないだろう。

「……」

気付くと、フィニとシュレンが啞然とした表情でこちらを見ていた。

「どうかした？」

「いえ、ケントは……育児の経験でもあるんですか？」

「ブッ!？」

まさかのフィニの爆弾発言だった。

「ケントは聊か子供の扱いが手慣れているように私にも見受けられるな。まさか、ケントは倒錯嗜好の持ち主なのか？」

シュレンまでそんな事を言う。

倒錯嗜好って何だ？ロリコンって意味か!？

「そんなわけあるかい!!」

とりあえずそうシッ「ままざるを得なかった。

## 十一章 “帝都への招待”（後書き）

書き貯めしていた分はこれで最後です。

試験も近く、なかなか小説を書いている時間も少ないので、以後更新は不定期になります。

申し訳ありません。

さて、ここまで割と一気に更新してきましたが、皆さんこの小説いかがでしょうか？

感想などおありでしたら、一言でも残していただけると嬉しいです。

## 十二章 “とりあえず必要なのは地理”

帝国騎士団シュレン隊は隊長シュレンを始めとした十五人からなる分隊で、シュレンを除けば副隊長のウルナ・タイ・カナルが指揮系統の頂点に立ち、下級騎士から順に二級騎士六名、一級騎士四名、特級騎士三名で構成される。

シュレン隊は帝国騎士団の中では最小の部隊になるが、強さのランクで言えば上から三番目。それは少数精鋭による隊員間の連携の速さということもあるが、それ以上に隊長であるシュレンが国内でも屈指の実力者である事に依るところが大きい。国内でも帝国騎士団を統括するハイラルという人物以外、シュレンに太刀打ちできる人間すらいないのだそうだ。

以前、どこか別の場所で尖角竜と呼ばれるシャルパイアを討伐したという功績もあり、今回シュレンが強引に押し込んだカレイプス討伐に出向くことを認められている。

なお、フィニの世界にもシャルパイアは存在し、脅威度言えばカレイプスより上であるとのこと……何者なんだよ、シャルパイア……

ちなみに、シュレンが魔術を使おうとした際に被害が周りに出ぬよう指示を飛ばしていたのは副隊長のウルナである。

「では君達は異世界からの訪問者であるか？」

この世界での主な移動手段は馬車……馬はいるようだ。

帝国は馬車で一日と半分ほどの距離にあるとのこと。

シュレンとウルナのみが乗る事を許される隊長用という特別な馬車と、他の隊員が丸ごと押し込められる八人乗りの大型の馬車が二台、計三台の馬車が移動手段であった……なんて嫌な勝ち組と負け組の縮図なんだろう、とか考えてしまふ俺は負け組みなんだろうな……

俺とフィニはその隊長用の馬車に乗る事を許され、もともと四人用である隊長用の馬車にシュレン、ウルナと共に乗せて貰っていた。ウルナは御者台に座って栗毛の丈夫そうな二頭の馬の手綱を握っている。

ウルナはシュレンと同じく金髪だが、割と短く切り揃えているシュレンとは違い、肩口まではあるような長い髪を後ろで一纏めにして尻尾のように垂らしている……ポニーテールってやつだ。

碧眼で掘りは深く、優しさを感じさせるゆったりとした印象を受ける。美形だが実直に眉根を引き結んだシュレンとは、また違った方向性な顔付である。

声色は男としてはやや高く、女としてはやや低いくらいの中性的な感じ。お陰で見た目や声から性別が判断し辛い。騎士なんだし、多分男だと思われる。

ちなみに一人称は『オレ』だった……カタカナ表記な感じのイントネーションが良い感じ。

「まあ、概ねそんな感じです。」

とりあえずシュレンは信用できると判断した俺とフィニはこちらの世界の情報を探るためにもシュレンと、シュレンが信用しているというウルナに事情を打ち明ける事にした。

もつとも、フィニの言霊についてと、謎の声が神だと名乗った事

は念のため伏せておいた。

「なるほど。どうも見かけない格好だと思ったら、そういう事か。私はてつきり遠方のカテアテ辺りからの旅人だと思っていたよ。あそこは変わり者が多いと聞くしな。」

俺の話に対し、まずシュレンが理解を示す。

変わり者扱いされた事に対しては怒るべきなんだろうけど、そんなことしてたら話が進まないのではここはスルーしておく。

「隊長！そんな簡単に鵜呑みにして良いんですか!？」

やや楽観的な感があるシュレンにウルナが切迫した声を出す……  
なんか苦労人の空気があるよねウルナさん。

「まあ半信半疑といったところではあるがな。」

異世界から来ましたなんて話をいきなり信じたらそれこそ変人だろう。

「だが、彼らはカレイプスを倒し村を救っている。ケントは私の申し込んだ決闘を正々堂々受けてくれた。悪人ではない。それに、そんな嘘を吐く意味があるとも思えないしな。だから、信じるよ。」

爽やかな笑顔でシュレンは言い切った。

「隊長がそう言うのであればオレは逆らいませんよ。」

そんな迷いのない様子のシュレンにウルナは折れた。

「そうか。ではこの世界では知らぬ事も多いだろう。何でも聞いてくれ。」

期待通りの反応のシュレン。

「ではまず、ここがどこなのか地理的な物から教えて欲しいのですが……」

地理を知っているのと知らないのでは大きく違う。そういう考えからか、フィニがまずそう口を開いた。

「ふむ……」

どう説明すれば良いか迷うようにシュレンは顎に手を当てて少し考える。

やがて考えが纏まったのか、一度頷き、ゆっくりと口を開いて……

「分かん。」

俺とフィニは思い切りずっこけた……アホなのかこいつは!! ああ、アホでしたねえ!!

「ウルナ、説明してやってくれ。」

「隊長……オレ、別の部隊に移ろうと最近考えているんですけど、どう思いますか?」

「ふむ、悩みでもあるのか? まあその話は後でじっくりしようじゃないか。今はこちらの方が重要だ。」

「ハア……」

村に来た時は実直で随分と格好良い感じのしたシュレンだが、こうして話してみると結構残念な感じである事が分かってくる……ウルナさん、ドンマイ！

「では隊長に代わり説明させていただきます。まず今オレ達がいるのがガルバーナ大陸の中心に位置するルヴィス帝国になります。ルヴィス帝国は北にフィガル神国、東にアメリカ王国、南にネルト宗国、西にカテアテ集合国と四つの国に囲まれる形で存在しています。」

ふむふむ……何となく簡単な地図は頭に描けた。

「さらに、国に属さない自治州や、魔人や亜人と言った者達の住む異人領などが国の境界線同士の隙間や、時には国の中などにいくつかあります。」

馬車を引きながら走る馬達を巧みに操りながら、ウルナはゆっくりと言葉を紡ぎ続ける。

とても分かりやすい説明で、覚えるという事がとても苦手な俺でも、何とか理解は出来たと思う。

ちなみに今いる場所は帝国領内では帝都であるランクルートの南方に位置する草原で、そのままランクルート草原と呼ばれているらしい……現代日本に生きていたせいか、町を出るとそこは草原と言うのがどうにも実感が湧かなくて困る。そもそも、町と町を行き来するのに一日掛るというのだから驚きだろう。

「さて、他に聞きたい事は？」



ある程度ウルナの地理に関する講義が続き、一段落した所でシュレンがそう口にする……確かに聞きたい事は沢山あるんだが、なんだかシュレンには聞きたくない気分だ。

「勇者とは何ですか？村長が頻りにケントの事をそう持て囃していたのですが……」

何を訊こうか、シュレンに訊いても良いものか……なんて悩んでいたら、そうフィニが疑問を口にした。  
確かにそれは俺も気になる事だ。

「勇者か……それならば私が説明しよう。『ホウイン鳳印』は幼い頃よりよく親にも聞かされたしな。」

「『ホウイン？』」

俺とフィニの声が重なった。

## 十二章 “とりあえず必要なのは地理”（後書き）

『世界観説明章 地理編』でした。

こうやって話を進めながらゆっくりと世界観は明かして行くつもりですので、まあ推測など程々に楽しんでいただけたら幸いです^^

## 物語 “鳳印”

『ホウイン鳳印』とはルヴィス帝国、フィガル神国、そしてアメリカ王国に良く広まっている英雄譚であり、特にフィガル神国では知らぬ者などいないというほどに有名な御伽話である。

親が子に寝物語として語る御伽話の中では最も一般的であり、古くから語られ続けられる伝承の一つでもある。

歴史が長いために沢山の解釈が存在し、物語の展開や顛末などは多岐に渡るため、最早『鳳印』の正確な原書は分からないとされている。

しかし、どの話の中でも中心として描かれるのは『勇者』という一人の男。

解釈によって、悪鬼の如き強さを誇る戦士であったり、敵を翻弄する策略謀略を張り巡らせる軍師であったり、万人の心を動かす人心掌握術に長けた政治家であったり、とその在り様は様々であるが、共通しているのは『勇者』が何かしらの巨悪に立ち向かう物語である事。そして、『勇者』が常に他者を圧倒する絶対的な存在として描かれている事である。

舞台は『鳳の地』と呼ばれる土地。これも解釈により、未開の大地であったり、王の支配する領地であったりするのだが、問題なのは『鳳の地』がかつてのガルバーナ大陸の事をいう古い地名である事である。

それ故、『鳳印』の原典にはかつてこの土地で起こった史実が描かれていた可能性がある、とルヴィス帝国にいる歴史学者は言う。

対して、単に実在の土地を舞台に描いてあるだけの御伽話である、という歴史学者もいる。

二つの意見は対立しているが、どちらが正しいのか、『鳳印』の原典が存在しない現在では確かめようがないために両者の意見の主張はずっと平行線を辿っている。

「これが大まかな『鳳印』についての話だ。私が知っている物語で良ければ、内容も語ろうか？」

「是非。」

かつてルヴィス帝国には『鳳の地』全土を我が物とするために、あらゆる国と戦争を起こした愚かなる支配者がいた。その愚かなる支配者は自らを『魔帝』と称し、その圧倒的な力により他国を次々と蹂躪していった。

目の前を横切っただけで一族郎党まで皆殺し、という凄まじいまでの恐怖政治体系を作り上げた魔帝に逆らおうなどという者はおらず、ルヴィス帝国および魔帝に蹂躪された数々の国々は完全に魔帝の支配下にあった。

ある時、そんな魔帝に逆らう者が現れる。齢15歳にもならない少年であった。当時の人々はこの少年の事を『蛮勇を奮う者』として『勇者』と蔑んだ。そう、『勇者』とは最初は侮蔑の言葉であった。

「魔帝様、貴方の行動はおかしい。私利私欲のために罪のない他国の民を蹂躪するなど間違っている。」と、少年は魔帝に謁見を求め、そして謁見の際に正面切ってそう魔帝に告げた。

当然のように魔帝は激怒した。「なんだ小僧！この魔帝に意見し

ようとは何事だ！一族郎党まで皆殺しにしてくれる！！」

家臣たちでさえ震え上るほどの剣幕で激怒する魔帝に、しかし少年は怯みすらせずに言葉を重ねた。「それには及びません魔帝様。もう私に家族と呼べる人間は残っていませんので。」

少年の声音に込められていた刀剣の様に冷たく鋭い感情に、怒り狂っていたはずの魔帝は思わず言葉を失ってしまふ。

さらに少年は続ける。「魔帝様の怒りに触れた私がこの先も生きていられるとは思っていません。いつだって処刑を受ける覚悟はできております。ですので、一つだけお聞かせください。魔帝様は『鳳の地』を全て支配して、何がしたいのでしょうか？」

そんな少年の真っ直ぐな問いかけに、魔帝は言葉で応える事が出来なかった。かと言って、魔帝には何故かこのまま少年を処刑しろ、という指示を出す事が出来なかった。

自分の気に触れた者など殺してしまえば良い。もし、少年が魔帝の前を横切ったりすれば、それだけで魔帝は少年の首を刎ねただろう。実際、少年が魔帝に向かって言葉を発し、怒りに触れた時、魔帝は確かに少年を家族ごと殺してしまうつもりだったのだから。

だというのに、何故か魔帝には今この少年を殺してしまう事が何か重大な罪を犯すことになってしまう様な気がしてならなかった。

魔帝は少年の質問に答えず、代わりに別の質問を少年に返した。  
「少年よ。貴様にはなぜ家族がいない？」

「父も母も、兄も姉も……戦争に行き、殺されました。」少年は

即答する。

いつもならば、たったそれだけの事と一笑に付す魔帝が息を呑む。

「魔帝のために戦い魔帝のために死ぬ」と、一定の年齢に達しさえすれば男女問わず、魔帝は自国の民のほぼ全てを戦争に投下していた。

少年はさらに続ける。「私は明日をもって徴兵される規定の年齢に達します。」

そこで魔帝は初めて少年の心の底に秘められる感情の冷たさの正体を知った。

「少年よ。我が憎いのか？ならば刃を持ってこの魔帝に立ち向かって来るが良い。しかし心せよ。貴様が怒りをほんの少しでも私に向けた時、貴様の体は首から上を失くすことになる。」と、いつまでも物静かに冷たい感情だけをぶつけてくる少年を不気味に思い、いつそのこと激情を向けられた方が楽になると考え、そう口にする。そうすれば、今まで通り、逆らう者などただ処刑するだけになるのだから。

しかし少年は静かに首を振った。「だからこそ、私は魔帝様に教えて欲しいのです。『鳳の地』全てを支配した暁には、何を成す御積りなのか。」と、少年は最終通告であるかのようにそう告げた。

魔帝はしばし考え、そしてゆつくりと、自身が『鳳の地』全土を支配しようと目論んだ最初に理由を思い出す。

それは幼い頃の記憶。当時、魔帝はどこにでもいるような、そん

な普通の少年だった。普通に産まれ、普通に生き、普通に幸せになるはずだった、そんな少年だ。

魔帝は両親を戦争で亡くしていた……奇しくも、今魔帝の前にいる少年と同じように、魔帝の両親は当時のルヴィス帝国の支配者によって強引に戦いに出向かされ、そして殺されていたのだ。

魔帝は当時の支配者を憎んだ。殺してしまいたいほどに。やがて魔帝が成人した時、魔帝はその支配者を暗殺し、自身がその支配者に成り代わった。

最初はそう、戦争なんて悲しい事をやめさせるためだった。

しかし、戦争を失くす事は出来ない……その理由を国が複数あるせいだと判断した魔帝は、自身が恐怖の対象として世界に君臨、世界の全てを支配し一つの国とする事で争いを無くそうと本気で考えた。

「私はどこで間違えたのか……」魔帝はそんな事を小さく呟いた。

そんな魔帝に少年は今までの様な冷たさを孕んではない、優しい声音で声を掛ける。「魔帝様……魔帝様は間違えたのですか？」

そんな少年の声はスルリと魔帝の心の奥底まで滑り込んだ。

「我は……魔帝は、間違えてなどいない！世界を統一し、悲劇を生む争いなどなくしてしまおう！その暁には、犠牲になった我が国の民、そして蹂躪した他国の民に酬い、魔帝は自らの命を断つ！」と、魔帝は少年の真っ直ぐな言葉を受けて、初めて魔帝は自身の心の底からの叫びを口にした。

少年はその言葉を聞いて一度微笑み、「だから、私は魔帝様を憎

んではないのです。」と言そう言って頭を下げ、魔帝との謁見を終了して退室した。

この日以降、戦場に一人の伝説が現れる。

その人物は他者を圧倒する絶対的な力を駆使して戦場を駆け、迫り来る敵を薙ぎ払い、まるで鬼神の如き強さを持って戦場に君臨した。

やがて他国の兵はその存在に恐れ戦き、一人、また一人と武器を捨て、ルヴィス帝国に投降していった。

気付けば、いつの間にかルヴィス帝国は『鳳の地』全土を支配していた。

そう、魔帝が目指した大陸の掌握という偉業は達成されたのだ。

晩年、目的の全てを達成し、今まさに刃を自身の腹部に突き立てるその刹那、魔帝は一つの言葉を残している。「『勇を以て義を成す者』……それが伝説だ」と。

「これが私の知る『鳳印』の物語の一つだ。」  
「……」

知らず、俺とフィニはシュレンの語る話にのめり込んでいたのだった。



物語 “ 鳳印 ” （後書き）

どこにでもありそうでなさそうな、そんな物語を目指しました^^ ;  
感想を教えてくださいと嬉しいですよ。

### 十三章 “なぜ言葉が通じる？”

ガタゴトと揺れながら走っていた馬車が急に止まった。

「うん？」

「もう日が暮れます。今日の所は、ここで野宿しましょう。」

俺が不思議そうな声を出すとウルナがこちらを振り向いてそう言った。

野宿……つまりはキャンプってことだろう。

「隊長、よろしいですか？」

「ああ、結構。では隊員に野営の準備をするよう伝えてくれ。」

「はい。」

それだけの短いやり取りを交わした後、ウルナは後ろから着いて来ている大型の馬車の方へ駆けて行った。

「ところで、ケントとフィニは食事はどうするんだ？良ければ、二人分多めに作るよう伝えてくるが？」

そうシュレンに言われ、そう言えばこちらの世界に来てからまだ何も口にしていなかった事を思い出す……結局、村長さんの所で何も食べられなかったなあ……

「お願いします。」

「心得た。じゃあ、少しの間ここで待っていてくれ。」

そう言つとシュレンも馬車を降り、後ろの馬車の方へ去って行く。

「『勇を以て義を成す者』か……」

「だから村長はケントを勇者と呼んだわけですね。」

だから略して勇者……って、ちょっと待てよ？これ……おかしくないか？

だって、漢字は日本と中国、その他いくつかのアジアの国々独自の文化だろ？

なのに、『勇を以て義を成す者』を略して『勇者』だなんて漢字的な表現はおかしい。

一応可能性として、この世界やフィニの世界での文字文化が偶然にも漢字であるという事は考えられるけど、『フィニフィアン・シユルツ』やら『シュレン・クル・ルグタンス』やらとファンタジーな名前表記から考えると、とてもそうとは思えない。

日本国内だって地域が変われば、方言だつてもはや他国語に聞こえるくらい変化するのに、まさか世界が変わつても言語が同じなんてことは無いだろう。

「なあフィニ？」

「どうしましたか？ケント。」

「いや、さ……ふと思ったんだけど、俺達が言葉通じるのっておかしくない？」

「え？何故です？」

分からないらしい。

心底不思議そうな顔で首を傾げるフィニは可愛らしいが、今はそん

な天然な所で萌えている場合ではない。

「だってさ、国ごとにだって言葉が違うのに、世界が違うのに言葉が通じるのはおかしいでしょ？」

「え！？ケントの世界では国ごとに言葉が違ったんですか！？」

「ええ！？フィニの世界では変わらないの！？」

フィニの新鮮な驚愕に、俺も新鮮な驚愕を返してしまう。

「……」

「……」

お互い、暫し沈黙の時間が流れた。

「こういう時はさ……」

「そうですね、神様を頼りましょう。」

「出てこいや！」

というわけで、自称“神”を呼び出してみた。

「我が直々に選んだヒロインは気に入ったか？」

メッチャ可愛い！ってそうじゃなくて……出たな元凶！

「我が悪い様な言い方をするな。それより、聞きたい事があったのではないのか？」

ああ、何で言葉が通じるの？今更だけどさ。

- 貴様は『バベルの塔』という話を知っているか？ -

聞いたことある。

確か、神が降りて来やすいように高い塔を作ったけど、それが神の怒りに触れて言語がバラバラにされたって感じの話でしょ？

- 細部が違うがまあ良い。分かっているじゃないか。そういうことだ -

え〜と……つまり……？

- これだから駄目人間は…… -

うるさい！

- 『バベルの塔』自体は神話だが、言語は神によって統治されている。故に、言語を分けられていない世界も数多くあるのだ -

だからフィニの世界では国ごとに言葉が違うつてことは無いのか……それは納得。

でも、それじゃあ俺とフィニが言葉が通じる理由にはならないよな？

- 簡単な話だ。貴様の耳と口に同時翻訳機能をつけておいた。それで聞こえる言葉は全てお前の知る言語となり、話す言葉は相手の理解できる言語となる -

へえ、至れり尽くせりでどうもありがとう。

- 感謝などするな駄目人間。気持ち悪い -

うわゝ酷い。

「ケント、神様はなんと？」

そこでフィニが横から声を掛けてくる。

そういえば、神との会話に夢中になってすっかり忘れてたよ。

「ああ、いや。基本的にこつちの話だから問題ないよ。」  
「？」

フィニは良く分かっていなさそうだったが、特段問題ないと判断したようで、食い下がる事もなかった。

「で？もう用は済んだか？」

あーじゃあ一つだけ。

「何だ？」

地獄に堕ちろ。

「我が一体何をした。むしろ貴様は我に感謝して然るべきであらう。」

うつせえ！

いきなりあんな崩壊寸前の村に放り出すとはどういう量見だ！  
死ぬとこだったぞ！

「仕方あるまい。我とて自分の世界の民が無碍に死ぬのは忍

びないのだ。言霊術師ならばカレイプスが相手でも問題ないと判断したしな -

あーはいはいそうですか。ご立派ご立派。

- 本当に腹の立つ小僧だ……そんなだから元の世界には友達すらいないのだ -

俺が悪いんじゃない……

- まあ確かに貴様は悪くない。神の意志は世界の意味だからな。神に嫌われるという事は世界に嫌われるという事、引いては世界に住む全ての生物に嫌われるという事だ -

むしろ俺が悪くないと救いが無さ過ぎるだろ、それ……

- ふん。まあ良い。これ以上大した用事でないのに呼ぶな。我とて忙しいのだ。じゃあな -

と、自称“神”の声は吐き捨てるように言って消えた。

「なんか、こつちの世界で生きて行くの凄い不安になって来た……」

「何を話したんですか？」

フィニがそう訊いてくる。特段深い意図はなさそうで、単に話をしようという軽いものだ。

そつえば、なんで“神”は俺にばかり話し掛けてフィニに声は掛けないのだろう？

「いや、曳かれ者の辿る末路はいつも一緒って言う話……」  
「ケントは嫌われ者ではないです!」

優しいフィニのフォロー。

でもさ、なんで俺って神に嫌われたんだろう……

「ケント、フィニ、食事の用意が出来たぞ。こちらに来てくれ。その後は悪いが野営の準備を手伝ってくれないか?」

そこに空気を読まないシュレンが現れて有耶無耶になる。

「言葉が通じて良かったな。」

「え?」

「いや、何でも無いよ。」

「そうですか?」

俺のちょっとした呟きにフィニが反応したけれど、俺は適当に言っただけで誤魔化した。

言葉を操るフィニに言葉が通じるなんて全く意味のない事だろうし……というか、フィニなら 言葉よ 通じよ の一言で問題なさそうだし。

「ところで、晩飯って何?」

「うむ。さきほど良い大きさの鹿が狩れたのでな。鹿鍋だ。」

この世界にも鹿がいる事を知った瞬間だった。  
こうなると、動物の類は俺の常識に照らし合わせてみても大丈夫そう。



まあ目先の問題は鹿なんて食った事のない現代人たる俺の口に合うかどうか……なんだが、塩とコシヨウでシンプルに味つけられた鍋に毛皮を剥ぎ取られた鹿肉が一匹分丸々放り込まれ、そこに適当に刻まれた野菜の類が突っ込まれた鍋の味は最高だった。

## 十四章 “言霊を使う理由”

野営の準備の手伝いと言われたので何をさせられるかと思いきや、客人に疲れるような事はさせられないというシュレンによって俺達の仕事は火の管理となった……だったら手伝って欲しいとか言うなよ、という言葉は呑み込んだ。

さらに俺とフィニには客人ということで個室を用意された。俺とフィニは同室で。

何故かと問うたら、シュレンに「え？二人は恋仲じゃないのか？」と素で問い返されてしまった。

真っ赤になつて、小声で「ち、違いますよう」なんて否定するフィニは可愛かった。

どうもシュレンやその他隊員さん達の間では、勇者たる俺の旅に恋人のフィニが付き添っている、という感じに認識されているようだ。

フィニが俺と恋人である事を否定した事にシュレンが顔を輝かせた事が気に入らない……が、ここで喧嘩を売っても何も進まないの俺が堪える事にする。

さて、そんなこんなでフィニは個室、俺は隊員達の寝るタコ部屋に押し込まれて雑魚寝をすることになった。

騎士団なんて花の無い集団に属しているせいか、その夜の会話は素晴らしく色めき立っていた。

隊員の方々は随分とフィニに御執心の様子で、俺はフィニとの関係

を夜通し聞かれる破目になった……恋人だと公言したいところだけど、フィニが否定した以上、適当に誤魔化しておく……

その代わり、シュレン隊の人達とは随分と仲良くなれたと思う。皆結構気さくな人達だし、修学旅行の夜に今まで話した事のない人とも仲良くなれるあの空気に似ていたと思う。

まあそんなわけで、俺はほぼ徹夜で夜が明けた。

新たな発見だが、この世界での時間の流れ方はおよそ俺の世界と同じ二十四時間周期になっているようだ。

「ケント？なんだからくまが凄い事になってますけど、昨日寝れなかったんですか？」

体感時間的に朝の六時ごろであろう時刻。

野営用に作られた巨大テントを片付ける為にせかせかと働いている騎士たちを眺めている俺の顔を、心配そうにフィニが覗き込んだ。

「いやあ、ちょっとね。他の隊員さんとの会話が盛り上がりつつあってさ。」

嘘は言っていないよ、嘘は。

むしろ嘘なのは、徹夜明けなのにくま一つ作らず、しかも元気にテントを片づけている隊員さん達だよ、うん。

「心配しなくてもさ、俺ってちょっとくまが出来やすいんだよ。」

「そうなんですか？」

「でも……眠い……」

流石に眠かった。

夜更かしに慣れてる現代日本人の俺でも徹夜すれば流石に眠い。

しかも悲しい事に、この世界では朝食を摂る習慣が無いようだ。  
飯さえ食えれば多少は元気が出ると言う物を……

ちなみにフィニの世界にも朝食を摂る習慣は無いそうだ。

「朝ってご飯を食べるものなんですか!？」なんて驚かれた……力  
ルチャーショック

「辛いですか？」

フィニがそんな事を聞いてくる。

「辛いよ。だから……」

ちよつと寝かせて、と続けようとした。

「では…… 眠気よ 去れ」

スツキリ爽やか!……じゃねーよ!

これぞ言霊の無駄遣い……

「大丈夫ですか？」

「眠気は取れたけど……こっ、なんて言つの?寝る事で得ら  
れる快感とかさ。俺はあると思っ……」

ちょっと落ち込む。

「そうでしたか？じゃあ 睡眠の快感をケントに与えよ」

二十時間くらい寝ていた気持ち良さ！しかも寝覚めスッキリ！！  
……じゃねーよ！

「なんでも言霊で解決しようとするんじゃないありません！」  
「あれ！？駄目でしたか？」

なんか予想外と言う表情で驚かれた。

そんなに俺って理不尽な事で怒ってますか？

「っていうかさ、フィニって言霊を使うの嫌じゃないの？前の世界で化物とか言われたんでしょ？」

それが疑問だ。

口にするだけで何だって現実にする化物……世界さえ歪める神に嫌われた女……後者は微妙に俺の脳内補正が入ってるけど、決して大げさじゃないと思う。

だからフィニは別の世界で人生をやり直したいと願ったはずなんだ……だったら、言霊を使って、また化物呼ばわりされるのは嫌じゃないのか？

「あ、いえ……むしろ私は喜んで貰えるなら積極的に言霊を使って行きたいと思ってます。」

優しい……優しすぎる！

その優しさもうマザーテレサ……いや、聖母マリア様すら超越していると言っても過言ではない！

フィニは化物と呼ばれる人生をやり直したかったんじゃない……例えば化物と呼ばれても、人に喜んで貰いたいがために人生をやり直したかったんだ……

なんて健気な……そして、なんて一途なんだろう。もう俺感動で泣いちゃうよ？

「さて、出発しましょう。」

いつの間にか出発の準備は整っていて、馬車の御者台からウルナが俺達を呼び寄せる。

思えば、なんで副隊長のウルナがわざわざ御者なんてしているのだろう……他の馬車は騎士じゃない御者さんがちゃんというのに……という俺の疑問は、ウルナの「単純にオレが好きなんですよ。こういうの。下手な御者なんかに任せておけません。」という答えによって掻き消えた。

「後どれくらいで着くのですか？」

帝都とやらに着くのが待ちきれないのか、フィニが期待に輝いた顔でウルナに問うた。

「もう幾許の時も経たずに到着しますよ。そうですね……昼食は街の中で摂れるでしょう。」

そのウルナの言葉通り、幾許の時間（俺の体内時計的におよそ五

時間）が過ぎた頃、遠くに町の形らしき何かが見えて来た。

巨大な街壁に囲まれていて街の中は見えないが、しかし遠目に見ても分かるほど巨大な城がその壁の中に聳え立っている。

それは質実剛健と表現すればいいのか、良くファンタジーな物語に出てくる中世ヨーロッパの城に似ているようで決定的に違うとでも云うような……自分の貧弱な語彙が恨めしく思えてくるほどに立派な城だった。

「あれが、帝都ランクルートだ。ルヴィス帝国の首都であり、皇帝の統治する街さ。」

そんなシュレンの解説が嫌に耳に残った。

## 十五章 “ 帝都ランクルート ”

馬車はそのままランクルートを目指して進み、やがて街壁の前で止まる。

高くて立派な門扉が構えられていて、そこには二人の番兵らしき人物が槍を持って立っていた。

「 シュレン隊だ。今、帰還した。 」

ウルナがそう番兵に言う。

「 ああ、はいはい。 」

番兵はそう気の無い返事をして、槍をカツンと一回石の地面の上で鳴らす。

途端、ガガガガという音と共に門が開いて行く。

「 ご苦労。 」

「 いやいや。 」

そんな短いやり取りをウルナと番兵は交わして、そして馬車はゆっくりと門の中へ入って行った。

まず広がった景色は住宅街だろうか。

一見して対して大きさも変わらない家々が立ち並ぶ。

整えられた平坦な地面をガラガラと音を立てて馬車は行く。

道の広さは大体二車線分ほど……後ろから着いてくる大型の馬車だつて苦も無く通れる。



先程まで道端で遊んでいた子供達は馬車が通ると知って脇に寄っている。継接ぎだらけの襤褸い服を着た子供達はとても裕福そうには見えない。

同時、馬車が通る音を察した大人が慌てて家から出てきて跪いて頭を垂れた。

子供にも同じようにすることを強要している。

「えーと……どうしたらいいわけ？」

「うん？何もしなくて良い。」

居心地の悪い俺の声にシュレンは何でも無いかのように答える……  
…ちよつと嫌な感じ。

「ランクルートは大きい街だからな。どうしたって街の中に格差が生まれてしまう。ここは所謂貧民街スラムというやつだ。」

格差社会ですか……

どこの世界に行ってもこういうのは……やれやれ……

「門の前は大型の魔物に襲われた際に真っ先に被害が広がる。故に人気が無く、地価が安い。そうになると、自然に金銭的に余裕のない人たちが集まってしまう。格差は悲しい事だが仕方が無いんだ。」

シュレンの性格上、こういうのは見過ごせない性質だと思えるが、しかし彼らは自ら望んでここに集まっている以上、やはり言う通り仕方のない事なんだろうか？

「じゃあ、皆が一様に頭を下げているのは？」

村での村長さんの対応しか見ていない俺としては、シュレン達がそんなに偉いと思えなくて、恭しく跪く人々に戸惑いが隠せないんですけど。

まさかシュレンって、実は下々の民が気安く話しかけられないくらい偉い人だったりします？もしかして俺ってとつても失礼なことしてるんじゃない……

「騎士団は実際に命の危険を伴う危険な職だ。故に騎士団所属の、特に一級騎士以上の騎士には下級貴族程度の暮らしは約束されている。そのせいか、騎士団の事を詳しく知らない人々には騎士団は貴族で構成されていると思われる。誤解は解いておきたいのだが、我々が話しかけても彼らは恐れてしまう。」

権威ある人間には傳いしておく方が賢い……か。  
嫌な考え方だと思うが、しかし否定は出来ない。

「貴族制度……」

フィニがそう口を洩らす。

ファンタジーではお約束のアレだろう。

簡単に言えばお偉いさんってやつだ……それも、王以下政治家以上という性質の悪い奴ら……

下手に権力があるから面倒なんだな。

「まあランクルートは皇帝が直々に治めている町だから、特段貴族が幅を利かせているということはない。彼らが頭を下げるのは実際に貴族に対する敬意によるものだから、気分を悪くするものじゃない。」

と、シュレンは最後にそう締め括った。

「俺、貴族じゃないんだけど。」

「わ、私も……」

生まれてこの方人に跪かれるなんて経験は初めてな俺としては気まずいことこの上なし。

「私だつて貴族じゃないさ。最初は誤解を解こうと話しかけたもんだが、彼らは『滅相もない』なんて言つて話を聞いてくれないからな。重圧に苦しんでいるわけでもないし、こうなったらもう諦めてしまった。」

えー……そういうもんなの？

「さて、貧民街スラムを抜けますよ。」

その時、ウルナがそう呟いた。

確かに、ある所を境に急に街の雰囲気が変わっている。軽い坂を上った先には、大きな広場があった。

露天商があちこちで敷居を広げ、色取り取りの果実や食糧、武器や鎧、分厚いハードカバーの本などが並べられている。

まさに市場といった感じのこの場所は、賑やかな喧騒に包まれて何とも楽しげだ。

さらにその広場から伸びる何本もの小道の奥には、コンクリートらしき材質の家が並び、先程の貧民街スラムとの違いが思い知らされる。

広場で賑やかにしている人々の服装も先程とは打って変わって洒落た物になっている。

まあ俺のセンスではないから良く分からないのだけど。

「ここは……まあ説明するまでもないだろう？」

確かに。

「ここを抜けて大通りを真っ直ぐ行けば、いよいよランクルート城だ。」

荘厳に聳え立つ立派な城が目の前にある。

馬車はゆつくりと広場を進み、そして抜ける。その途中でも野菜などを抱えた主婦らしき人物や恰幅の良い男性なども、馬車が通る際には必ず跪く。

どうやら確かに尊敬されているようだ。

「この大通りから、あちらの坂を登ると貴族街があるが、まあそこらは今は良いだろう？」

城へ向かう途中にある坂を指差してシュレンがそう言った。

確かに、今は貴族なんてどうでも良い……って、ちょっと待てよ？

「別に俺達、皇帝様とやらに会う必要は無いんじゃない？」

「何を今更。君達を勇者として城に歓迎する、と先程報告があったよ。」

え！？いつ！？

「なんか聞こえた？」

「いえ……」

フィニも良く分かっていない様子。

「まあそんなわけで、是非城に足を運んでくれたまえ。」

やや強引に、俺とフィニは城へ連れられて行く事になったのだっ  
た……良いんだろうか？

## 十六章 “ランクルート城”

皇帝への報告には隊長であるシュレンと副隊長であるウルナのみでいくらしく、他の隊員を乗せた場所は途中でどこかの道に折れたのか、気付いたらいなくなっていた。

「皇帝ってどんな人だろう……なんかちよつとでも口応えしたら、それだけで首が飛ぶような、怖い人じゃないと良いなあ……」

「心配せずとも、まず国民の平和を第一に考えてくださる立派な方だ。」

俺の不安にシュレンがフォローするように言葉を返してくる。

でも“帝国”だぜ？

俺の中で帝国って言ったら、もう侵略戦争の嵐みたいなイメージしかないんだけど。

「私の生まれるよりも前であるが、前皇帝の代は確かに隣国との戦争は絶えなかったと聞く。その時には多くの国民が命を落とした。現皇帝はその先代の失敗を生かし、武力を用いない外交によって国力を維持しているのだ。」

ふん。

つまり、帝国騎士団とやらは自衛隊みたいなもんだという解釈で良いわけね。

「でも、攻め込まれたりもするでしょう?」

フィニがどこか不安そうにそう尋ねる。

「勿論。その際に武力の行使はやむを得ない。私も前線で戦った事だつて一度や二度ではない。だから、せめて戦争で死ぬのは自らの誇りを胸に戦える者だけにしようと言う皇帝陛下の計らいによつて、帝国騎士団は成り立っているんだ。」

そのシュレンの言葉には、皇帝への敬愛と騎士としての誇りが見て取れた……そんな誇りがあるなら、丸腰の俺相手に剣を抜くのはやめて欲しかった……  
基本馬鹿なんだね、悲しい事に。

「さて、ここからは歩く。付いて来てくれ。」

街の中に聳え立つ城を取り囲むように立派な城壁が敷かれ、そこには象だつて余裕で通れるアーチ状の入口がある。  
そこを馬車で潜つて少し行ったところで、シュレンが馬車から降りるよう促した。

馬車はウルナが引つ張つて隅にある馬車小屋の方へ向かわせた。  
そこには筋骨隆々の体躯をした大柄な男が待機していて、男はウルナから馬車を引き継いだ後、小屋の中へ消えた。

ウルナは何か用事があるのか、こちらを一瞥したが、シュレンは全てを察しているようで軽く手を振つてウルナに合図する。  
ウルナは一度だけ頭を下げるとどこかへ去つて行った。

俺とフィニはシュレンについて暫く歩き、やがて立派な門構えの城門に辿り着いた。

大型トラックが突っ込んでもビクともしなさそうなほどに荘厳に構えられた城の入り口としては、まさしく申し分のない拵えだ。

「帝国騎士団シュレン隊隊長のシュレン＝クル＝ルグタンスただ今、カレイプス討伐の任より帰還した。報告のため、皇帝陛下へお目通り願いたい。」

「はい、聞いております。どうぞお入りください。皇帝の間は……」

「真つ直ぐ行つた所にある両開きの扉だろう?」

「はい。」

シュレンが門番とそうやり取りを交わす。

そのやり取りの後、門番はランクルートの入り口の門と同様に手に持った槍で地面をカツリと叩いた。

それだけで、重そうな鉄扉の門がガガガガと音を立てて開いて行く。

「では、行こう。」

シュレンに付いて俺とフィニは城の中へ入った。

城門は二重構造になっていたようで、一つ目の扉の後、小部屋で区切られた先にもう一つ扉がある。

そこが開いた先にある景色はまさしく絶景と表現して差し支えない。

広大なホールの床は大理石の敷き詰められ、ピカピカに磨かれて顔が映りそうで、人が歩く部分には真紅のカーペットが敷かれ、土足で踏み込むのを躊躇わせるほど。

日本人たる俺なんて思わず靴を脱ごうとしてしまった程だ……

ってか俺が履いてるのって泥とか付きまくってるボロボロ靴じゃん……  
申し訳ない。



天井は高いし、天窓まで付いてるし……『もうここはこの異世界ですか？……ああ、異世界でしたね』状態である。

「おやあ？これは不出来な騎士様がいらつしゃる。」

城の内景に見蕩れていたら、シュレンが横から声を掛けられていた。

「三日ほど前にカレイプスの討伐に出向いたと聞いたのに、こんなにも早く、それも無傷で帰って来ているとは、途中で憶して引き返して来たのではないのかな？そうだろう？シュレン殿。」

シュレンに声を掛けたのは中年くらいの年であろう男。

丸顔で人の良いにこやかな笑顔を浮かべてはいるが、その実、顔中傷だらけで、歴戦の戦士を思わせる。

シュレンに似た鎧甲冑に身を包んでいるが、シュレンが青系の装飾であるのに対し、男の鎧は赤を基色とした装飾がなされている。

「おお、ナーグ殿ではないですか。お久しぶりです。お変わりないようで。」

シュレンはその男、ナーグの言葉は無視した。

それに対してナーグが気分を悪くした様子は無いから、これは二人の間の挨拶みたいなもんなんだろうと推測する。

「カツハツハ！変わるものか！そちらこそ、冴え渡る魔術の腕は幾分もサビ付いておらぬと見える。まさかカレイプスを一日と経たずに倒してしまうとは！」

ナーグはシュレンの肩をガシガシと叩きながら称賛する。

なるほど、何となく二人の関係を把握。  
恐らく、先輩後輩関係。

「いえ、私が辿り着いた時には、既にカレイプスは倒されて  
おりました。そちらにいるケントの手によって。」

ナーグの目がこちらを向く。  
何となく、俺は姿勢を正した。

「すみません、倒したの俺じゃないっす……フィニです……」

「ほう。では、お主、ケント殿が伝令の中にあつた勇者とい  
うわけか。」

まじまじと俺の顔を眺める。

「はあ……勇者とかは良く分かりませんが、とりあえず俺  
がカレイプスを倒しました。」

実際に倒したのはフィニだと言ってしまったても良かったが、彼ら  
が言霊なんて使えるフィニを化物だと罵り、傷付けないとも限らな  
い。

だから、とりあえずは俺の手柄と言う事にしておく。先にこっそり  
話した際、フィニもその方針に賛成してくれた。

「ふむ。良い顔付をしている。」

嘘だ。

俺みたいな駄目人間が、こんな百戦錬磨っぽい人から見て凛々しい

顔をしている筈が無い。

お世辞なんか言っただって騙されないぜ。

「度胸もありそうだ。」

むしろ小心者ですよ。

「それに、何と言っても、奥深い澄んだ眼をしている。」

奥が見えないくらい濁ってると思いますけどね。

意外と人を見る目が無いナーグさん。

「なるほど、勇者か……私の名はナーグ「レイ」フォトスという。以後よろしく。」

そう言っただけでナーグは右手を差し出した。  
握手のサインだろう。

「どうも。ケントです。」

そう言い返しながら、俺はナーグの右手を握り返した。

「ふむ。よろしく。して、そちらのお嬢さんは？」

手を離れた後、ナーグの視線はフィニの方へ向いた。

「フィニと申します。ケントの旅に付き添わせていただいております。」

フィニはナーグが何か言う前に自分から澄ました声音で名乗った。

それにしても、いつからフィニは俺の付き添いになったのだろう

……

「なるほど。夫婦で旅路とは、なかなか粋な事をしなさる。」

「ブフツ!？」

ありえないナーグの一言に思わず俺が噴き出した。笑ったんじゃない、驚いて、ね。

「え?え?」

フィニは一気に顔を赤くして動揺する。

さっきまでの澄ました可憐な女性の態度はどこへ行ったのか……

「何々、照れる事は無い。素敵な事じゃあないか。」

その後、ナーグはフィニと握手を交わして、「ハッハッハ!」と豪快に笑いながら去って行った。

反論をする間も無く……

「あの……ケント……」

未だ顔の赤いフィニがぼそぼそと呟くように話しかけてくる。

分かってるって。俺みたいなのと恋仲どころか夫婦なんて言われたら、俺が勘違いしてしまわないよう釘を刺しておきたくなるというものだろう。

「勘違いしないでよねっ!別にケントの事なんかなんとも思っ

いんだから！」って……良いねえフィニのツンデレ化。っていうか、可愛い子はどんなキャラでも可愛いよ。

「ハハ。夫婦だってさ。そんな風に見えるのかな？」

「えっと……どうでしょう？」

フィニの控えめな返事。

「俺なんかとそんな風に思われるのは心外だろ？以後、ちょっとだけ気をつけるかな。」

「あ、いえ、そんなことは、決して……」

優しいフィニは俺を傷付けないようにそんな風に言うけれど、でもだからって俺と夫婦なんてあまりにフィニに失礼と言うものだ。

俺はフィニに軽く手を振って応えようと、空気を読まずに「では、皇帝のいる場所へ案内しよう。」なんて言うシュレンに後に着いてすたこらと歩き始めた。

「もう！」

後ろでいじけた様に憤慨するフィニの可愛らしい声が聞こえた。

## 十七章 “ルヴィス帝国第92代皇帝”

『皇帝』……その言葉を聞いて何をイメージするだろうか。

王、貴族、支配者、e t c……まあ、なんにせよ絶対的な権力を持つ、決して逆らってはいけない相手。

概ね、そのような意味の言葉として『皇帝』と言う言葉を捉えているのではないだろうか？

少なくとも、机にぐったりと突っ伏しているゲル状の何かではあるまい。

通された場所はまさに執務室といった風体だった。書斎と言っても良い。

シュレンに着いて歩き、両開きの扉を超えた先は、隅々まで背の高い本棚に囲まれて中央には大きな木製の机置かれ、そして大量の書類に潰されそうになりながら机に突っ伏しているゲル状の何かだった。

「陛下!？」

扉をシュレンが軽くコンコンと叩き、それに対して「入れ」という返事が聞こえたので入った。その瞬間に目に飛び込んできた光景に、シュレンが慌てたような声を出す。

「おー……?」

そのドロドロした何かは間延びした間抜けな声を出した。どうやら、人らしい。スライムみたいだけど。

「また液化したんですか!？」

「うーむ……こうしておると、気持ちいい……」

良く分からないが、皇帝とやらは『液化』とやらをして体をゲル状にしている……のだろうか？

「陛下！」

「あー分かった分かった……」

そのスライムは気だるそうにシュレンに一度答えた。

「仕方ない。」

そう一度呟くと、そのスライムは急にうねうねと動き出して人を象り始め、やがて一個の人体を作り上げた……裸の。

若々しく、どこことなく幼さは残るが精悍な顔立ちに、ビシッと引き締まった体躯をしている。

シルバーブロンドの髪はオールバックに後ろへ流され、前髪が何本かずつの束になって上方へ跳ねている。

「……」

「……」

無言の俺とフィニ。

個人的に言えばフィニには「キヤー！」とか、少しは乙女っぽい反応をして欲しかった所だが、思えば真っ先に俺とフィニって全裸で向き合ってるんだよね……その時もフィニって……

「ふむ。反応が芳しくないようだが？」

元スライム男が声を発す。低くて渋いダンディーな声だ。

「えーと？もしかして……」

流石に戸惑ったが、このまま声を発しないと失礼になるかと思い、ゆっくりと言葉を絞り出した。

「察しの通り、我がルヴィス帝国第92代皇帝ウルティール  
Ⅱダガルルヴィス様です。」

全裸で胸を張り、シュレンに紹介を受ける皇帝……とりあえず、シュレンの話を聞いて俺の中に出て上がりかけていた『立派な皇帝』  
像は木っ端微塵に砕け散った。

「ふむ。つまらん。仕方ない。」

そう言うとう皇帝は掌をパンパンと二度鳴らした。

すると、どこからともなくメイドさんらしき女性が現れ、一瞬で力  
ーテンの様な物で皇帝の体を覆い隠す。

すぐにその幕は取り払われ、そこには豪奢な格好をした、まさに若  
い皇帝然とした人物が立っていた。

メイドさんは即座にどこかへ消えた。

「おや？誰かと思えばわざわざ無償でカレイプスの討伐に出  
向いたシュレン君ではないか。」

無償ね。

そういえば、もともとあの村は見捨てられる予定だったのをシュレ  
ンが無理強いしてカレイプス討伐に乗り出したって言ってたな。  
ってことは、あの村を見捨てた諸悪の根源はこの皇帝……



まずいな……どれだけ考えても、シュレンの言う『国民の平和を第一に考えてくださる立派な方』をイメージできないんだが……

「はい。シュレン＝クル＝ルグタンス、ただいま帰還いたしました。」

シュレンは敬礼して皇帝に応えた。

「あーそうか……では、そちらの二人が報告にあつた勇者とその恋人か？」

サラツと恋人とか言うんじゃないねー！

こちらら華も恥じらう健全な男子生徒じゃ！って、あれ？なんか違う？

まあそれは良い。

ほら！またフィニが顔を真っ赤にしちゃったじゃないか！

「はい。」

シュレン、テメーコラ！肯定してんじゃないよー！！

肯定されて俺は内心超嬉しいけど、それは別の話……

フィニを傷付けたりしたら、いくら皇帝でも殴り飛ばすからな！

「そうか。じゃあ仕方ない。とりあえず、そちらへ掛けたまえ。」

またも皇帝は掌を鳴らす。

すると、先程のメイドがチンツ張りの豪華な椅子を三脚アツと言う間に並べてくれた。そして、またしてもあつと言う間に消えてしま

う。

俺の動体視力でも捉えられないなんて……あのメイド……何者！？  
と、凄腕ぶってみる俺……無様。

「では、まずは細かい報告から訊こうかなシュレン君。」

椅子に座った俺達を見て一度頷いた皇帝は、まずシュレンに気だるそうにそう声を掛けた。

「はい。我々帝国騎士団シュレン隊は三日前、ランクルート草原を南に280キロ先にある村を襲うカレイプスを討伐するため、帝都を出発しました。到着した時には、既にカレイプスはこちらのケント、フィニの両名により討伐された後でした。我々帝国騎士団の到着は間に合わず、彼らがいなければ村への被害は甚大であったと思われます。その功績を讃え、また異国の旅人である彼らを歓迎すべく、こうしてお連れしました次第です。」

異国の旅人ねえ……一応シュレンは信用できると思って俺達が世界から来たという事を話したけれど、だからって皇帝が信用できるとは思わない。

だから俺はシュレンに頼んで、俺達の事情は出来るだけ伏せて貰うよう頼んでおいた。

「ふむ。先の伝令の内要とほぼ同一だな。それで？報告はそれで全てか？」

「はい。」

「そうか。仕方ないな。」

どうやらこの皇帝は『仕方ない』が口癖らしい。どうにも皇帝として信用できないなあ……

「とりあえず、勇者君との決闘騒ぎは不問にしてやろう。」

「……」

あ、シュレン固まった。ピキッて感じで固まった。

良い気味だって思ってしまうのは俺の性格が悪いからではないと信じたい。

「いえ！」

あ、シュレン復活した。

「その騒ぎは自分の未熟さが生んだ物！喜んで罰を受ける所存です！――」

いや、確かにシュレンが短気だったせいもあると思うけど、挑発したのは俺だし、全然シュレンは悪くないよね……

と、そうシュレンをフォローしようとしたが、それはシュレンのこちらに向けられた視線によって遮られた。

「分かった。だが、それは後回しにしよう。こちらの案件の方が重要そうだ。」

そうして、皇帝が今度は俺とフィニの方を向く。

その眼光は予想外に鋭く、気だるそうにゲル状化していた人物と同一だとは思えなかった。

「私の方からも言いたい事はあるが、その前に君達の方が私

に言いたい事がありそうだ。まずはそれを聞こう。」

そして、そんな事を宣た。

「では、一つだけ教えていただきたいことがあります。」

俺の隣でフィニが明らかに怒りを孕んだ声音で皇帝に言葉をぶつける。

「あの村はなぜ見捨てられたんですか？」

フィニのその声音は怒りどころか、その勢いは敵意と言っても過言ではない。

村を助ける事の出来る力を持ちながら、なぜ村を見捨てなければいけなかったのか……どうしても問いただしたかったのだろう。だからその怒りは、そのままフィニの優しさなんだ……

どうでも良いけど（良くもないけど）さ、この後で断頭台行きとかになりませんよね？

## 十八章 “異国民？貴族？”

気付けばフィニは大粒の涙をまた溢していた。

まったく……ろくに言葉も交わしていない人のために泣けるなんて……

それはもう優しいなんて次元じゃないよな。

「あー……まあ、なんだ？分かってくれってなあお嬢さんには酷な話だったのは分かる。仕方ない。」

泣き出したフィニを見て、皇帝は困ったように言葉を紡ぎ出した。

「でもな、やっぱり分かってくれ。私だって訳もなく自国の民を見捨てるような非道ではない。出来ることなら助けたかった。」

「では、なぜ？」

涙を拭いながらフィニは問い返す。ただ、そこには皇帝としての並々ならぬ理由があった事を悟ったのか、先程の責めるような気配は無くなっていた。

「それは国政事情であるがゆえ異国民である貴女に話す事は出来ない。」

しかし、皇帝はそこだけはきつちりと断った。

先程までのだらけたイメージを一蹴する様な、そんな毅然とした皇帝の言葉だった。

「だから、私の事は民を見捨てた冷たい皇帝と受け取っても

らって結構だ。」

「……いえ。」

その皇帝の言葉にフィニは何も言い返さなかった。

皇帝がどれほどの葛藤を経て『民を見捨てる』という決断に踏み切ったのか、フィニなりに何か思う所でもあったのかも知れない。

フィニはやや冷静になった面持ちでゆっくりと椅子に座り直した。

「ところで、自己紹介して貰っても良いかな？」

その言葉で、俺はまだ自己紹介もしていなかった事に気が付いた。

そういえば……いきなりのゲル状に直面したせいで何も言っ

てな

うわー……なんて俺って失礼な……自己嫌悪。

「あ、すみません……名乗りもせずに失礼な事を……」

フィニも同じことを思ったらしい。

ここはフィニが自己嫌悪に陥ってしまう前に俺から名乗ってきつちりフィニをフォローすることが大切だろう。

「俺はケントっていいいます。どうぞよろしく。」

そう言っ

て頭を下げる。

「私は、フィニと申します。」

聊か安心した様子でフィニが続いて名乗った。

「いや、名前は分かっている。姓名と称<sup>ショウ</sup>、それに出身国を教えて貰いたいんだ。」

ビキツと固まった。

どうやら皇帝殿は名前だけじゃ不服なご様子。

だからって……姓名は、まあ苗字のことだろうけど、ショウって何だ？ 章？ 称？ それとも賞？

それに出身国……『日本です』じゃあ通じないよなあ……

「ああ、いや……深い意味は無い。」

固まった俺達を見て何を勘繰ったのか皇帝は慌てたように両手を振った。

「我が国では見ない異国の装束であつたから、純粹に興味があつて聞いただけだ。言えない理由があるのなら、無理に訊きはしない。」

どうやら皇帝が変に勘繰ってくれたお陰で無用な説明はしなくて済みそうだ。

「だが……その服、相当良い素材で出来ている。我が国であれば貴族の装いくらいにしか使われないほどの……」

しかし、皇帝はそれだけで見逃す気はなさそうだ。

俺やフィニの服をジロジロと見渡しながら、勝手な推測を次々と口にする。

「もしかして君達は貴族なのか？」

いいえ、違います。と答えた方が良くないだろうか？

「だとしたら、旅をしている事にも相当の理由がありそうだな。名乗れないという事にも合点がいくし、出身国など当然明かせぬだろう。仕方ない。」

最後に皇帝は自分で納得して完結させてしまった。  
どうやら随分と思いこみが激しいらしい。

「（まあいいか。）」

「（アハハ……そうですね。）」

隣のフィニとこっそり言葉を交わす。

フィニも大分落ち着いたらしく、笑顔で応えてくれた。

「さて、シュレン君。先程の罰の件だが……」

「はい！なんなりと！！」

俺達と皇帝の会話に口を挟まず黙っていたシュレンが皇帝に言葉を向けられた途端、背筋をビシッと正して規律姿勢を取りながらハキハキとした口調で応えた。軍人の鏡だ……軍人のことなんて知らないけど。

「そうだな。カレイプスを討伐し、かの村を救った勇者と決闘騒ぎを起こすなど言語道断だ。」

さっき不問にするって言ったのになあ……なんでシュレンはわざわざ罰を受けるかな？俺には分からね。



「よって、罰として……」

「ちよっと待ってください!」

しかし、挑発したのは俺だ。

悪いのは俺なのにそれでシュレンが罰を受けるなんて、そんなの倫理的に間違っている。

俺は駄目人間であるかも知れないが、それでのほほんとしていられるほど人間失格ではないつもりである。

「シュレンを挑発したのは俺です。シュレンは悪くないんですよ。俺が意味もなくシュレンに喧嘩を売りました。」

「ケント!それは言わなくて良いとっ……」

言っていないよね。

「ふむ……」

皇帝は俺ん言葉を聞いて少し考える仕草をした後、再び口を開く。

「だからといって軽々しく挑発に乗るなど騎士としてあるまじき行為である。よって罰として……」

そこで皇帝は一端言葉を切った。

「今日の日が暮れるまで騎士昇華訓練を受ける事を命じる。」

「は……はい!!」

うん?一瞬シュレンが言い淀んだ?

罰を与えてくれと懇願したのはシュレンなんだから、むしろ「はい

喜んで！」くらいの返事をするもんだと思っていたんだが……

「さて、セント殿とフィニ殿は今夜の晩餐に招待しよう。それまで時間もある。時間がきたら迎えを寄こすから、それまで帝都内をゆっくり探索でもしていてくれ。」

皇帝は最後にそう言って話を締め括った。

十八章 “異国民？貴族？”（後書き）

村を見捨てた理由は語られず……どうしましょう？（オイ

## 十九章 “騎士昇華訓練 其の壱”

皇帝はこの後事務仕事があるそうで、あのメイド忍者（俺命名）に席を外すよう丁重に申しつけられた。

「自由に見学してろって言ったってなあ……フィニ？」

「そうですね。この街の事も何も分かりませんし……」

案内人無しでは間違いなく迷子だ。

「そうだな。私が案内できれば良いんだが……」

そこにシュレンが申し訳なさそうに口を挟んだ。

絶対にシュレンは悪くないのに、全て自分のせいだとしても言いたげな、どこか気に障る言い方だ。

こんな言い方されたら謙虚を美德とする日本人たる俺は許すしかないじゃないか。

「まあ気にするなよ。わざわざ自分から罰を受けようなんてそうそう出来ないことだって。」

「そう言ってもらえると助かる。」

遠まわしに『生真面目で損をする馬鹿』って言ってるんだけどね。

「それよりもさ、騎士昇華訓練って何なわけ？」

「き……騎士しょう……騎士昇華訓練というのは……だな……」

……」

なんかシュレンの声が震えている。

「騎士見習いや劣級騎士が一段階上に昇格するために受けなければならぬ訓練の事ですよ。」

ランクルート城から出て、広い庭園を外に向かって歩いていく俺達の背後から声を掛けられた。先程別れたウルナだ。

「えっと……つまり？」

「つまりですね、これを申し付けられるということは、騎士失格だと宣告される様なものなんです。名誉はこの訓練を騎士見習いや劣級騎士と混ざってやり抜く事で回復します。」

公開処刑の恥晒しってわけか。

「まったく……隊長らしいですよ。真面目なのは良いですが、生真面目過ぎるのはどうか、とオレは何度も言っただしょう？」

「すまんナウルナ。そういうわけで、私は訓練場の方へ行く。二人の案内を任せられるか？」

「了解しました。」

ウルナが敬礼でシュレンに応える。

それを見たシュレンは即座に飛ぶように去って行った。なんだか逃げ出したみたいに見える。

「さて、先程は一人勝手に抜けたりして失礼いたしました。」

途端、ウルナは急に俺とフィニに向かって頭を下げた。

「あ、いや。別に何とも……なあ？」

「はい？はい！」

困った俺はフィニに助けを求めて話を振った。  
フィニは困惑しながらも力強く肯定した。

「そうですよ。何か用事があつたんですよね？」  
「はい。」

それだけウルナは頷いたが、詳しい内容は教えてくれなかった。  
…まあ仕方ない。つてあれ？もしかして皇帝の口癖、移った？

「では案内をさせていただきますが、何か希望はありますか？」  
「？」

フィニと目を合わせた。フィニも大体俺と同じ考えっぽい。

何か希望はあるか、なんて決まってるじゃないか。

「騎士昇華訓練を見学したい。」  
「はい。では、露店の方で適当に昼食を摂ってから訓練場の方へ行きましょう。」

ウルナも良い表情で同意してくれた。

「訓練をやり通す事で名誉を回復すると言いましたが、そもそも騎士として階級を上げて行くにはこの訓練を受ける必要があるのです。私も三回ほどこの訓練を受けています。なぜそれが罰になるのかと言いますと……」

焼きそばの様な味がする焼きそばの様な何か（それはもう焼きそばじゃないのか？と思うけど、どこか焼きそばじゃなかった）を昼食として食べて、俺とフィニはウルナに連れられてサッカー場のよ  
うな楕円形のフィールドへ連れて来られた。

「この訓練が百戦錬磨の隊長でも倒れそうになるほどキツいものだからです。」

そうらしい。

まあようは、ドギツイ訓練で騎士魂を思い出せという事らしいのだ。

でもまあ、以前に一度乗りきった訓練に参加するだけなんだから、名誉の回復なんて完全な出来レースだよな。

多少辛くても、それを乗り切るだけで不問になるっていうならどう  
ってことは無いだろう。

「丁度始まるようです。」

観客席なのか、扇状に広がっていくつものベンチが並べられた場所  
に俺達は腰を下ろした。

芝生の敷き詰められたフィールドには14人の似たような甲冑に  
身を包んだ男女が二列になって並んでいる。

ここから見て右の列の一番後ろにシュレンがいる。表情はどことなく  
嫌そうだ。

その二列に並んだ先に一際高い台座がある。

その上に一人の男性が立っていた。

黒衣に身を包んだその男性はサディスティックな表情で並んでいる

騎士達を見下している。

やがてその男が口を開いた。

「テムエらはクズだ。」

いきなり何なんだ！？

「クソの役にも立たねえクズだ。どうしようもねえクズだ。戦場に出たら何も出来ずに死ぬようなクズだ。」

なんとという凄まじき罵倒の嵐……

「これはテムエらみてえなクソの役にも立たねえクズをクソの役くらいには立つクズに鍛える為の訓練だ。テムエらみてえなどうしようもねえクズをどうにかなるクズに鍛える為の訓練だ。テムエらみたいな戦場に出たら何も出来ずに死ぬようなクズを何とか戦ってから死ぬ事が出来るクズに鍛える為の訓練だ。」

壇上の男はそこまで一気に言い切り、そして一度大きく息を吸い込んだ。

「分かってんなら突っ立ってねえで今すぐその場で腕立て伏せ1000回やりやがれ！！」

返事すらせずにフィールド上の騎士達は一斉に地面に両掌を着いて腕立て伏せを始めた。

「何？あれ……」

「人間が疲労を忘れる感情は何と言っても『怒り』だそうで



ああやって騎士達を発起させて訓練を乗り切らせよう、というのがあの教官殿の談ですが。」

嘘だ。あのSっぷりは絶対に素だ……楽しんでやってるに決まってる。

それにしても、いきなり腕立て伏せ1000回か……多分俺には出来ないな。

「終わったら立ち上がれ！崩れたらやり直せ！死んだら生き還れ！テメエらみたいなクズは勝手に死ぬ権利すらねえんだよ！！」

黒衣の教官は500回を超えて苦しそうになっている騎士達を順に踏みつけながらそう声を張り上げている。

しかしまあ、何と言っても騎士だ。

あんな重そうな鎧に身を包んでいるのに、それでも腕立て伏せを1000回やり切れそうなのは流石と評するべきだろう。

「おや？シュレンか？面白い。よし特別だ。私がお前の背中に乗ってやろう。」

そう言つと教官は涼しい顔で腕立て伏せを続けていたシュレンの背中へ腰掛けた。  
途端、シュレンの表情が苦しそうな物に代わる。

「ありがとうございます！是非やらせていただきますー！！」

ややヤケクソ気味にシュレンはそう叫んで、我武者羅に腕を曲げ伸ばしする。

それでも出来るのがシュレンの凄さだろうか？

やがてチラホラと腕立て伏せが1000回終わった者が立ち上がり始める。

それを見て教官は満足げに微笑むと、

「よし！1000回できた者は次だ！指立て伏せを2000回！できたら片腕立て伏せを各4000回！最後に片手指立て伏せを各10000回ずつやったら立ち上がってよし！！」

そう叫び、また当然のようにシュレンの背中へ腰掛けた……鬼だ。

そんな調子で地獄の騎士昇華訓練は続く。

## 二十章 “騎士昇華訓練 其の貳”

地獄とはまさにこの事なのだろう。

腕立て伏せだけであの鬼のメニューであるというのに、それだけでもまだ半分も終わっていないというのだ。

この先どんなメニューが待っているのか、想像するだけで……

「楽し過ぎるぜ。なんたって『他人の不幸は蜜の味』っていうくらいだな。」

「それはケントの世界での戒訓ですか？」

「まあ諺だね。似たような物だよ。」

「人の心理をよく突いた言葉ですね……それだけに、心の冷たさが私は悲しいです。」

訓練自体が厳しいのは仕方が無いとしても、それを見て楽しんでいるのは人としてどうかと思う……ってことか。

「ああ、いやごめん。冗談。俺だって頑張ってるシュレン達は心から尊敬できると思うし、こうなるとちょっと茶化したくなっちゃってさ。ごめん。」

「そう……ですよね。」

やれやれ……まあ確かに、人でなしな発言だった事は反省しとこう。

「さて、次はどんな訓練なのかな？」

「皆さん頑張ってください！」

やっと片手指立て伏せに入った騎士達にフィニが応援の言葉を掛

ける。

反応は無いが、しかし皆さん（特に男性陣）の腕立て伏せの速さが加速した所から見ても、どうやら応援は届いたようだ。

「テメエらみたいなクズに声援が送られたぞ！鈍間な愚図共おー！これで体力も回復したな！良し！メニューを三倍にしてやる！ー！」

そこへ教官の檄が飛ぶ。うわ……鬼だ。

声援を送ったせいでメニューが三倍になった事を気にしてか、フイニはしおらしく沈んでしまった……可愛い。

「全員終わったかあ！」

気付いたら、どうやら全員やり切ったらしい。

流石は騎士……あの地獄の腕立て伏せをやり切るだけでも相当だ。

皆して顔が死にそうだけど……特に人を一人担いでいたシュレンが……

「走れ！」

いきなり教官はそう指示を飛ばす。

「倒れるまで走れ！潰れるまで走れ！死ぬまで走れ！ー！」

そこまで言い切ってから教官は指を鳴らす。同時に騎士達は訓練場の中を走り始めた。

何故か、まるで50メートルを走り抜けるような全力疾走で。

「【妖精よ】【強化を求める幻惑の理】【立ち止りし者に罰を与えよ】」

そこに教官が何事かを呟いた。

途端、薄桃色の霧の様なものが走っている騎士たち一人一人を包み込む。

「その全速力の速度を一瞬でも落としてみる。死ぬほど後悔するぜ。」

そんな教官の声が不気味に轟いた。

さらに速度が上がる騎士達……何が起こるか分からない状況がより恐怖を加速させ、足の動きを自然と速めるのだろつ。

「無制限全力走……つてやつか。」

文字通り、ゴールの見えないマラソンを延々と全力ダッシュするトレーニング法……

精神力と瞬発力、そしてスタミナが付く無駄のないトレーニング……ただしそれは、膨大な体力がもとめと備わっていることが前提……でないとい怪我するし、危ないし、倒れるし……

でも、彼らは騎士だし、確かにもとめと膨大な体力はあるんだよね……可哀想。

「ゼエ……ゼエ……」

先程の腕立て伏せ地獄の直後である。いくら体力のある騎士とはいえ、流石にスタミナは限界だろつ。目に見えて速度が落ちて来た。

やがて一人の女騎士が立ち止ってしまふ。  
見るからに苦しそうで、肩で息をしている。

「止まったな？じゃあ、死ぬ。」

そこに静かに落ち着いた声音の、それだけに恐ろしい教官の聲が響く。

「キ、キヤアアアア！！！！！」

ちよつと可愛らしい悲鳴を上げながら、その女騎士は頭を抱え、そして先程の疲労感など消し飛んだかのように再び全力疾走の速度を取り戻して我武者羅に走り出した。

「何！？」

「妖精魔術ですね。立ち止まる事で起爆するよう教官殿が仕掛けたのでしょう。効力は、恐らく……立ち止った者に恐怖の幻覚を視させる事……」

ヨウセイマジュツ？妖精魔術？固有名詞はよく分らん。  
また後で説明して貰おう。

兎に角、その光景を見た騎士達の間はその幻惑の恐怖が伝播したのか、さらに駆け足のペースが上がる。しかし、そうなれば当然疲労感が増すわけで……一人、また一人と体力の限界がきて足が止まり、そして恐怖の幻覚に発狂した様な叫び声を上げながら再び駆け出す……

それはなんて地獄絵図だっただろう……

「フツ、フツ、フツ……」

そんな中、唯一一度もペースを落とさずに走り続けていられたのはシュレン唯一人。

シュレンだけが、一度も立ち止まらず、よって恐怖の幻覚を見ていない。

流石は若くして隊長なんて呼ばれるだけの事はあるのだろうか？

「最後に戦闘訓練を行う！」

およそ三時間ほど全速力で走らせ続けた後、教官はそう声を張り上げる。

「全員これを持って！」

そう言いながら教官が指を鳴らす。

気付けばそこには何本もの木刀と、同じくいくつもの木製の盾が入れられた籠が二つ並んでいた。

騎士達は言われた通り、各自一人一セットずつ、木刀と盾のセットを受け取った。

「よし！一人につき五人打倒せ！五人打倒した者から訓練を終了してよし！！やられても立ち上がれ！五秒以上寝ていた奴には私が直々に魔術を打ち込む！分かったらさっさと戦えやあ！！！」

うおおおおお！と騎士達は吠え、そして互いにぶつかり合う。ガギツと木刀同士を本気でぶつけ合わせなければ鳴らない音が次々と響き渡る。

それでも折れない木刀も盾もどれだけ丈夫なんだろう……

「ハアアアアア！！」

裂帛の気合と共にシュレンは木刀を大上段から振り下ろす。

それを盾で受けた騎士が勢いを堪え切れずに後ろへ吹き飛び、地面をゴロゴロと転がって意識を失う。

え〜と……1、2、3、4、5……

「【精霊よ】【叱咤を求める業火の理】【寝ているクズを燃やせ】」

きっかり五秒後、そのシュレンにやられた騎士に向かって教官から火球が放たれた。

その火球は寸分狂いなく直撃し、その騎士は大慌てで起きた。髪の毛が半分チリチリになっていた。

「さて、そろそろ晚餐の時間の様です。」

急にウルナがそんな事を言い出した。

「え？」

それに思わず問い返してしまったが、すぐに気が付いた。

校庭の部屋にいたあのメイド忍者が俺とフィニの背後に当然の表情で突っ立っていたからだ。

気付けばいつの間にか空は赤く染まり、夕焼けの綺麗な景色が広



がつていた。

「ケント様、フィニ様、お迎えに上がりました。ただ今から、ルヴィス皇室晩餐会に招待いたします。」

そうメイド忍者は無感情に告げた。

## 二十章 “騎士昇華訓練 其の弐”（後書き）

ちなみにこの騎士昇華訓練は僕が以前に実際にやらされたトレーニングをモデルにしています。

勿論、こんな地獄みたいな事はやらされていませんが（笑

## 二十一章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の壱”

メイド忍者は慇懃に礼をした姿勢から動かない。これは、きっとアレだ……俺がOKって言わないと先に進まないイベントだ……

「でも今、いいところ……」

「晩餐会に招待いたします。」

駄目だこれは……きつと梃子でも動かない。

「訓練の様子は後でお教えしますので、ご心配なく。」

そこにウルナがそう助け船を出してくれた。

まあそれなら良いか、と思い直して、俺はメイド忍者の方を向く。

「じゃあお願いします。」

「はい。」

メイド忍者は再度軽く頭を下げると背中を向けて歩き始める。どうやら付いて来いと言う事らしい。

「フィニ、行こうぜ。」

「そうですね。」

フィニとしては未だガンガンと武器をぶつけ合う騎士達の間には怪我人が出ないか気が気でないようだが、それでも俺が声を掛けたらちゃんと付いて来てくれた。

「それじゃあウルナさん、また後ほど。シュレンにはよろし

く伝えておいてください。」

「了解しました。楽しんで来てください。」

そして俺達はウルナに手を振り、訓練場を後にした。

メイド忍者に案内され、再び俺とフィニはランクルート城へ戻って来た。

二重構造の入り口を抜け、真紅の絨毯の上を通り、「こちらが会場になります。招待客が全員揃うまでしばしの間お待ちください。」とメイド忍者に言われたので、そのまま扉を潜った。その先に待っていたのはトラブルだった。

「なんだか泥臭い臭いがするなあ。」

開口一番に何なんだよ……

「おや？君は怒っているな？これは驚いた。地を這う蟲にも感情があつたとはな！アッハッハッハ！」

広い部屋だ。あえて表現するなら結婚式での披露宴の会場。

地面は真紅とは違う落ち着いた色調の絨毯が敷き詰められ、その上にテーブルクロスが掛けられた丸テーブルがいくつも等間隔で並べられている。

まだ何も置かれてはいないが、恐らくは料理が並べられるのだろう。椅子が無いように見えるのは立食パーティーだからだろうか。

その部屋の中、案内されて扉を潜ると、目の前に一人の男が立っていて、こちらが何かを言いすらない内にいきなり罵倒された。

肩まで届く男性としては長いプラチナブロンドの髪はウェーブが掛けられているかのように波打っており、その髪を掻き揚げる仕草はまさにナルシストその物と言った風体だ。

スツと通った鼻筋からも端麗な顔つきである事が分かるが、俺にはとても彼が女性受けするタイプの人間には見えない。

「何か言いたまえよ。それとも、地を這う蟲には我々の言葉が理解できないのかな？」

しかし、俺もフィニも怒ってはいない。

部屋の中にこのナルシスト男以外に誰も居なかったから。そして、そのナルシスト男の罵倒の言葉が、大人に構って貰いたい子供の言葉のように聞こえて、なんだか微笑ましくなってきたから。最後に、そのナルシスト男が身長125センチ程度の半泣きの子供だったからだ。

「おゝよちよち怖かったのかな？寂しかったのかな？もう大丈夫だよーお兄ちゃん達が来たからね？寂しくないよー。」

仕方なく、俺は生意気な感じがするこのナルシスト男、もといナルシスト少年の頭を撫でる。

「ぼ……私を馬鹿にするなよ！これでもぼ……私はバリアン家の当主サレファ―レイ―バリアン公爵なのだぞ！」

『僕』と言いそうになるのを必死に私と言い変えてる仕草は可愛い。

まだ成長期も抜けていない少年その物……俺の世界的に言えば大体

小学校三年生くらいだろうか？

それにしても、公爵とききましたか……確か爵位の中では一番偉い位じゃなかったっけ？

そうになると、このちびっ子はこの年で公爵なんて立場を手に入れるつわもの兵と云う事になるが……

「やーん。可愛いー！」

「ムギユツ！？」

どうやらそんなものはフィニには関係なかったようで、背伸びしたような仕草に萌えたのか、フィニがナルシスト少年もといサレフアーを思い切り抱きしめた。……おいサレフアー、俺と代われ。

だけどまあ、大丈夫、フィニのが可愛いよ……とは言わない。

「ええい離せ！貴様らの首なんぞぼ……私の一声で簡単に飛ぶのだぞ！大体誰だお前達は！！ぼ……私の次に入場するのは憎きネルグラン伯爵の奴だったはず！」

どうやらサレフアーは俺達ではなく、ネルグラン伯爵とやらを罵倒するつもりだったようだ。

「俺たちが誰かだと？フツ。そんなものは決まっているじゃないか。」

「何だ貴様……その自信は……」

俺達が誰かなんて……そんなもの……そんなもの……

「俺達は誰だ？」

ズコーって感じでサレファアがずっこけた。

「なあフィニ？俺達の立場を分かりやすく説明してくれ。」

「えーとですね、カレイプスから村を救った勇者とその御供の女性では？」

「フィニはそれで良いわけ？」

「はい。」

まあそう言う事らしい。

と、それだけのやり取りを交わして俺達はサレファアに向き直った。

サレファアは何やら自信満々な表情で俺達を下から見下していた。

「そうか、貴様らが例の客人か。ハッ！異国の、どこの馬の骨とも知れぬ蛮族を、由緒ある晩餐会に招くなど、皇帝陛下も耄碌されたものだ。」

まあいくら子供の言う事だからって、何でもかんでも見過ごすわけにはいかないよな。別に、子供の言う事にキレたとかそんなんじゃないぞ！教育が必要だよ、うん。そう、教育が……

「よしフィニ。今の言葉、皇帝に告<sup>チク</sup>ろつ。」

ごめん、ブチギレた。

「な！？おい貴様！誇りは無いのか！？」

予想通り焦るサレファアー。

そりゃ、皇帝を罵倒したととれる発言だ。皇帝なんかに告げられたら困るだろう。

「ケント、相手は子供です。」

「いやいや、子供だからって見逃すから増長するんだって。ここは一度皇帝にガツンと叱って貰おうぜ。」

「そう言う場合、普通親に告げるのでは？」

そのフィニの発言の瞬間、俺に向かってガーガーと吠えていたサレファアが急に黙った。

「僕に親はいない。」

あー……

「あーその………すいません。」

「ふん。気にすることではない。」

サレファアは一度だけ俺を睨むと興が殺げたとばかりに俺達から離れ、近くの壁に寄り掛かって目を閉じた。  
寝るわけではなさそうだが、誰も近寄ってくると言いたげだ。

「そうそう気にする事ではありません。」

「うわっ!？」

心配そうにサレファアの方を見遣るフィニに見蕩れていたら、急に背後から声を掛けられて驚いて振り返った。

「どうも、ヒュース・タカ・ネルグランです。以後お見知り置きを。」



やや厭らしい笑みを浮かべた男性だった。  
タレ目で、鼻も低く、なんだかとてもスケベな感じ。

「特に貴女。」

「私ですか？」

「はい。今後とも好きお付き合いをお願いいたします。」

「ふえっ！？」

気障つたらしい事に、そいつはフィニの手の甲にキスしやがった。  
キスしやがった！キスしやがった！！  
ああ……こいつがサレファアの言ってたネルグラン伯爵だな……ブ  
チ殺してえ。

「では、また後ほど。」

「あの……その……」

ネルグラン伯爵はそれだけ言うと、サツと身を翻してツカツカと  
サレファア。この場合はバリアン公爵というべきか…… に歩み寄  
って行った。

「やれやれ……」

「アハハ……」

その後、少しずつ人が集まり、やがてテーブルの上に料理が並べ  
られて晩餐会は始まる。  
何事もないと良いんだけどなあ……

## 二十二章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の式”

帰りたい……心の叫びだ。

「俺、浮いてるよな……確実に。」

「わ、私もですよケント。」

豪華なドレスやタキシードを着込んだ紳士淑女が談笑しながら食事をしたり、中央でワルツに合わせて踊ったり……

そんな中世ヨーロッパ的な世界にポンと送り出された現代人たる俺。格好だつて白生地の上着にジャケット羽織って、下はデニム生地のパンツなんていう素晴らしき私服。

フィニの格好も到底周りの人間にマッチしているとは言い難い。

結局、俺もフィニもそんな世界に入って行けず、適当に皿に盛って来た料理を隅っこで二人で食べている。

「お飲み物は如何ですか？」

ふいに横から声を掛けられた。

丸盆の上にいくつものグラスを乗せた若い男性だ。

「ええ……ああ……あの、結構です。」

しどろもどろになりながら断る。

だつて……だつて……なんか怖い。

「そうですか。」

それだけ言って去って行き、また別の人に声を掛けている。

丁度グラスの中の飲み物が空になっていた老紳士で、その老紳士は快く受け取った。

「もう逃げようか？」

「ケント、気持は分かりますが……」

俺を窘めるようにフィニが言葉を紡ぎかけたところで、しかしフィニが口を噤んだ。

一人の端麗な顔をした若い男性が近づいてくるのが見えたからだ。

「お初にお目に掛ります。ワタクシ、名をウェルストンと申します。」

いきなりフィニの目を真っ直ぐに見てそんな風に自己紹介してくれた。

見た感じ若くしてかなりのお偉いさんって雰囲気だ。

侯爵とか伯爵とか地位名は知ってはいるけど詳しくはよく分からないし、どれくらい偉いんだろう？

「貴女のような美しい方がこの様な隅で肅々としていらしゃって、どうされました？」

ここで気付く。

ウェルストンと名乗ったこの男の眼にはフィニしか映っていない。俺なんて視界の隅どころか、脳内からも排除されている事だろう。

「もしよろしければ、お名前を教えてくださいませんか？」

「……フィニ。」

フィニはほんの少しの逡巡の後、控え目に答えた。  
それがどうやらウェルストンの琴線に触れたらしく、フィニを見る  
目が情熱的な物に変わった。

「なるほど。フィニ様ですか。変わったお召し物ですが、な  
るほど美しい貴女によく映える。今日この場で出会えた事を神に感  
謝いたします。」

「ふえ！？／＼／＼」

ウェルストンは気障ったらしい口上を並べると傳き、何かと思  
ったらフィニの手を取って何の躊躇いもなく手の甲にキスをした。

ネル格蘭伯爵に続いてまたあ！？

何？貴婦人の手の甲にはキスをするのが貴族の嗜みですか！？  
現代日本人たる俺だけが分かっていないだけなんですか！？

「一曲お相手願えますか？」

唇を話すと顔を真つ赤にしているフィニの目を真つ直ぐに見て、  
そして少し頭を低くしながら右手を差し出し、そう言った。

Shall We Dance? つか? ……こいつ殴っても良  
い?

「おやおや、またウェルストン卿ですよ。」

「今度は異国の少女ですか。全くもって物好きなことですな。」

「関わらずに居ればいい物を、自ら関わって行くとは……」

そんな風にやり取りする声が聞こえた。

その話から察するに、このウェルストンという男は相当の女つ誑しな上に物好き男ってことですか……

「え？でも、その……」

フィニは困ったように俺とウェルストンの右手の間で視線を往復させる……何故こっちを見る？

そのフィニの視線を追って、漸くウェルストンは俺がいる事に気付いた。

「おや？気がつきませんでしたな。女神と見紛うほどの美しい方がいらっしやると思いきや、その傍らには羽蟲の様に汚らわしい男。」

言ってくれるぜ……

俺は右手に握りこぶしを作る。

「お嬢さん、このような男は貴方に相応しくありません。是非、こちらの方で一緒にしませんか。」

ついでにフィニを攫って行こうとしゃがる……これはもう俺裁判的に死刑で構わないよな？

そういうわけで、俺は握りしめた右腕に力を……入れなかった。

「……とを……で……」

フィニの呟きが聞こえたから。

「え？」

どうやらウェルストンには聞こえなかったらしい。御愁傷さま

「ケントを馬鹿にしないで!!」

同時に響き渡るパァンという快音。

そう、フィニがウェルストンの頬を張ったのだ。

怒り心頭といった表情でウェルストンを睨むフィニ。

対してウェルストンは暫く何が起こったか分かっていない様子であった。

「あーフィニ？俺は気にしてないから、そんなに怒らなくて  
も……」

「私が怒っているんです！ケントの事、何も知らないのに！  
勝手なことばかり言って!!」

フィニの優しさだな。

人の為に怒れるなんて、やっぱりフィニは優しい。

「おお！あの少女、ウェルストン卿の頬を引っ叩きましたぞ。」

「気に食わぬ若造ではあったのだ。清々する。」

「しかし、由緒あるルヴィス皇室晩餐会であのような事をし  
でかして、皇帝陛下殿が何を仰ることやら……」

会場内はざわついていた。

まあどこの馬の骨とも知れない異国の少女が、見た感じお偉いさん

を平手で殴ったのだから当然だ。

まいったなあ……

「この女……」

漸く我に帰ったウェルストーンが怒りで顔を真っ赤にしながら、フイニを睨み返した。

うゝむ……ブチギレ状態だな。

「下手に出ておれば付け上がりおって……許さん！高貴な私の顔を傷付けたその罪、万死に値する！！」

いや、せいぜい傷害罪くらいかと。死刑にはならんよね。

「私だって許しません！ケントに謝ってください！！」

しかしフイニも頑として引かない。  
どうやら譲れない一線がありそうだ。

「まだも言うか！ならばその身をもって償え！！【精霊よ】  
【破壊を求める衝撃の理】」

うわ魔術！？

短気過ぎだろウェルストーン……

でも、まあ問題ない。

なんたってフイニの言霊の方が圧倒的に速い。

「止ま……」

しかしフィニが言霊を言い切る事は無かった。  
その前に、何者かの手がウェルストンの肩に置かれ、ウェルストンの魔術の詠唱（？）が止まったからだ。

「へ、陛下!？」

なんとビックリ皇帝でした。



## 二十二章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の式”（後書き）

こついう話を書くとき常々自分の文章力の無さと知識の無さを思い知らされます（汗）

なんたつて、まず皆さんの服装の表現が出て来ない。

どんな服を着てるのかとか、そもそもどんな人達が集まっているのか、とか……

他には的確な固有名詞が出て来ない。

どんな風に書けばいいのか分からなくて適当に誤魔化した文章が三カ所以上あります。探さないでください（汗）

文才もないですし読み辛いかも知れません。

こうしたら良いんじゃないか、みたいなアドバイスがある方は是非教えていただけると幸いです。

作品の感想も随時募集しておりますので是非よろしくお願いします。

## 二十三章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の参”

状況を説明しよう。

場所：豪華でだだっ広いとすら表現できるホール……披露宴の会場？

俺：間抜け……仕方ない

フィニ：可愛い……特記事項無し

目の前の男：名前はウェルストン。気障、短気、フィニに色目を使う、フィニの手の甲にキスをした……百万回殺しても足りない

皇帝：穏やかな顔でウェルストンの肩に手を置いている……ウェルストンの顔が良い感じに青褪めている。ざまあ

概ねそんな感じだ。

まあルヴィス皇室晩餐会なんて、いかにも伝統のありそうなこの場で魔術（？）をぶっ放そうとしたのを皇帝に制されているのだから、この世の終わり見たいな顔になるのは仕方ない。

大体、フィニの手の甲にキスしたりするから、俺の怨念によって罰が下されたのだ。

フィニの手の甲にキスしたりするから……フィニの手の甲にキスしたりするから……フィニの手の甲にキスしたりするから……

だから、後でネルグラン伯爵にも天罰が下ると嬉しい。

「ケントにフィニ、楽しんで貰えているかな？」

皇帝にそんな事を問われた。

正直に言えば楽しめていない。

ありえないくらい浮いていて気まずいし、高級料理の美味しさなんて分からないし（果物とかお菓子の類は美味しい）、挙句の果てにはウエルストンとかいう意味分かんのが出てくるし……

フィニに目配せをする。が、フィニはいまだ興奮冷めやらぬ怒り心頭の表情でウエルストンを睨んでいた。よほど俺が馬鹿にされた事が許せないようだ……嬉しい。

「はい、楽しいです。わざわざご招待いただき、ありがとうございます。」

しかしそこは流石フィニ、皇帝相手に怒りをぶつける様な事もなく、素晴らしい大人な対応で皇帝に礼を言いながら頭を下げた。

「それは良かった。さて、ウエルストン君。」

「は、はい……」

皇帝がウエルストンにゆっくりとした口調で話しかける。肩に手を置いたまま……ってか見てたのかよ。

ウエルストンはビクビクしながら皇帝に応えた。

「公衆の面前で我が客人を罵倒し、さらにはこの晩餐会の会場で魔術を放とうとするとは、当然罰を受ける覚悟はあるのかな？ 爵位剥奪も当然視野に入れて検討するが？」

皇帝の言葉は氷のように冷たい。

言葉の温度を測れるのなら、それはもう摂氏何度なんてレベルじゃなく、十二分に絶対零度にまで達していたと言えよう。怖すぎだ。

「う、それは……」

ウェルストンが若干涙目になりながらフィニを見る。

まあ確かにウェルストンにも言い分はある。なんたって確かにウェルストンは俺を罵倒したけれど、先に手を出したのは……先にウェルストンの頬を引つ叩いたのは何を隠そうフィニなのだから。

まあフィニはそのままアツカンベーとか言いながら下を突き出しそんな可愛い表情をしていたが……いや、フィニの性格上アツカンベーなんてやるとは思えないんだけど、これがマジで可愛いんだって！

というのは可愛らしい描写で、実際のフィニはまだ俺が罵倒された事を根にもった様子でウェルストンを睨んでいたのだが。

「ふむ。まあ男女の諍いという物はどうしたって感情的になつてしまう物だ。魔術も未遂である。」

唐突に皇帝はウェルストンを庇う様な口上を述べ始める。

その言葉にウェルストンは光明を見た、というような輝かしい顔を浮かべた。  
分かりやすい奴。

「かと言って、それで不問にしてはフィニ殿も収まるまい。」

同時に皇帝はフィニの方にも目配せする。

「さて、どうしたものかな？」

さらに皇帝が何を言うのかと思えば、特に何も言わず思案するよう  
うに右手を顎に当てた。

無責任な皇帝である。

俺としてはどうでもいいのだが、皇帝がこちらの方にかまけてい  
るせいで、皇帝に挨拶できていない他の貴族の方々が何とも気まず  
そうにしている。

こういう場での皇帝ってさ、なんていうかこう……一段高い所に  
ある豪華な椅子でふんぞり返ってるもんじゃないの？  
何をこっそりとパーティーに忍び込んでいるんですか？

「フィニ殿。」

不意に皇帝がフィニに声を掛けた。

「何ですか？」

フィニはウェルストンを睨むのに夢中だったためか、やや無然と  
した態度で皇帝に言葉を返す。

「この男、どうしたい？」

ウェルストンの肩に手を置きながら皇帝はフィニに、まるで夕食

の献立でも聞くかのような気軽な口調でそう問うた。

なんだ？フィニが死刑にして欲しいって言ったら死刑にしてくれるんだろうか？

まあフィニの場合は、フィニが本気で 死刑 って言ったら、その場で死刑になっちゃうけどね。

「ケントを馬鹿にしました。許しません。」

でも何でフィニは俺が羽蟲呼ばわりされた程度でこんなにも怒ってくれるんだろう？フィニが優しいから？優しいだけで俺みたいなやつのに怒るか？

それとも、現代で馬鹿にされるのに慣れまくっている俺の感覚が鈍磨しているだけで、実際は『羽蟲』なんていう言葉はブチギレるくらい酷いものなんだろうか？

でもなあ…… 自他共に認める駄目人間な俺だぜ？

羽蟲なんて言われるよりも相当酷い暴言は色々と言われているんだけどなあ……

「許さないだと？それはこちらの台詞である！よくも高貴なる私の顔に傷を……」

「ふむ。色々と言いたい事がありそうだな。」

「あ、いえ……その……」

フィニの許さない発言に対してウェルストンは憤慨したが、皇帝の絶妙に割り込んだ言葉に後が続かなくなった。

「なるほど。両者ともに言い分はあると。」

いやいやいやいや皇帝さん。

両者の言い分は明らかにウエルストーンの方が悪いですよ！

「貴族は誰も例外なくその背に家の名を背負っている物だ。貴族に対して危害を加えるという事は、いかなる事情があろうと、その家に剣を向けると同じ事。顔に泥を塗られれば、貴族は当然名誉を挽回せねばならないのだ。故に、ウエルストーンとて頬を張られれば、家名のためにも怒らないわけにはいかんだ。」

俺はよほど不満な表情をしていたのだろう。背後からサレファアが俺に向かって耳打ちをしてきた。

っていうかいつの間に俺の背後に！？

子供だから体重が軽くて足音がしなかったのか？

「男女の争いは当人同士が納得する方法で決着をつけるもの。」

皇帝はどこかいたずらっぽく俺に向かってニヤリと笑ってからそう口にした。

「どうやら互いに相手に対して強い敵意も持っている様子だな。これは、ルヴィス帝国古来よりの伝統として決闘で決着をつけるしかあるまい。」

ふん。





## 二十三章 “ルヴィス皇室晩餐会 其の参”（後書き）

ずいぶん遅れて申し訳ありません（汗）  
また頑張つて更新していきますのでどうか見捨てずをお願いします。

## 二十四章 “意地とプライド”

ルヴィス帝国において爵位を得る、すなわち貴族になるにはいくつかの方法がある。

一つは単純。

災害などが起こった際に人道支援に尽力することで爵位を得る事が出来る。

国家功労者に与えられるというわけだ。

最も単純であるが、これによって爵位を得ることは簡単ではない。それこそカレイプス級以上の国家を揺るがすレベルの災害を個人の實力において防ぐ事が出来なければならないのだ。

国を救い、大衆に英雄として祭り上げられでもない限りはこの方法で爵位を得る事は無い。引いては貴族となりえない。

二つ目は大きな意味では一つ目と大差はない。

戦争などで武勲を上げる事。それによって貴族へ迎え入れられることもある。

これも大きな意味では国家功労者に与えられる地位となる。

最もリスクが高いが、ある意味最も容易く爵位を得る事の出来る方法である。

そして三つめ。

現在の貴族のほとんどはこれによるものであるが、つまり親が高位の貴族であり、親が亡くなる時、またはその以前に家名を受け継ぐ事。つまりは世襲である。

ウェルストン ウェルストン「バダ」ユカール伯爵はその軽薄な性格からは想像もつかないが、二つ目の方法において伯爵の地位を

勝ち取った人物である。

そもそもユカール家は古来よりルヴィス皇室に仕える武家である。その現当主であるユカール大公は過去の大戦において並ぶ者が無いとされるほどの数々の武勲を上げた人物であり、その息子である所のウェルストンにもその才能は惜しみなく受け継がれているのとことだ。

つまりウェルストンは親の七光りではなく、自らの力によって自らを伯爵まで押し上げた類稀なる努力家でもあるのである……ただ、無類の女好きであり、また短気である、という性格に難有りというだけの話なのだ。

「ウェルストンについて話を聞いた事を纏めるとこんな感じかな。」

他国の民ということでは事情には疎いであろう、という温情なのか、わざわざサレファアが説明してくれた。

なんかやけに馴れ馴れしい。懐かれた？

「そうなんですか？」

フィニは心底意外といった表情で俺の顔を見る。

武術とは心身ともに鍛えるもので、武芸に秀でる者は人格にも秀でている傾向にある。

それだけにウェルストンのあの軟派な性格は腑に落ちないのであるう。

「それでも私はケントを馬鹿にしたあの男を許しません。」

現在、俺達は広いアリーナに立っていた。

あれだ。騎士昇華訓練が行われていた場所である。

現在、騎士昇華訓練は終了し、ベンチに座って休憩していたシュレンやらが「何事？」といった表情でこちらを見ているのが何だか可笑的い。

さらに続けて入って来た皇帝に労いの言葉を掛けられて恐縮していたのも笑える。

「でもさ、俺はフィニが戦うなんてなあ……」

フィニがウェルストンに対して怒っていて、ウェルストンも頬を引っ叩かれた恨みをフィニに持っているのだから、そりゃ二人が戦えば決着も着くだろうさ。

でも、女の子が、それもフィニみたいな可愛い子が男と戦うなんて、やっぱり日本男児としては捨て置けないよなあ……

的な事を皇帝に話したら、「ケント殿は女性は弱い者、男性は強い者と決めつけておるのか？か弱き女性には男性と戦う権利すら無いとでも？」とか言われちゃあ黙るしかない。

男女平等だ……悪い意味で、と呟いたら皇帝は「男女平等とは面白い言葉だな。」なんて言い返してきた。

「ケントは……その……私の事を心配してくれているんですか？」

フィニが何やら頬をほんのり染めながらそう俺に問うてきた。

まあ、フィニに怪我して欲しくないという意味では確かにフィニの心配もしているけど、どちらかというとフィニと戦うウェルストンの方を心配している。

本気になったフィニに敵うはずがないのだ…… ウェルストンがフィニの言霊以上に速く動けるならば別なのだが。

「ああ。そうだな。怪我だけはしないでくれよ。」

「はい。」

フィニは良い笑顔で俺に頷くと、再度表情を真剣な物に変えてウェルストンへ向き直った。

「ケントを馬鹿にした事、ケントに謝ってください！」

「そのようなみすばらしい男を庇うなんて、全く理解に苦しむよ。君こそ、私の高貴なる顔に傷を付けた事、地に額を付けて謝るのならば、特別に私の愛人として迎え入れても言い。九番目のね。」

フィニとしてはそれは真摯な願いだったのだろうが、ウェルストンはそれを一蹴してしまう。

ウェルストンも冷静なように見えて、フィニに平手を喰らった事を根に持っているのだろう。頑として譲らない態度である。

「ケント……」

フィニが一度だけ悔しそうな表情でこちらを見る。

しかし、もう俺もブチギレている……そう、ウェルストンはフィニを傷付けた。

フィニの手前、一応堪えてはいるが、俺も今にも飛び出してウェルストンに殴り掛りたい気分である。

だから、俺はフィニに一度だけ軽く頷いて見せた。「ちょっと痛めつけてやれ」みたいな意思を込めて。

正しくその意思が伝わったかは分からないが、フィニの表情はどこか安心したようなものに代わる。

フィニが再びウェルストンの方へ向き直った。

「私が勝ったら、ケントに謝ってください。」

「良いとも。私が勝った暁には、そうだな……私の膝元に傳いてもらおうかな。」

その言葉を最後に両者の間で空気が変わる。  
両者同時に口を開いた。

## 二十五章 “フィニVSウェルストン”

当然、同時に発言すれば早いのはフィニだと……そう思った。

「【精霊よ】【雷を求める天空の理】【目に見えぬ速さにて敵を撃ち碎け】」

ウェルストンの詠唱は速かった。

それは恐ろしいまでの速度で、フィニが 止まれ の ま を言い終わるか言い終わらないかの内に、そこまで言い切っていた。

なるほど、晚餐会場でのあれは理性を失っていたという事が……冷静ならこれほどの実力を発揮できると……

「止まれ！」

フィニの目前。

直撃するかしないかというギリギリのところで、フィニに向かって降り注いできた雷は止まった。

雷が空中で止まるという不思議な現象が起こっているが、両者それぞれに気を配る様子無し。

「一語法……だと!？」

何かウェルストンにとって驚くような事があったのだろうか？

「お返しします。 相手に向かえ」

フィニの言葉通り、ウェルストンの放った雷の魔術はそのまま方

向を変えてウェルストンに襲いかかる。

「クッ……」

ウェルストンは歯を噛み締めながらもサイドステップを用いてそれを回避。

「それなら……【妖精よ】【攪乱を求める幻惑の理】【我が分身を無数に配置せよ】」

途端、ウェルストンが二つに分離したかと思ったら、あつという間に数え切れないほどのウェルストンがフィニを取り囲んだ。

むむ……分身の術ってわけか。

「薙ぎ払え」

フィニが右手を振る。

それだけで、前方に位置していた目算300人ほどのウェルストンが吹き飛ばされる。

「む!？」

どうやら予想外だったようで、ウェルストンの表情に動揺が走った。

ただ、全部のウェルストンが急に同じ表情を作るのはちょっと滑稽だった。

「本物よ」



フィニが背後のウェルストンを指差しながら言う。  
それだけで、ウェルストンの分身は全て掻き消えた。

なるほど……分身の一角を吹き飛ばして動揺を誘い、その上で本物を見抜く時間を作る……か。  
策士だな、フィニ。

フィニの口物が若干笑ったように見えた……来るか？攻撃の言霊……

「なっ！？クッ……【精霊よ】！」

動揺しつつも新たな魔術を発動しようとするウェルストーンだが、流石に今度は圧倒的にフィニが早い。

「【発破を求め……】」

「倒れよ」

ズシャアと、脱力するような滑稽な音を立ててウェルストーンはその場に転んだ。

「なんだこんなもの！すぐに立ちあが……」

「動かないで！」

それは言霊ではなかったがウェルストンの動きはそこで止まる。  
ウェルストーンは当然言霊を知らないであろうが、それでも動けば自分がタダでは済まない事を察したのだろう。

「ほんの少しでも動いたらあなたは気絶します」

言霊ってほんと万能だな……

死ぬんじゃないかって気絶するだけってのがフィニらしいけど。

「何を馬鹿な……」

そんな事を言いながらもウェルストンは動かない。

きつと本能が告げているのだ。フィニの言っている事は冗談ではないと。

「降参していただけますね？」

「フフ……私も嘗められたものだ……」

しかし、そんな絶体絶命な状況にあつて、ウェルストンは不敵に笑う。

まだ諦めてなどいないとでも言うかの如く。

「私とて貴族としての矜持があるのだよ！【聖霊よ】【解放を求める呪術の理】【我が身に掛りし呪詛の類を取り除け】！」

ウェルストンの体から一瞬カツと光が進った。

その次の瞬間には、ウェルストンは全身の筋肉をフル稼働させてフィニから一気に距離を取っていた。

フィニの言霊を破った……だつて！？

「そん……な……」

今度はフィニが動揺する番だった。

「そんなに自分の魔術に自信があつたのかな？」

世界すら歪める言霊術師であるフィニだ。

自分の力に自信を持っていない筈がない。

例えそのせいで化物と蔑まれ、神に嫌われ、果ては世界を追放されたのだとしても、言霊はフィニが持つフィニだけの力だから、フィニが言霊に自信を持っているのは当然のことなのだ。

「そろそろ、決着としよう。【精霊よ】【崩落を求める破滅の理】」

ウェルストンがこれで決着をつけるとばかりに詠唱を始める。

ゴゴゴゴ……と、まるで大地が揺れているかのような威圧感がウェルストンから発せられる。

それほどに、これからウェルストンが発動しようとしている魔術が協力だという事が……

「私は……ケントを馬鹿にしたあなたを許さない！」

フィニはそれを見て、なお気丈にウェルストンを睨む。

その小さな体の、どこにそんな気力が詰まっているのだろうか……と、俺は自分の竦んでいる膝を睨みながら思った。

「好きにしまえ。これで勝つのは私だ。」

そうだな。

確かに勝負はウェルストンの勝ちだったよ。

そんな余計な事さえ言わずにさっさと詠唱を完成させていれば。

「【大地に宿りて敵を穿つ刃とな……」

後は【れ】って付け加えるだけだったのにね。

「 衝撃を 顎へ 」

なんてピンポイントな……なんて思う間もなく、ガキッ！とちよつと嫌な音がした。

ウェルストンは少しの間その場でガクガクと震えていたが、やがてその場に崩れ落ちて白目をむいた。

「あつ！」

そこでフィニは心底「しまった！」という様な声を出した。

「気絶しちゃったら、ケントに謝って貰えない……」

……そんなわけで、勝者フィニ。

「あの、ケント……ごめんなさい。」

「なんでフィニが謝るのさ。御苦労さま。良く頑張ったな。」

何も出来なかったから、代わりに俺はフィニの労を労うつもりで軽く頭を撫でた。

頬が赤くなっていたような気がするけど……まあ気のせいだろう。うん。

## 二十六章 “困惑のフィニ”

訓練場内は俄かにざわついていた。

当然のことだろう。サレファアの話が確かなら、フィニはこのルヴィス帝国内でも指折りの実力者を倒した事になるのだから。

まあそれを言えば、俺はこのルヴィス帝国内でのナンバー2であるところのシュレンを倒した事になっているわけだが……

そっちは騎士団の不名誉になるせいなのか、公には伝わっていない様子。

つてかまあ、そもそも俺はシュレンに勝ったわけではないのだから、そんな話は広まっていて欲しくないので助かる。

「ふむ。やりおる。流石は勇者の付き人と言ったところか。」

皇帝が何やら納得気味に呟いた。

「一語法を習得しているとは……」

「よもや、他国にはこのような使い手が幾人もいると言うのか？」

「そんな馬鹿な。一語法の使い手なぞ、帝国の歴史を振り返っても数えるほどおらぬというのに……」

他の貴族達の内緒話がちよつと聞こえた。

ウェルストンも言っていたが、ちよくちよく聞こえる『一語法』なるものがどうやらキーワードになっているようだ。

一語法ね……一つの言語の法則ってどこか？

頭の悪い俺には分からん。誰か教えてくれ。

「でも、どうやら化物扱いは避けられそうだな。良かった…」

実のところ、それが一番不安だったのだ。

「ケントは私を心配して？」

「そうだな。フィニみたいな可愛い子が化物扱いなんて不憫じゃないか。」

「可愛いって……私はそんな……／／／」

何やら俯いてしまったが、傷付いたわけではなさそうなので、まあ良いだろう。そんなことより……

「怪我してないか？実は魔術が掠ってたとか、そういうの、ない？」

「はい、大丈夫です。」

フィニは俺に向かって微笑みながらそう言った……可愛い。特に、若干頬が上気している所とか……ヤバイ位可愛かったりする。

って、そんなこと考えてる場合じゃない。

大丈夫だったなら大丈夫だったなりに、男として何か気の利いた事を言わないと。

「そっか。良かった。」

すみません。俺に語彙力という物は無いのです……

「フィニ殿とケント殿は交際されておられるのかな？」

「ふおお!？」

「ふえっ!?!?!」

二人揃って素っ頓狂な声を出してしまう。

そんな何もオブラートに包まない話し方をするこいつは、予想通りサレファードだ。

「な、何故そんな事を？」

フィニが明らかに動揺した様子で顔を真っ赤にしながらサレファードに詰め寄った。

まあ俺みたいな駄目人間と恋人同士かなんて聞かれちゃあね。

俺がフィニの立場だったら顔を真っ赤にするくらい激怒する所だよ。なのにフィニはそれでも聞き返すなんて……本当にフィニは優しいなあ。

あれ？何でだろ？涙が出てくるよ……

「いや、先程から二人の発す甘い空気が何とも言えなくてな。つい……」

空気の読める子供……

「こらこらバリアン公爵殿。無粋ですよ。」

そこに晩餐会城でウェルストンより先にフィニの手の甲にキスをした憎きネルグラン伯爵が現れた。

「む？ネルグラン伯爵……」

ギリツという感じでサレファアがネルグラン伯爵を睨む。

「そう睨まないでいただきたい。ワタクシはワタクシの友人の息子である君が私よりも高位の位に就いている事が妬ましいだけですから。」

うわー器の小さい人だー

「それで？無粋とは？」

「言葉の意味のままです。恋人達の睦言の囁き合いを邪魔するなど無粋だという事です。」

囁いてないし！

「恋人だなんて、そんな……／＼／」

フィニはフィニで両頬に手を当てて顔を背けてるし……

やっぱり手の甲にキスしたような奴と顔を合わせるのには恥ずかしいってわけか。

全く……やっぱり許せんな。

「そんな事ばかり言っておるから、その年になっても恋人の一人も出来んのだよ、ネルグラン伯爵。貴公も男であるのなら少しは自ら行動を起こしてはいかがかな？」

「フフ……所詮は世を知らぬ子供の戯言。ワタクシの心には響きませんよバリアン公爵。」

「冗談みたいなやり取りのせいで看過しがちだが、この二人、互いを親の敵みたいな表情で睨み合っている……あんたら仲悪いなー」



「そういえば、フィニ殿はどちらで一語法の習得を？後学の為に是非聞かせていただきたい。」

睨み合うのもそこそこに、ネルグラン伯爵がそうフィニに詰め寄った。

フィニは少し怖がっている様子で、たたらを踏みながら少しだけ後ずさる。

「それはば……私も聞きたかった事だ。フィニ殿、どうか私に教えていただけないだろうか？」

そして、少し遅れてサレファーもフィニに詰め寄る。  
二人の顔がフィニの前に並ぶ……あんたら仲良いな！

「あの……その……」

フィニが困ったように口を嚙む。  
考えてみれば当然だ。フィニのは魔術じゃないんだから、恐らくは魔術関連の言葉だと思われる『一語法』について聞かれたって答えられるはずがない。

しかし、何かしらの答えが返ってくると、サレファーもネルグラン伯爵も期待しているようで、ずいずいと少しずつフィニに顔を近づけている。

分かってる？そのままキスしたりしたら殺すからね？君達。

「えっと……」

どうやら皇帝を始め、他の貴族達も気になっている内容の様で、皆してフィニの言葉に聞き耳を立てているようだ。会場内が異様なまでに静かな事から、そんな事は簡単に窺える。

さて、フィニはこの空気の中何を答えるのか……

「一語法って……何ですか？」

ですよーそうですねー

会場の中にいる人が皆してずっと聞いていた。そりゃもう滑稽なくらいに。

## 二十七章 “魔術”

元来、魔術の発動には長い詠唱を必要とし、実戦においてはそれほど役に立つものではなかった。

剣と剣がぶつかりあい、刻一刻と状況の変わる戦場で、詠唱に時間のかかる魔術など隙を作るだけの物でしかなかった。

だから、当時の魔術は多対多の戦場で前衛が戦いながら、後方の魔術師がそれを支援するというのが一般的な戦術だったのだ。

その状況を変えたのが、ある高名な魔術師の開発した、現在の魔術の常識とされている三段法である。

【何に力を求めるか】 【どのような力を求めるか】 【力をどのように扱うか】 と魔術の詠唱を三段に分けて簡略化し、詠唱の加速と威力の安定を図った物だ。

長い詠唱を唱えれば確かにイメージも強固なものとなり、魔術の威力も高まるが、その分隙が大きく、少しでも詠唱を間違えれば途端に威力が落ちてしまう。

しかし三段法であれば、まず詠唱が安定する為に間違えることが少なくなるので威力が安定する。

さらに、魔術の準備から発動までが短くなる為、白兵戦において魔術の実戦登用が可能となったのである。

この時、力を求める対象によって魔術の種類が変わる。

例えば、敵を打ち倒す力を求める相手は精霊。

水や炎、果ては大地から天空まで、自然界のあらゆる物に宿る精霊の力を借りて放つのが『精霊魔術』、通称『精霊術』と呼ばれる魔術である。

敵を惑わす搦め手を求める相手は妖精。

人の精神に干渉する悪戯好きな妖精の力を借りて放つのが『妖精魔術』、通称『妖術』と呼ばれる魔術である。

他にも『聖術』『神術』『呪術』など、求める相手は多岐に渡り、魔術の全てはいまだ解明されていない。

そして一語法とは、三段法が発明されるのと同時期に、別の無名だった魔術師が発明した詠唱法の一つである。

目的は三段法と同じ、白兵戦高速戦闘内における魔術の実戦登用。

三段法が詠唱を三段に分ける簡略方式であることに対し、一語法とは魔術の詠唱の外殻を体内だけで組み上げ、後は口で一言発すだけで魔術を発動させるという代物である。

当然、三段法を遥かに超える速度で魔術を発動できるが、複雑な魔術の詠唱の骨子を体内で組み上げるなど並大抵のことではなく、長い詠唱を行うよりも魔術の威力が安定しない為、一般には受け入れられなかった。

故に、ほとんど伝説上の物として、三段法の陰に隠れ、忘れられていったのだった。

歴史を振り返ってみても、この一語法の使い手は片手で数えられる程度にしか登場していない。

『鳳印』の中には勇者が魔術師である話もあるが、その勇者とて一語法を使っている表現はなされていないのだ。それほどの代物なのである。

「なるほど……一言で世界だって揺るがすフィニの言霊は、

「この世界では一語法として認識されるわけか……」

誰にも聞こえないようにこっそりと呟いた。

それにしても良かったと思う。

これなら、フィニは天才と扱われはすれども、化物なんて呼ばれたりはしないだろう。

と、ここまでの説明はサレファアによるものである。

説明お疲れさん。

「魔術の常識を教えられぬままに教育を受けたという事かな？なるほど、三段法という先入観がなければ、一語法が当然の物だという事も納得がいく……」

魔術について何も知らない俺達を見て、サレファアはそんな風に解釈した。

「となれば、フィニ殿の師匠はかなりの実力者……よほど有名な方に違いない！」

ただ周りの空気がこんな感じに流れて行くのは、ちょっと好ましくないかな……

「フィニ殿の出身を是非とも教えていただきたい！そして願わくば、フィニ殿の師匠殿にお目通りを！」

「あの……それは……」

ネルグラン伯爵がフィニの手を握りながらそんな事を言いだした。

それにフィニーが困った顔をするもんだからさあ大変。

「それならば是非とも私めにも！」

なんて言いだす貴族たちがこぞってフィニに詰め寄るのだ。

「うう……それは……」

泣き出しそうになるフィー。

これは……

「テメエら黙れええええええ！！！」

俺は堪えられず、叫んだ。

途端、静まり返る訓練場内。

全ての視線が俺に向いている。

ここで何を言えばフィニに向いている、もはや敵意にすら近い好奇心を散らす事が出来るのか……

俺は考えに考えて、そして結論を出した。

「フィニの師匠は俺だ。俺がフィニに教えた。カレイプスだ  
って一撃で倒す俺がな！」

二十八章 “ ケントのハツタリ ”

何とも言えない空気になった。いつそのこと音が死んだと表現しても良い。

それくらい、一斉に喧騒が収まったのだから。

そりやもう、皆して啞然だった。

予想外、想定外、奇想天外……まあ概ねそんな感情を縋い交ぜにしたような表情で皆して固まっていた。

俺を除けば唯一固まっているのは当然フィニ。

その表情は「ありがとうケント」と言っているようでもあって、それが救いだ。

[illegible]

時間が唐突に動き出したかのように、皆さん紳士淑女らしからぬ驚愕の声を出した。

ええ、ええ、そうですよ。

どうせ俺みたいな駄目人間がこんなこと言いだしたって、お前馬鹿じゃねえの？ 的な空気が生まれる事くらいわかってましたとも。

「だ、だが、よくよく考えてみれば、彼は南の村でカレイプスから村を守つたと聞く。」

「なるほど。一語法の使い手、それも人に教授することが出来るほどの手だれの者ならば……」

「カレイプスを一撃というのも領けない話ではない、ということか。」

お？どうやら良い感じに興味が俺の方へ向いたみたいですよ。

「……」

なんで皆してまた静かになるのかなーなんて思ってみたりして。

「ケント殿、その話は真か！？」

サレファアが明らかに落ち着きを失くした様子で、俺に抱き付か  
んばかりの勢いで詰め寄って来た。

「あ、ああ。」

皆の食い付き方が予想外過ぎて、ここで「いや、嘘です」とか言  
ったらどうなるかなー、なんてちよっと考えて、言ってみたくもな  
ったけど、流石にそれはどうかと思うのでやめた。

「弟子にしてくださいー！」

おおー……マジか！？

………うん？

うん、なんかシュレンも混じってる……

ちなみに皇帝は呆れたような表情で頭を下げる貴族達を見ていた。

「（フィニ……どうしようっ）」

「（ア、アハハ……）」



流石の俺も困り果てて助けを求めるようにフィニを見たら、フィニはフィニでとても困った顔をして苦笑いしていた。

クッ……駄目だ、ここでフィニを頼ってちゃんにもならない。

「そうだよな。皆魔術の腕、上達したいもんな。」

「おお！では！」

こうなったら、口先だけの駄目人間らしく、口先だけで乗り切ってやる。

「だが、断る。」

「ごめん……俺は口先もない駄目人間なんだ……」

「な、なぜ!？」

一番最初に顔を上げて納得いかない表情で詰め寄って来たのは、予想外な事にネルグラン伯爵だった。

よし、ここは頑固職人っぽく行こう。

雰囲気あると思うし。

「一語法の真髄を伝える相手は生涯に一人と決めている。そしてその一人は、今ここにいるから。」

落ち着いた冷静さで着飾って、俺はフィニを掌で示しながら穏やかにそう告げた。

それで、貴族たちはこぞって口を噤む。

男性陣は悔しそうに頂垂れ、女性陣はうつとりしたようにやや頬を赤く染めながら溜息を漏らした。

あれ？なんかイメージした反応と違う。

俺はもつところ……ドラマの頑固オヤジっぽく『弟子はとらあん！』みたいな気持で言っただけ……

と、思っていたら俺の服の裾が後ろからついつと抓まれた。

うん？と思って振り向けば、それはフィニの仕業だった。

何故だか顔が真っ赤だ。風邪か？

「ケント……その言い方はずるいです……／＼／」

そしてさらに赤くなるフィニ。

おかしいなあ……フィニは俺がフィニを庇ってこう言った事を分かっていると思うから、俺の言う事なんて全部戯言だって分かっているはずなんだけど……

何に反応したんだろ？全然分からない……

「クツ……付け入る隙は無さそうですね。」

ネルグラン伯爵が悔しそうに唇を引き結んでいた。

そんなに一語法を教えて貰えないのが悔しいのだろうか？

「なるほど。恋仲とは僕も失礼な事を言いました。」

あ、『私』って言い直すの忘れてる。

サレフアーも表面上は取り繕いながらも動揺してるなー  
やっぱ子供だな。

とか、そんな事を考えていたせいで、その後にサレファアが付け加えた一言は聞きそびれた。

「夫婦でしたか。」

なんかサレファアが言ったけど、まあそんな重要じゃないだろ。こんな空気の中で言った事だし。

どうでも良いけどさ、いい加減あつちで完全に伸びてるウェルストンを誰か介抱してやれよ。

あれだけ憎たらしいと思ってたけど、ずっと放置されてたし、なんだか可哀想になって来た。

「なあ、フィニ？」

「は！はい！？なんですか！？」

なんかバネみたいに凄い勢いでフィニは俺の言葉に反応した。相変わらず顔が赤い。

照れ屋さんめー、って額をコツンってやりたいなー

「なんでそんなに挙動不審なの？」

「な、なんでもありません！それで、何ですか？」

何でも無いらしいので、俺は気にせず先に進める事にした。

「ああ、いや。ウェルストンもそろそろ起こしてあげても良いんじゃないかな、って思ってたさ。ずっと放置されてるし、なんだか可哀想になって来ちゃって……」

「ケントが良ければ……」

「うん。さっきのでスッキリしたし、もう気にしてないよ。」

「そうですか？では……」

まあ始めからそんなに気にしてはないけどね。

「目覚めよ」

その一言と同時にウェルストンが「う、うん……」って感じで起き上がり、周りからオオ〜とどよめき上がる。

「クス……」

「なあフィニ。」

「何ですか？」

「もしかして、今かなり機嫌が良い？」

「そそそ、そんなことな、ないですよ!？」

かなり機嫌が良かった。

元の世界で化物呼ばわりされてたフィニだ。

それこそ言霊を使つたびに人々から軽蔑の表情で出迎えられることだつてあつただろう。

それがこの場において、皆から純粋な興味と驚愕をもって迎えられている。

目立つのは苦手そうだが、悪い気分ではないのだろう。

「あ!この小娘っ!」

ウェルストンが周りの状況を察せず、フィニの姿を認めると途端

立ち上がって襲い掛って来ようとし、

「馬鹿者があー!!」

初老の男性に一喝された。

「ランス侯爵殿!?へ?あれ?」

しかも周りの貴族全員に睨まれている状況を察したのかウェルストンは驚きの周り言葉に詰まる。

「こちらにおわす御方をどなたと心得る!」

先の副将軍、水戸光k……いや、何でも無い。

「どなたも何も、ただの異国の小娘では……?」

「馬鹿者お!!」

「ヒツ!?……?」

哀れウェルストン。

状況が察せず、何故自分が怒られているのかも分かっていませんでした、とき。

## 二十八章 “ケントのハッター”（後書き）

初の一日に三章アップ。

今日は良くネタが出て来たので頑張ってみました。

この先もこんなペースで投稿できたらいいのですが、また試験も始まりますし、暫く更新できないかも…… ^^ ;

できるだけ頑張ります！

## 二十九章 “言霊についての疑問”

なんだかんだで時間もかなり遅くなっていたので、結局あの場は解散となった。

晩餐会でのあの事は、決闘に負けたウエルストーンが全て悪いという事になったが、周りから見てももう充分に罰を受けたらうという事でお咎めは無しになった。

まあフィニの言霊をその身に受けて、さらに罰を喰らったんじゃないかなんでも可哀想だもんな。

……あれ？なんだか、フィニの言霊を喰らって、さらに騎士昇華訓練なんて罰を喰らった誰かがいたような気がするけど……まあいいか。

とりあえず、俺はこの現状をどう打開するか、それを全力で考えないといけない。

何が起こっているのかと言うと……

「ケント……」

ドキドキが止まらねえー！！っと、取り乱した……

つまりだ、俺とフィニは皇帝によって王宮にある客人様の部屋を宛がわれ、そこで休むことになったのだが、如何せん俺とフィニが同室だった。

なんで、部屋は有り余っているだろうに、わざわざ人間を二人、それも男女を同じ部屋に押し込めるのだろうか……

これは陰謀の香りがする。それもかなり俺にとって好都合な。

「あの……どうしましょう？」

さらに、部屋の中にある寝具はやや大きいが、しかしシングルの域を出ないベッドが一つあるだけなのだ。

この状況下で余計な事を考えない奴は男じゃない。いや、人間じゃない。

だがしかし、俺は駄目人間ではあるが紳士である。

まさか夜の闇の中で婦女子を襲うなどと、とてもではないが看過出来るものじゃない。

それもフィニのような可愛い女の子だなんて、例え明日死ぬとしても俺は傷つけない。

それでも『俺の倫理観と理性VS俺の本能とフィニの可愛さ』という構図の中で、前者の勝率がいかほど残っていると言うのか。それは例えるなら『銃器を持った成人男性（戦闘力5のゴミ）VSとある惑星の某戦闘民族（地球を何度も救った英雄の兄）』くらいの差があると言えるよう。

つまり、瞬殺の、それも返り討ちだ。

「ただ、大丈夫。フィニはベッドで寝て良いよ。俺は廊下……いやトイレで寝るから。」

「そこまでしなくても!？」

思わずと言った様子でフィニが驚いた声を出した。どうやら俺の冗談を真に受けたらしい。

「そ、それならケントこそベッドで寝てください。私がトイレで寝ますから!」

「フィニをそんな所で寝かせられるはずがないじゃないか。」



トイレは俺にこそ相応しい寢床だ。」

変な奪い合いが始まった。

「いえいえ、私がトイレで寝ます。トイレで寝る女だと元の世界では有名でしたよ。」

それで良いのかフィニフィアン・シュルツ……

「何を？THEトイレで寝る男とは俺の事だとも。」

っていうか、アレだよな。

夜遅くまで起きてると変なテンションになるよね。

今日は実際にいろいろあつて、疲れ過ぎて寝れないせいか俺もフィニもテンションがおかしなことになっていた。

「プツ、クスクス。」

「ハハ、アハハハハハ。」

暫く俺とフィニは不毛な言い合いを続け、やがてどちらからともなく笑い出した。

「なんだ、フィニってそういう愉快なところもあったのか。」

「私、こういう冗談の言い合いって本当は好きなんですよ。」

この世界に来て、いろいろあつて緊張してて、そんな余裕もありませんでしたから。」

それは良い。また今度フィニにネタを振ってみるとしよう。

フィニとなら楽しいやり取りが出来る筈だ。

「まあ、真面目な話、ベッドではフィニが寝てくれ。女の子がベッドじゃない場所で寝るなんて、俺の精神衛生上良くない。」

「そうですね……では、お言葉に甘えて。」

そう言うとフィニはベッドに腰掛けた。

「そう言えば格好……」

「そうですね。このままでは寝苦しいですね。清めよ。」

なんだか暖かい光が俺とフィニの体を包んだ。

その光が収まると、なんだか風呂上がりでも感じないような清潔感が俺を呑みこんでいた。

服もまるで新品の様にピカピカで、ノリが付いてパリッとしていた。

「後は……睡眠に相応しい格好に。」

再び俺とフィニを光が包む。

気付けば俺の格好は上下紺色のスウェット。

フィニは薄手のブラウスらしき服と、それと同じ生地のパンツというラフな格好になっていた。

「へえ、やっぱり便利だな。荷物いらすだし。」

「ア、アハハ。」

照れくさそうにフィニは髪を掻いた。

「でもさ、ちょっと不思議に思ってたんだけどさ。」  
「何ですか？」

折角だから、一つ疑問に思ってた事を聞いてみる。

「俺の服ってさ、やっぱり俺の世界独特の物なわけだし、フイニも俺の服の事なんてこれっぽっちも知らなかったわけだろ？」

「はい。そうですね。」

「言霊で服を出すって言うてもさ、俺の世界の服がこうして出てくるのはおかしくないか？」

「ああ、その事ですか。簡単な事です。私が言霊で『服』という単語を言った瞬間にケントは元の世界で来ていた服を想像しますよね？」

確かに、俺はあの草原で服を着たいと思った時、真っ先に元の世界で来ていた服をイメージした。

「言霊は、そのケントの想像した服の材質や形状などを、こちらの世界にある物を使って再現したのです。だから、厳密に言えば、その服はケントの世界の物ではなく、あくまで良く似た物ということですね。」

ふーん。何となく分かった。

「じゃあさ、例えば『ダウンジャケット』みたいに情報を付け加えれば、言霊で何でも取り出せるってわけか。」

「ええ。ただ、私が知らない物である場合は、ケントが脳内に正確に思い描ける物に限りますが。」

だから俺が正確にイメージした服は取り出せたってわけだ。

「じゃあ、武器はどうだ？」

ここでもう一つ考えてた事をフィニに訊いてみる。

このまま駄目人間としてフィニに頼りつきりになるのは、いくらなんでも駄目すぎる。

いざという時には俺だって身を守るくらいの手段は欲しい物だ。さらに望むなら、俺がフィニを守りたいしな。

だから、俺の戦う手段として武器が作り出せるのなら、それがそのまま俺の戦う手段になる。

「武器、ですか？」

「そ。武器。」

「どうでしょう？私は武器に触れた事が無いので、刀剣や銃器の類は……ケントには武器についての素養が？」

あるわけがない。

現代日本人である俺に武器の素養があつたら大問題だ。

「形だけは作り出せても、その用途を達成できる物は作れないのではないかと。」

じゃあ駄目だな。

「そつか。分かったよ。」

「すいません。言霊は今ここある物をどうにかするには向きますが、新たに何かを作り出すには向かないんです。」

心底申し訳なさそうにフィニは言う。

そんなフィニを見て、俺は心苦しくて……

「なんでフィニが謝るんだよ。フィニは全然悪くないって。」  
と、そう慰めた。

「ありがとう、ケント。」

俺の言葉を受けて、フィニはそうニッコリ微笑んだ……まずい、  
凄く可愛い。

「さ、さあ、寝ようぜ。俺、あっちのソファで寝とくからさ。」

「はい、おやすみなさい。」

思わずフィニの笑顔に見蕩れた俺は、頭をぶんぶん振ってから、  
フィニに「おやすみ」を告げてソファの方に横になった。

疲れていたのか、すぐに睡魔は襲ってきて、あっという間に俺は  
眠りに落ちた。

思案 “ ケントについて ” (前書き)

フィニ視点  
短めです。

## 思案 “ ケントについて ”

駄目人間…… ケントはよく自分の事をそう言う。

まるで、それが当然、自分はそうあるべきだという戒めであるかのように、ケントは何度も何度も言うのだ。

特に大きい声というわけじゃない。誰かに聞かせようというわけでもない。ただ、ケントが何かをするたびに、小さく、自分を律するように駄目人間だと口にする。

一体ケントは元の世界でどれほどの迫害に合ったのだろう……  
自分が駄目人間だと、そう妄信的なまでに断言するケントは、元の世界で一体どれほどの重圧の中を生きて来たのか……  
私には分らない。

ケントは駄目人間なんかじゃないと私は思う。

ケントは優しい、凄く……優しい。

ケントが行動する時、ケントは我が身を顧みていない。

例えば、村がカレイプスに襲われた時、ケントはカレイプスに踏み潰されそうになった女の子を見を呈して守ろうとした。

あのときのケントからは、その後助かる術を考えてあったとか、何かしらの打診があったとか、そんな雰囲気は一切感じ取れなかった。それはつまり、ケントは何の見返りも求めずに、何の関係もない赤の他人の為にだって咄嗟に命を掛ける事が出来るほどに優しい。

そんな優しい人が、自分の事を駄目人間だと言い続けるなんて……  
私にはとてもケントの心理的な重圧を推し量ることができない。

私にベッドを譲り、ソファの方で横になるケントを見ながら、私はそんな事を考えていた。

「…… ケントの疲労を取り除け」

既に静かに鼾をかき始めたケントを指差しながら、私は静かに呟く。

ケントは頬を少し緩めながら寝返りをうった……あ、ソファから落ちちゃった。

「うべっ」と呻き声を洩らしながらも、ケントはそのまま眠り続ける。

私はそれを見て、少し微笑んでから続きを考える。

私が元の世界で聞いた“声”は「別の世界で人生をやり直さないか」と訊いた。

ケントだって同様だったはず。ケントも、私と一緒に人生をやり直したかったんだ。

私は、この世界で、新しい自分を探していけると思う。

言霊を使って、そのたびに恐れられる自分じゃなくて、そのたびに人が喜んでくれる道を探していける自分。

私はやり直したい。

ケントはずっと引き摺っている。

元の世界の自分を引き摺って「どうせ自分は駄目人間だから」と諦める……それを悪い事だとは思わない。弱い事だとも……思わない。そんな風に考えてしまつくらい、元の世界はケントにとってどうしようもなかったんだ。



でも、私はケントに新しい自分を見つけて欲しい。

自分を駄目人間だと蔑んで、それでケントにもある良い所を自分で見つけられないなんて、そんなのは悲し過ぎる。

私はケントの良い所を知っているから、ケントにも自分で自分の良い所を知って欲しい。

それは、難しい事じゃない筈。

「ケントは、強いですよね。」

自分の事を駄目人間だと思い込んでしまつくらいの重圧が常に掛け続けられるなんて、私には絶対に耐えられない。それなら、自身の行動の責任で化物と呼ばれる方がまだマシ。

私が化物だつて呼ばれるのは、私の行動の結果だから、私はそれを享受しなきゃいけない。

でも、ケントはなにも悪くないのに、それで駄目人間だなんて、そんなの酷い。

私にはない強さ。

ケントは……

「ケントをベッドへ」

私はベッドの上で少し左にずれながら、言霊でそう告げた。

ケントの体が、スウと浮いて、そして少しでも大きいベッドの、私の隣にすっぽりと収まる。

「ケント、おやすみなさい。」

「グウ……」

寢息で返事が返って来て、それに私は微笑むと、自分も目を閉じて、やがて眠りの世界に落ちた。

### 三十一章 “朝目覚めて”

「う……ん」

なんか……凄い良い匂いがする。

と、朝の陽気を肌を感じ始め、眠りが若干冷め始めた俺は、朦朧とした思考の中でそう思った。

人並みの大きさの、柔らかくて、暖かくて、それで良い匂いな何かを俺は抱き締めていた。

あゝなんかもうこのまま死んでも良いくらいに気持ち良い……

そんな風に思っ、再びまどろみかけた頃……

「！？」

本当にこのまま死んじゃうような気がして、思い切り目を開いた。

「……」

「……」

「……」

「……あの、ケント何か言ってくれないと私も不安に……」

フィニだった。

人並みの大きさの、柔らかくて、暖かくて、良い匂いの何かは……フィニだった。

「……へ」

$$\begin{matrix} \neg \\ \wedge \\ ? \\ \perp \end{matrix}$$

思い切り息を吸って……

「えええええ——————！！」

「……？？」

「お、驚き過ぎでは？」

何故！？どうして！？ why！？

俺ってソファで寝たよね！？

なのに何で！？

まさか……駄目人間である俺は頭の中も駄目人間で、まさかの欲求不満が爆発し、無意識にフィニのベッドに潜り込み、そしてチヨメチヨメがチヨメチヨメで……駄目だ意味が分からない。

「あの……ケント？」

フィニの声も俺の頭に入ってこない。

「駄目だ……駄目人間過ぎる。紳士で真摯である事が、俺みたいな駄目人間の唯一の矜持だったはずなのに……なのに、紳士ですら無かったなんて……」

「あ、あの……ケント。」

まさか夜中に無意識に起き出して女の子のベッドに潜り込むなんて、これはもう駄目人間なんてレベルじゃない。人として終わって、もう俺を駄目人間と呼ぶなんて、全国の駄目人間様に失礼な話だ。

「これはもう死んだ方が良い。死ぬべきだ！死ななきゃ駄目だ！！」

死んで良い人間なんていないけど、死ぬべき人間はいる……そう、俺だ。

「ケント、あの、落ち着いてください。」

「俺みたいな駄目人間は死んだ方が良いですか！？むしろ死んで良いですか！？」

「ケント、落ち着い……」

「いつそ殺せえええええ！！！！！」

「**落ち着け**」

落ちて着いた。

落ちていたのにオチ付かず、なんちゃって……座布団没収。

「落ち着きましたか？」

「うん。落ち着いた。落ち着いた結果、俺は生きるに値しない駄目人間だと判明しました。なので、俺は今すぐあの窓から飛び降りて、死んで償おうと思います。では！」

そうフィニに告げ、俺は青い空の見える窓に向かって昂然と猛ダツシュを……

「待ってケント！」

フィニに後ろから抱き止められた。

フィニみたいな可愛い子にそんな事をされては、止まらざるを得

ない。

「ケントが寝返りを打った時にソファから落ちまして、それで寝苦しそうだったので私がベッドまで運んだんです。ケントが悪い事なんて何もありません！だから、早まらないで……」

危うく自殺しかけた俺を宥める様にフィニはそう告げた。

「な、なんて優しいんだ……そんな優しさを俺に掛けてくれたって言うのに、俺は変な事を勘違いして……もう俺は生きている事が恥ずかしい！死んで償うよ……！」

「待って！」

二度目は冗談だったんだけど、フィニは真剣な表情で俺を止める為、俺の腰に回している腕に力を込める。

そのせいで、その……フィニの豊富な胸とか、あのその……俺みたいな駄目人間には刺激が強いと言いますか……そのあのえーと……

「ケント、そんな、自分を責めないでください……」

「ハハ……冗談だよ。もう死のうとしたりしないって。だからさ、もう離しても大丈夫だよ。」

むしろこのままじゃ、心臓が破裂して死んでしまう。

「本当ですか？」

上目遣い……めっちゃ可愛い。

こんな顔されたら、死ねるわけがない。

「本当だって。ごめんよ。」

「はい。」

そう言う途端にフィニは笑顔になって俺を止めていた腕を離れた。

当然、俺の背中に触れていた柔らかな二つの膨らみも離れる。

それが少し残念で名残惜しいけど、まあもう一回抱きついてとは言えないし、仕方ないから諦める。

「なんか……腹減ったなあ。」

「そうですか？」

とりあえず色々誤魔化そうと思って「そうですね。朝食は何でしょう？」みたいな返事を期待して振った話だったけど、そんなフィニの返事で俺はある重要事項に思い至り、両手を地について落ち込んだ。

そうだった……この世界やフィニの世界じゃあ朝食を摂る習慣は無いんだった……ああ、腹減った。

「ケント、ランクルートの街を見て回りませんか？もしかしたら、軽食を摂れる店があるかも知れませんし。」

フィニが気を使ってそんな事を言ってくれる。

「そうだな。ちょっと朝の散歩と洒落込もうか。」

そんな気遣いが嬉しくて、俺は二つ返事で了承した。

ただ一つだけある問題は……

俺達、この世界の金持って無いんだけどね……

### 三十一章 “朝目覚めて”（後書き）

お気に入り登録件数が百件を突破しました！

皆さん読んで下さって、本当にありがとうございます！

これからもよろしく願います！



### 三十一章 “デートか！？これはデートなのか！？”

俺とフィニは身支度を整えて、番兵さんに挨拶をしながらランクルート城を出た。

中途ですれ違ったサレファアは俺達に付いて行きたがっていたが、それはネルグラン伯爵に諫められていた。  
何やらいきなり口喧嘩が始まったが、そちらは無視する方向で。

「賑やかですね。」

「そうだね。」

フィニと並んでランクルートの街を歩いていた。

周りでは八百屋らしき店の店長さんが威勢の良い声を張り上げて客引きをしていたり、玩具屋らしき店の前で子供たちが集まっていたり、小道の奥にちよつと怪しい感じの大人な夜のお店があったりと活気に満ち溢れている。

「さて、こちらが確か貴族街だそうですね。」

「そんなこと言ってたな。」

ランクルート城から続いていた道の途中の坂道になっているＴ字路を見上げる。

その先には、ここから見るだけでも分かるくらい華やかに装飾された豪華な建物の数々が見える。

「どうする？ちよいと探検してみる？」

「え？そうですね……ケントが……その……行きたいのであ

れば。」

顔を赤らめてもじもじとした仕草でそんな事を言うフィニ。思わずして俺の心臓は口から飛び出した……様な気がした。

はっ！？

ちよつと待てよ……冷静に考えよう。

得意の状況整理だ。

俺：駄目人間……問題ない

フィニ：可愛い……問題ない

状況：二人つきりで街を歩いている……デート？

これはやばい！

どうやばいのか俺には欠片も分からないけど、なんかやばい！

「それで、あの……どうしますか？」

どうしようね。

正直貴族街なんて見ても良いとこないと思うんだけどね。

でもまあ、中世ヨーロッパ的街並（中世ヨーロッパ的街並を俺は知らないのだが）に見える優雅に立ち並ぶ建物は、確かに平民と貴族とを分ける絶対的境界線にも見えて、一度くらいは見ておきたい衝動にもかられる。

「そんじゃ、一回行ってみよっか？」

「はい。」

フィニはニコツと微笑んで見せた。

グハッ、俺の心臓に45のダメージ。ちなみに最大HPは50……  
もう死ぬ寸前です。でもたすけなくて良いよ。

そんなわけで、俺とフィニは二人並んで貴族街の方へ足を向けた。

シュレンの話によると、ここランクルートは皇帝が治める街という事で特別貴族が幅を利かせているという事は無い、とのことだった。

そもそも貴族とは、領地を持ち、そこを治める領主の事を言う。単なる金持ちを貴族とは言わないのだ。

無論、現在ランクルートにいる貴族達も自分達の領地を持っている。それがなぜこのランクルートに集まっているのかと言えば、今回の晩餐会出席の為という納得の答えが返って来た。

兎も角、その領地内でこそ権力を発揮できる貴族だが、皇帝の治める土地の中で自分勝手などいかな貴族といえども出来るわけがない。と、というのがシュレンの談だった。

「……………」

俺とフィニは無言で立ち尽くすしかない。

なんせ、貴族街に足を踏み入れた途端、鎧甲冑（シュレン達の鎧とは違う）を着込んだ兵士に囲まれて槍を向けられたからだ。

「ここは貴族街である。貴様ら下々の者に足を踏み入れる権利など無い。」

シュレンの嘘つき！

ビックリするくらい貴族と平民の格差あるやん！？

「おい！聞いているのか！？」

いつまでも黙っている俺とフィニを見て、痺れを切らした兵士の一人が槍の先を牽制するように俺に近づけた。

「うわっ！？」

「ケント！？」

兵士の方に攻撃の意思など微塵もなかったであろうが、武術の心得など皆無の俺には近づいてくる槍の先が俺を刺し貫こうとしているようにしか見えなかった。

結果、思わず後ずさりして躓いて、無様にすっ転んで尻餅を突いてしまう。

「何だ貴様、この程度で尻込みか？ハッ、これはとんだ臆病者だ。なあ？皆？」

一人の兵士がそんな俺を見て小馬鹿にして嘲笑う。周りの兵士達もつられて晒い出す。

さて、俺はその程度全然構わないが、しかし俺が嘲笑的にされると怒ってしまう人が俺の隣に。そう、フィニだ。

「ケントを馬鹿にしましたね。許しません！」  
「な、何だ貴様！」

ドツと怒気を剥き出しにしてフィニは兵士を睨む。  
それに気付いた兵士がややたじろぎながらも、こちらも語気を強めてフィニを威圧せんと言葉をぶつける。

「ケントは臆病者なんかじゃないんです！何も知らないのに！ケントに謝ってください！」

あれー……なんだかデジャヴを感じるよ……

「そんな虫けらにも劣るような男を庇うのか？ハッハッハ！こいつお傑作だ。虫は虫らしく醜い地の底から光だけ羨ましがっていれば良いんだよ。」

まああんまりな言い方ではあると思うけど、それくらいじゃ俺の心には響かない。  
虫けらなんて言われ慣れてるぜ。

それよりも……

「うう……」

今にもブチギレて言霊をぶっ放しそうなフィニにこそ注意しないとな……

「スウ……」

とか考えていたそばから、フィニは言霊を使うべく息を吸い込み

始めた。

兵士たちはそれを怪訝な表情で見守っている。

やばっ  
……

「 衝撃を あぐムグッ!？」

「 はい、すみませんでした!すぐに去ります!！」

咄嗟に俺は左手でフィニの口を塞ぐと、右手でフィニの体を抱きかかえ、兵士たちが何かを言おうとするのも聞かず、回れ右して一目散に駆け出した。

中途、何やら柔らかな感触が俺の掌から伝わって来たけど、必死だった俺にはそれを楽しむ余裕は無かった。

「 騒ぎを起こしちゃ駄目ー!！」

冷静沈着で頭脳明晰な俺<sup>クール</sup>だけど、この時ばかりは流石にちょっと声を荒げた。

え?冷静沈着で頭脳明晰<sup>クール</sup>ってどの口が言うのかって?良いんだよ。日本には発言の自由という物が……とか、考えてるから俺は駄目人間なのかな。

「 すいません。 つい、頭に血が上ってしまっ……」

正直に言えば、ってか正直に言うまでもなく、フィニが俺の為に怒ってくれる事は嬉しい。文句無く嬉しい。嬉しいの最上級。嬉しえすと。

でも、あそこで貴族街の入り口守ってる番兵さんをぶちのめしちゃったら、流石にこのランクルートにはいらなくなるだろう。

まあ、既に一人貴族をぶちのめしてるわけだけど、まああれは合意の上での決闘だしノーカンね。

「分かってくれたらいいんだ。それにさ、俺は罵倒される事なんて慣れてるしさ、いちいち俺の為に怒ってくれなくても良いんだぜ？そんなことしてたらフィニ、疲れちゃうだろ？」

俺が罵倒されてフィニが傷付くなんて、そんなことあっちゃいけない。

「そんなことはありません！」

しかしフィニは、きっぱりと俺の言葉を否定した。

「そつか。優しいなフィニは。」

「そんな……私なんて全然……ケントの方が……凄く優しいじゃないですか……」

最後の方はボソボソとした小声だったので聞き取れなかった。

「ん？なんて言った？」

「な、なんでもありません！」

と、そう言つてフィニはそっぽを向いてしまつた。  
心なしか頬が赤い。

あー分かった。

分かる分かる。

人に聞かれると恥ずかしい独り言を言っちゃう事ってあるよねー  
特に、愛と勇気すら友達になってくれない俺にとっては話相手が空  
気ってこともままあったし、そういう時って人に聞かれたくないよ  
ね。

ってことはだ、これ以上の詮索はすべきじゃないってことだな。

「ま、良いや。貴族街は駄目っぽいきどき。もう少しランク  
ルト見学しようぜ。」

そう軽くフィニに話しかける。

「はい。」

フィニは笑顔で頷いた。



三十一章 “デートか！？これはデートなのか！？”（後書き）

すみません更新が滞っております^^；

大学の春休みは無駄に長いのに、なぜこつも忙しいのか……

補講補講補講……いずれ歩行も入る勢いです（え

でも頑張ります！

こんな作者ですが、皆さん応援よろしくお願いします。

応援のメッセージなど送っていただけると、なんと更新のペースが三倍になる！……と良いなと思います。

## 三十二章 “街の中に……肉！？”

腹減った。

どうしよう、空腹を通り越して目眩がしてくるくらい腹が減って来たよ。

よく考えたら、こちらの世界に来てまともな食事なんてほとんどしてない。

鹿鍋は美味しかったけど、量としてはやっぱり不満が残るし、いきなりの騒ぎのせいで晩餐会ではるくに食べれていない。

昨日寝る前に空腹を感じなかったのは奇跡だ。

「お腹が空いたよ。」

「そうですね。私も軽く何かを食いたい気分です。」

フィニは機嫌も治ったらしく、今はランクルートの街中の商店街にあちこち目を光らせている。

「早く何かを食べないと……お腹と背中がくっ付いくぞ。」

幼い頃に聞いた童謡の一フレーズを口ずさんでみる……懐かしいしかし、こうして元の世界の事を思い出すなんて……俺は帰りたいのだろうか？……いや、それはないな。

「お腹と背中がくっ付いたら大変ですね。急いで何かを食べましょう！」

やや切羽詰まった口調でそうフィニが言うので、言葉の綾である

事を伝えるべく急いでフィニを見たら、その表情は笑っていた。

「お腹と背中がくっ付くですか。面白い表現ですね。」

流石のフィニもそこを本気にするほど天然さんではない様だった。

「おや？良い匂いが……」

その時、肉の焼ける芳しい香りが俺の鼻腔を掠め、その匂いに同時にフィニも気付いた。

その香りは馬車の行き来する大通りを越えた先から匂って来ているようだ。

「これは行ってみるしかないな。」

「では行きましょうかケント。」

俺とフィニは並んでその匂いの下へ向かい歩いた。

突然だが、ケバブという食べ物を知っているだろうか？俺は知らない。

聞く所によると、ブラジル辺りの食べ物で、街頭で串に刺さった大きな肉の塊を堂々と焼き、それを細かくスライスして客に分け与えるという、なんとも垂涎な食べ物とのことだ。

「う・ま・そーーー！！？」

その光景は思わず我を忘れるほどに衝撃だった。

なんと、人間の三倍は軽くあろうかという巨大な肉が、道のと真

ん中でキャンプファイヤーのような大きな炎の上で吊るされて焼か  
れているではないか。

しかも肉はジュージューと小気味よい音を立てて焼き上がっている  
し、もうその光景は垂涎なんて言葉じゃあとても表せそうにない。

その光景に見蕩れているのは俺達だけではなく、他のランクルー  
トの人々も「何だ何だ」とその巨大な肉に集まって来ている。

みすばらしい格好をした人も幾人が見られ、貧民街の方からも集ま  
っている様子。

どうやらこれはランクルートでは当然の日常風景というわけでは  
なさそうだ。

- グーギョルギョルギョル -

思いつきり俺の腹の虫が鳴った……

「クス。」

フィニに笑われた！？……可愛い。

「お腹が空きましたね。私もあれを見たらお腹が鳴ってしま  
いそうですよ。」

ふいにフィニがお腹を鳴らし、恥ずかしそうに俯く姿を想像した。  
やばい……可愛過ぎてクラリとくる。

- グウ…… -

その時、フィニのお腹が控え目に鳴った。

「あ……／／／／／」

俯くフィニ。

可愛えええええ！！！？？？

まさに俺の妄想……もとい想像通りのその仕草に思わず取り乱してしまっただぜ。

「き、聞こえました?」

「いやまったく。」

俺は嘘をついた。

ってか、「聞こえた？」なんて聞いたら何の事かモロバレだつてこ  
とくらい、駄目人間な俺だつて分かるよ。

「フィー……相当テンパってるんだな……可愛いぜ。」

さて、フィニの可愛らしさに悶えるのも良いが、いい加減この上手そうに焼ける肉を前にして食えないなんて言う生殺しの状況を何とかしたい。

ふむ……上手に焼けているのに生とはこれいかに……座布団没収

冷静に考えよう。

周りに集まっている野次馬の物珍しそうな表情から察するに、これはランクルートでの当り前な日常風景ではない。

となれば、何かしらのイベントだという発想が一般的だと思うが、その割には祭り特有の雰囲気は無い。

「以上の推察から求められる答えは……」

分からん。

「多分ですけど、あの人ではないですか？」

フィニが指差す方向を見る。

周りの野次馬とは明らかに雰囲気の違いが一人、肉の傍らに座っていた。

一見して旅人だと断定。

なんといつても服が襤褸い。

継ぎだらけの外套を羽織り、脂っこくてぐしゃぐしゃの髪と伸びきった無精髭を蓄えたやや汚らしいその姿は、旅人と表現するにぴたりである。でなきゃ山賊だ。

時折肉の焼け具合をチェックする為か、少し肉を削ぎ落として口に入れている様子からもフィニの推測は間違いないと思われる。

やや表情を幸せそうに緩めて頷いている様子を見ると、あの肉は相当上手いのか……って、これは今関係ないな。

「どいたどいた！道を開ける！」

と、ここで見知った顔登場。

人垣が割れ、そこから五、六人ほどの甲冑を着込んだ騎士達が現れる。

青系の装飾の施された鎧を着ているその人物は、言うまでもない、シュレンだった。

「往来で堂々と肉を焼き、その為に交通の妨げになっているとの苦情が殺到ため参上した。早急に撤収せよ。さもなければ、実力行使により強引に撤去せねばならなくなる。」

シュレンが旅人らしき男に向けて口上を述べる。

まあ確かに、広場でもないこんな場所で肉を焼けば迷惑だよな。実際、シュレンの言葉を聞いて気付いたけど、馬車なんかあの肉のせいで通行できず、渋滞になっている事が分かる。

「んあ？誰だお前えさん。」

男は潰れたような唸れ声でシュレンに名を問いながら、のっそりとした仕草で顔をシュレンの方へ向ける。

「私は帝国騎士団シュレン隊隊長シュレン＝クル＝ルグタンスである！」

と、其の名乗りを聞くと旅人の男は露骨に深い溜息を吐いた。

「全く……この国の人間はどこへ行っても心が狭いのお……食事くらいゆつくりさせい。」

なんとも横暴な物言いだった。  
俺みたいな駄目人間でもここまで自分勝手な事は言わないだろう。

「ならば向こうの広場でも使えばよかるう。わざわざこの場所で焼く必要などないはずだ。」

おゝシュレンらしからぬ当然の指摘……って、それは流石にシュレンを馬鹿にし過ぎかな。

「この場所の日当たりが最高だったんじゃ。」

沈黙。

「はあ!？」

シュレンの素っ頓狂な声が木霊した。



### 三十三章 “旅人の話術”

日当たりが良いとな……？

それって肉を焼くのに何か関係があるんだろうか？

もしかして、この世界の肉は特別製で焼くのに日当たりが関係しているのか！？

そういえば元の世界にいた時に聞いた事があるぞ……超一流の料理人はその日の天気に合わせて料理の作り方を変えるとか何とか……

「おい、日の当り方で肉の焼け具合が変わるのか？」

やや不安になったのか、シュレンがボソボソとした声で部下に何やら訊いている。

「さあ……自分は料理には疎いもので……しかし、向こうの広場とこの場所ですう日当たりに違いがあるとは思えません……」

良く分からないらしい。

「フィニは知ってる？」

フィニに訊いてみた。

「どうでしょう？ 私にも分かりません。」

フィニも分からないらしい。

どういふこと……って……

「あつ!？」

思わず素っ頓狂な声を洩らしたのは俺だけではない筈だ。

なんと、旅人が良い具合に焼けていた肉をそのまま担いで、物凄い速度で逃走し始めた。その速さたるや、旅人の意味深な発言を深く考えていた俺達には誰一人追いかける事が出来なかったほどだ。

「に、逃げた？まさか先程の発言は……」

「混乱させて逃げる隙を作る為の口から出任せ……でしょうね。」

そんなものに引つかるなんて騎士団は馬鹿だなあ、と一概には言えない。

なんせ、その場にいた野次馬も含めて全員があ奴旅人らしき男の口車に見事に乗せられていたのだから。

普通なら「何を訳の分からん事を」で切り捨てられるような発言だというのに、「まさか本当に何か意味が？」と考えさせられてしまう様な力が、あの男の言葉にはあった。

だから、皆して「日当たり？」と考え込んでしまったわけだが……

「それにしたって『この場所の日当たりが最高だったんじゃないよなあ？フィニもそう思うだろ?』」

「あ、アハハ……そ、そうですね。」

ちょっと笑い方が引きつっていた。

まんまと引つ掛かった事が悔しいのだろうか。

「それより……肉は置いて行って欲しかったよ……」

両膝を地面に突いてガツクリと頂垂れる。  
あんな上手そうな物を背中にぶら下げて遁走……これはもう許されないな。

さあ騎士団の皆さん！

頑張つてあの旅人……いや、山賊男を捕まえて罰しちゃってください！

そして肉は俺に……

「あれ？シュレン、追いかけないの？」

「おやケント。いたのか？」

シュレンは俺達に気付いていなかったらしい。

「もともと私達の目的は彼をこの場から立ち退かせる事でしたので。」

自分から荷物も担いで逃げ得出した以上、追いかける理由もない。とシュレンは語った。

「斧が屋根から飛んでったよ……オーノー……ヤーネー……」

シヨックのあまり口からつまらない洒落が飛び出した。

日本人にしか通じない……

「あの、ケント？大丈夫ですか？」

再び頂垂れた俺を見てフィニが心配そうに声を掛けてくれた。  
優しく俺の肩に置かれたフィニの掌から伝わる柔らかい温度が俺の

心を癒してくれる。

「大丈夫だよ。ただ本格的にお腹と背中がくっ付きちゃうかなーってだけで。」

「アハハ。心配しなくてもお腹と背中にくっ付きませんよ。」

フィニが朗らかに笑って穏やかなツツコミを入れてくれた。うん、これもツツコミの一種だね？

「撤収するぞ！各人、軽く昼食を摂った後、再びランクルー  
ト城門前の広場に集合！」

フィニとやり取りをしている間にシュレンは部下達にそんな指示を出していた。部下達は「ハッ！」と短く返事をする、きびきびとした仕草で散って行った。

まあ、『軽く昼食』の部分に俺が反応したのは言うまでもない。

「この後も何かあるのですか？」

その指示に何か思う所があったのかフィニがシュレンにそう訊いた。

「もともと、午後から遠出する任務がありましてね。苦情のあった通行妨害の処理はついでしたのですよ。」

まあそうでもなきやあ、帝国騎士団の中で三番目に強いらしいシュレン隊がこんな苦情処理に駆り出されたりはしないだろう。  
どんな人員不足やねん、と一応心の中で思っておく。

「それで、今から私の昼食にするが、ケントもフィニも一緒にどうか？ 勿論、支払いは私に任せて欲しい。」

そのシュレンの言葉に俺とフィニは顔を見合わせ……

「行く！」 「行きます！」

即答したのだった。

### 三十三章 “旅人の話術”（後書き）

友人に言われました。

「ケントってさ、別に言うほど馬鹿じゃなくね？割と色んなこと知ってるしさ、思慮も微妙に深いし。」と。

僕は言い返します。

「そうだろ？実はそうなんだよ。ケントって実は馬鹿じゃないの。なんせモデルになっているのは僕だから。」と。

友人はさらに言い返して来ました。

「あー、そりゃ文句無く究極にして極限の馬鹿だったわ。ごめんなケント君。」と。

どついう意味なんでしょうね？（え

## 三十四章 “旅人の罾”

やっとなのか……やっと、この世界に来て初のまともな食事が摂れるのか！？

考えてみれば騎士昇華訓練の時の焼きそばみたいな何かも美味しかったような気がしないでもないけれど、やっぱりこうして食事としてちゃんと食うのは大切な事だね、うん。

「あれ？良い匂いが……」

ふいにタンパク質の焦げる独特の芳ばしい香りが俺の鼻腔を擦った。

これは……まさか……

「む？」

自分の体よりも遥かに大きいその肉に下品なかぶり付き方をしてるやや小汚い男がこちらを振り返った。

「あゝー！！！」

と思わず叫んでしまった俺をどうか許して欲しい。

「誰じゃ貴様。ワシは見てのとおり忙しい。食事の邪魔をするでない。」

そう、例の山賊風の旅人男だ。いや逆かな……肉にかぶりついてるその様子は、どちらかというと旅人風の山賊男だ。

ところで、俺はここで初めて近くでその男の風貌を見た。

近くで見ると、顔には歴戦の勇士でさえもこうは成らないだろうと言うほどの無数の傷跡が縦横無尽に走り、もはや整形手術でも元の顔を取り戻す事は出来ないほどに歪んでしまっている。

継ぎだらけのボロボロの衣服の隙間から見える体には袈裟切りに巨大な傷跡が走っている。それも未だ血が滲んでいる様子からみて、新しい傷跡であるようにも見える。

だけどもあ、空腹もそろそろ限界に達し気味な俺にはそんな男の事情など知った事ではないわけで……

「よし奴だ！シュレン、捕まえろ！」

そう頭で思う言葉をそのまま叫んだ。

「いやケント、気持は分かんんでも無いが、この場では私に彼を捕縛する権限は無いのだが……」

場所はシュレンが近道だと言って通った広場。そんな場所でこの男は肉を食っているのだ。

周りには先程肉を焼いていた時のように何事かと人も集まっている。

まあ今回は変な人がいると言うだけで先程の様に迷惑を掛けているわけじゃないから逮捕とかはできないのだろう。と、理性で納得は出来ても、空腹により極限まで苛立っている感情では理解できない。

腹減りと酔っ払いに理屈は通じないのだ。

「ええい！その肉を俺にも食わせろっ！！」



結局のところ、文句無い解決策としてあるのはそれである。何も問題がない。

俺の怒りは収まるし、空腹は満たされるしで悪い所がない。

「なんじゃ、そんなことか。ええぞ小僧。貴様も食べ。」

「そう言うと思ったぜ。だが何度断られようと、俺は何としても、例え力尽くでもゴリ押しでも反則技を使おうとも、全身全霊を掛けてその肉を食べさせていただけなのですかつ!？」

肉ではなく一杯喰わされた感じだ……上手い事は言えていないが。

「そんなでかい声出さんでもくれてやるわい。ほれ、後ろの騎士と小娘も欲しいじゃろ? 食べ。」

そう言つて男はわざわざ食べやすいようにでかい肉を一部切り分けて、俺とフィニ、それとシュレンに押し付けて来た。

「い、いいの?」

「なんじゃいらんのか?」

「頂きます!」

俺は徐に肉に齧り付いた。

マジで美味い。滴る肉汁が口の中で弾け、柔らかいその肉質は舌の上で蕩けるようだ。

これといった味付けは施されていないのに、ほんのりと感じる甘さは肉そのものの素材の味なのか。

ああ……ご飯が欲しいなあ。せめてパンか……兎に角炭水化物が欲しいよー

と、俺は遠慮なくお肉と頂いたわけだが、シュレンとフィニは若干戸惑った表情で渡された肉と男を交互に見比べている。

「ほれ、食え。何を遠慮しとる。食わんか。」

「いえ、名も知らぬ方に御馳走になるわけには……」

そこは真面目なシュレンのことだ。きつぱりと、とは言えないが断った。

「トールじゃ。」

「え？」

「トール＝テン＝ハリエニ＝ラじゃ。ほれ、これで名も知らぬ他人ではあるまい。顔見知りじゃ。食えるじゃろ？」

良い人だ！？

「む……う……」

しかしまあ、そこで固まるシュレンはアホだ。

「私は……その……頂きますね。」

フィニは俺が美味そうに食べているのを見てか、空腹に耐えかねてか、おずおずとそう囁くように言っただけに口を付けた。

「……お、美味しい。」

驚いたように口元に手をやって、やや頬を赤らめながら感想を口にした。

「そんなにか！？……オホン。私も頂こう。」

結局、シュレンも肉の誘惑に勝てず、躊躇いがちながらも肉を齧った。

「クク……全員食ったな？」

その瞬間、トールは表情をニヤリと不敵に歪めた。

「『え？』」

そんな素っ頓狂な声を俺達三人は同時に洩らしたのだった。

## 三十五章 “突撃獣”

象の様に巨大で、チーターの様にしなやかで、亀の甲羅のように頑丈な体を持つ獣。

名を『エインゲンバー』、通称『突撃獣』だそうだ。

「あのヤロー……」

「あ、アハハ。仕方ないんじゃないですか？あんなに美味しいお肉を御馳走になってしまったのですし。」

エインゲンバーの額には一本の立派な角が生えており、その尖った先端は先程巨大な岩に綺麗な円形の穴を開けた所だ。頑丈で、尖鋭で、そして格好良い。って最後のは関係ないな。

エインゲンバーはその通り名の示す通り、額の角をこちらに向けて突進してくる以外の行動をしない。

故に動体視力という特殊技能を持つ上に身体能力的にはそれなりに優れている駄目人間である俺を始めとして、フィニだって突進自体の回避はそれほど苦ではない。

かと言って、それが現状を楽しむ理由にはならないのだが。

「来るっ！」

俺がそう言うと同時に、やっと岩から角を引き抜いたエインゲンバーが再びこちらに照準を合わせ、突進するべく地面を足で掻き始める。

「はい。」

それに対して、俺達はすぐさまサイドステップで避けるべくやや腰を落として構える。

そんな俺達の準備を知ってか知らずか、エインゲンバーは構わず突進を開始する。当然、俺にもフィニにも当たらない。

「で、どうしよっか？」

「どうししょう？」

フィニも困ってる感じ。

「依頼内容は捕獲……でしたら……」

フィニの無敵の言霊の出番である。

「拘束」

フィニがエインゲンバーを指差してそう言うと同時に、地面から伸びる無数のロープが振り向きざまのエインゲンバーの体に絡みついた。

雁字搦めになったエインゲンバーの動きは封じられる。

しかし……

「で、どうしよっか？」

同じ問いかけ。

「どうししょう？」

フィニの反応も同じく困って頭を傾げた。

暴れるのである。

このままじゃあ持ち運べない。

いや、そもそも象に様に巨大な生き物である。

とても俺とフィニだけで運べる重さではないだろう。

「まずは……こうしましょう。 昏倒」

捕獲され、なんとか抜け出そうと暴れているエインゲンバーを再度指差してフィニはそう呟く。エインゲンバーは一瞬でフラッと倒れて気絶した。

相変わらず、えげつない能力である。

「で、どうしようか？」

再三の同じ問い。

「どうしましょう？」

やっぱりフィニの反応も変わらない。

「 浮け」

浮いた。エインゲンバーの巨体が羽のようにフワリと浮いた。

「これで運べますね。」

言霊の便利さは異常である。

そもそも何故こんな事になったのか説明しなければなるまい。

「クク……全員食ったな？」

「」「え？」「」

三人揃ってアホみたいな声を洩らしたこの時のことである。

「何、そんな不安そうな声を出す事はない。別に取って食おうというわけじゃないからのう。」

ちょっと安心。

「依頼じゃよ。もともとこの騎士団の方へ依頼するつもりじゃったが、この国の騎士団は心が狭いからのう。」

自分の所属する騎士団が悪く言われたのが悔しいのか、シュレンはやや唇を引き結んだ。

「実はその肉、ワシが先程西の平原で仕留めて来た『フーガ』という獣の肉での。」

「フーガ!？」

フーガというらしい獣の名前にシュレンが過剰に反応した。見れば、フィニも若干ながら驚いた表情をしている。

「知つとるようじゃの。」

いや知りませんが。

「知つての通り、大柄の癖に臆病で『逃亡獣』と呼ばれるくらい逃げ足の速い獣じゃ。それ故、なかなか仕留める事も出来ず、市場にも殆ど出回っておらん。何が言いたい分かるじやろう?」

分からない俺は駄目人間ですか? はいそうですね。その通りです。

「ほんの一欠片でもなかなか口に出来ない高級品。食べた分は働いて返せ、と。」

「小娘の方はまあまあ頭も回るようじゃの。もっとも、こんなことも分からないようでは人間をやめた方が良くかもしれんがのう。」

人間までやめちゃったら俺はもうただの駄目じゃないか!?

あ、シュレン落ち込んでる。やっぱりお前も俺と同類なんだなあ。ちよつと嬉しい。

「そういうわけで依頼じゃ。ここから東の方へ20キロほど行くと、エインゲンバーの巣がある。言いたい事は分かるな?」

そりゃあ俺だって分かるさ。

エインゲンバーなる生き物を見物したいからそこまで護衛しろってことだろ?

「食べたいから捕獲して来い、ですね?」

「その通りじゃ。」

違つた。



「騎士の小僧も頭は悪そうじゃったが、流石にそれくらいは分かるか。もっとも、分からない方がどうかしとるかの。」

俺はどうかしているらしい。まあ、今更か……泣かないぞ！

「やっと分かりましたよ。ツールⅡテンⅡハリエニーラ……世界を渡り歩く美食家で、人の思考を縛る話術の使い手……」

「ホッホッホ。ワシも有名になったもんじゃの。」

なんか、それだけ聞くと、物凄く悪い奴っぽいよな。

「それで、ワシの依頼、受けるじゃろ？」

まあそんなわけで、こんなわけである。

ちなみにシュレンは「午後は別の依頼で遠出しなければならんだ。本当に申し訳ないが、この件は任せる」とか言って、騎士達の集合場所であるランクルート城の方へ行ってしまった。

最初は逃げたかと思ったけど、本当に申し訳なさそうなその表情を見て、仕方なく認めた。

「さて、帰りましょうか？」

「そうだな。」

駄目人間、もとい駄目と美女が並んで歩き、その後ろに気絶した象の様な巨体の獣がフワフワと浮いて付いてくる、という奇妙な構

図がそこにはあった。

## 三十六章 “ 幼生エインゲンバー ”

何も問題は無かった。

フィニの言霊の最強っぷりは良く知っているし、怪我もせず、依頼も最速タイムでこなされたと言っても過言ではないだろう。そう…  
… 本当に問題は無い。

それでも問題があるとすれば……

「可愛いー！！」

ちよつとフィニが壊れたことかな。

まあ失念していたわけだが、ここはエインゲンバーの巣付近。  
この辺りを探索した所、運良く即座にエインゲンバーと遭遇した為に忘れていた。

巣である以上、ここには……

「囲まれてるなあ。」

十数匹のエインゲンバーの子供に。まあ構わないんだけどさ。

エインゲンバーの成獣からは想像も出来ないほど幼生のエインゲンバーの可愛らしさは異常だった。

小さくて滑らかな体、クリクリとした何かを訴えたそうな眼、そして申し訳程度に額にあるタンコブの様な角。

可愛い…… 思わず撫でたくなる子猫のような愛くるしさと、小突きたくなる様な生意気さを兼ね備えた最強の愛玩動物がそこにいた。

彼等は、恐らくは自分たちの親が捕獲されているというのに、何

も分かっているような無垢な瞳で俺とフィニを見上げている。憎むどころか、むしろ懷いて来そうな勢いだ。

「ケント、これは撫でてもいいんでしょうか？」

構わないと思うけど、現在進行形で彼らの親を捕獲しているフィニの言葉ではないと思う。

普段の優しいフィニなら、親を捕獲しているなんて、それだけで罪悪感に苛まれてしまうだろうに……

可愛い物を見るとフィニは若干壊れる……覚えておこう。

「やめておいた方が良いでしょう。」

ふと背後から声がした。

「幼生のエインゲンバーの角には強力な毒がある。彼等は彼等の親を攻撃した者に懷くフリをして近づき、その角に含まれる毒で襲撃者を殺そうとする。子が親を守る珍しい習性のある生き物なんじゃよ。」

驚いて振り返れば、エインゲンバーの子供たちの輪の外にツールが立っていた。

「しかし驚いたのう。二人だけではエインゲンバーは敵しかろうと思うてこうして援助に来てみれば、依頼のエインゲンバーは既に捕獲され、だというのにお主ら二人は生命の危機に瀕しておるとは……なかなかないぞ。こんな状況。」

え！？俺達今死にそうなの！？

「はっ！あ……」

そこでフィニは自分が彼等の親を捕獲している事に今更ながら気づいたらしい。

途端、表情が一気に沈み込む。

いけない……このままではフィニが傷付いてしまう。

「私……は……」

う……今にも泣き出しそうだ。

でも、仕方のない事だとも思う。

多少脅迫気味だったとはいえ、エインゲンバーの捕獲の依頼を受けたのは俺達である。

その捕獲対象に子供がいたからと言って、それだけで罪悪感を感じるなんて、少し自分に甘えが過ぎるような気もする。

生きて行く上で俺達は何かを食べる。

野菜も食べる。魚も食べる。肉だって食べる。

何かを食べると言う事は、食べられた何らかの生物の命を犠牲にしているという事で、自分では殺さないけれど、人が殺した物は平気だなんて、そんなことは甘えだと駄目人間な俺でも流石に分かる。

しかしまあ、それはそれ。

今俺の目の前で女の子が傷付いている。

俺にとってはそれだけが重要で、それ以外に大事な物なんてない。

俺が今すべきことは「気にするな。フィニは悪くない。」とフィ

二を慰める事。

慰めないといけない。可愛いフィニに泣いて欲しくないから。

「きに……」

「甘えるな小娘！」

俺の言葉はトールに被せられた。

「え？」

フィニは当惑した表情でトールの方を振り返る。

「貴様とて肉を食うだろう？その肉はどこからやって来た？ランクルートの町で貴様が食った肉は何の肉だとワシは言った？」

あ、それ俺も思った。

「ルヴィス帝国は生態系を崩さぬため、法で幼生の獣を狩猟する事を禁じている。つまり、この国の中で肉を食う時、その肉は必ず成獣の物であるのだ！食う事と殺す事が違う事などと、子供の様な事は言わぬであらうな？」

捕獲する。その生物のその先の人生……っていうか獣生を奪う。それでもフィニは自分が殺すわけじゃないから平気だと言っただろうか。

カレイプスを消した時、あれほどに涙を流したフィニが、自分が殺さないと言っただけで平気な顔をして笑えるのだろうか？

そんなはずはない。

あの優しいフィニが生物を無為に捕獲するなんて平気で出来る筈が

無い。

だったら、どうしてフィニはエインゲンバーに対して言霊を使う事が出来たのか……

「ち、違います！私は、ただ……」

フィニにはフィニで何か思う所があるらしい。

それはもしかしたら人間至上主義のエゴの塊なのかも知れないし、ひょっとしてカレイプスくらい大きくないとフィニにとっては生物として認識できないのかも知れない。

どんな思想の持ち主だったとしても、俺はフィニの考えを尊重するし、それによって俺がフィニを嫌うなんてありえない。

俺にとって、俺の目の前で女の子が傷付かない事だけが重要なものから。

「まあ良いじやろ。その論議は後にしよう。それより、今はこの状況を何とかする事を考えんとう。」

気付けば、つぶらな瞳をしたエインゲンバーの子供はジリジリと俺達への間合いを詰め、その円陣を狭めてゆく。

何も知らずに見れば抱き締めなくなるほどの可愛らしさだが、先のトールの話を聞いてからだ、こいつらは凶悪な獣にしか見えないいや、実際に凶悪な獣なのだろう。

親を攻撃した者を子が殺す。

それはつまり、幼生の方が成獣よりも強いという事で……

「幼生のエインゲンバーの突進の速度は親以上じゃ。お主ら、死ぬぞ。」

と、そのトールの言葉が早いか、一気に表情を凶悪に変えた幼生のエインゲンバーがロケットのような勢いで一斉に俺達に向かって飛び掛かって来た。



## 三十七章 “後唱法”

「フィニ！」

「え？キャツ！？」

俺はフィニの腕を掴むと、自分の全体重を掛けて地面に引き摺り倒した。幼生エイゲンバーの角の軌道が全てフィニを狙っている事が分かったから。

地面に倒れたフィニの、もともと腰があつた辺りを幼生エイゲンバーは通り抜けて行った。

「ほう。やるもんじゃ。あの速度を見切るとは……小僧、良い目を持つておるな。」

そんなトールの声が聞こえたが、そんな場合ではないので無視した。

それに、一度避けただけだ。

また来る……！！

狙いは……またフィニか！？

「あ……っ！」

フィニは俺が地面に引き摺り倒してしまつたせいで身動きが取れない。

俺も体勢を崩してしまっているから、フィニの身代わりに幼生エイゲンバーの突進を受け止める事もできない。

一瞬、幼生エインゲンバーの突進がフィニに突き刺さる悪夢のような光景が脳裡を過る。  
最悪だ……最悪の極み……俺が俺の目の前で女の子が傷付くのを救えないなんて……

ドスツと鈍い音が俺の隣から聞こえたような気がした。俺は思わずその方向から目を逸らす。見ていられなかった。最悪の光景がそこにある気がして……

「仕方ないのう。小僧、貸しじゃぞ。」

そんなあてつけがましいトールの言葉。しかし結果として誰も傷ついていない。俺もフィニも。

何が……起こったんだ？

「やれやれ、依頼が高くついたわい。これなら一人で狩った方がマシだったかのう。」

恐る恐る声の方向を見る。

「受け……止めて……！？」

そう思ったが違う。

地面にへたり込んでいるフィニに向かっていた幼生エインゲンバー達が全て固まっていた。まるで石にでもなってしまったかの如く、カチコチなまでにその場に硬直していた。

「【襲撃者の動きを止めよ】【停止を求める時空の理】【悪魔よ】」

そしてトールの詠唱……教えてもらったばかりだが、三段法である事が分かる……って、うん？順番が逆じゃないか？

「まさか、こんなところで秘法中の秘法を使ってしまつとは……折角、秘匿としていたのにのう……小僧、この貸しは高く付くぞ！」

と、やや不機嫌な様子で俺の方をトールは向いた。

そう言うけど、俺には何の事だか分からない。

「な、何をキョトンとしておる……？まさか貴様、今何が起こつたのか理解しておらぬのか？」

大正解。

「詠唱を行わずに術を発動し、後の詠唱で威力を補完する永続系魔術最高の秘術『後唱法』！秘法中の秘法じゃぞ！？ワシが人生を賭けて開発した詠唱法じゃぞ！驚くなり感動するんじゃないのか！？」

そう言われても……

「大体、魔術師ならば卒倒したとしてもおかしくないほどに革新的な詠唱法なのだぞ！」

「いや、だって俺さ、魔術師じゃないし。」

何を勘違いしているんだろう……

「なんじゃとおーーーーー!!??」

凄い取り乱し様だった。それはもう、思考を縛る話術の使い手という格好良い称号が台無しなぐらいのレベルで取り乱していた。

「フィニ、立てる？」

「あ、はい。大丈夫です。すいません。」

それを無視して俺は俺が地面に引き摺り倒したフィニに手を差し出す。躊躇い無くその手を取ってくれた事が嬉しかった。

「小僧！ではお主、魔術についての知識は……」

「『三段法』とか、伝説上には『一語法』とかいう詠唱法があるって程度なら。」

それでもツールは切羽詰まった様子で俺に問い詰めてくるから、俺はフィニを引っ張り起こしながら適当に答える。

「で、では、ワシは何も分かっていない小僧に何十年も秘匿とし続けて来た極意をペラペラと喋ってしまったと言うのか!？」

「まあ、そういうこと……かな？」

思いつきり頭を抱えてツールはその場に蹲った。と思いきや元気良く立ち上がり俺の胸倉を掴んで顔を寄せてきた。

「小僧、ワシが貴様らを助けた借りの事は無かった事にしてやる。だから、この事は一切の他言は無用じゃ!分かったな!?もしも、この『後唱法』がルヴィス帝国内で広がったりしたのを確認

したら、貴様の一族郎党皆殺しにしてやるからなっ！！！」

もし首を横に振ったりしたらこの場で首を刎ねられる勢いである。むしろ、問答無用で口封じをしてこないだけマシだと思えるほどに凄まじい剣幕だ……そして俺は命が惜しい。

「り、了解つす。誓って俺は誰にもこの事は言いません。フイニも、良いよな？」

「ええ。分かりました。」

聞き分けの良い子って素敵だよね。

それにしてもツールって……意外と癪癪持ちなのかな？取り乱し方がちよつと子供っぽいぜ。

こんな駄目人間にそんなこと言われたら人生おしまいだな。

「フウ……長い間生きて来たが、こんな無様を曝したのは初めてじゃ。」

どこか諦めた様にツールはそんな事を呟いた。そうは言っても、俺もフイニも何もしてないんだけどねえ……

「小僧、お主魔術師ではないのか？」

「違うけど？」

「小娘は？」

「違います。私は魔術師ではないです。」

フイニは魔術師ではないよね。そんなもの遥かに超越した存在ですよ。

魔術師ってか、魔法使い……いや、もう神様とかそう言うものの部類

だと思っ。

まあ、神様って言うത്自称『神』のあの謎の声なんだけど……

「では、どのようにしてエインゲンバーの捕獲を？正直、体術のみでの捕獲は至難の業だと思うのじゃが……」

そりゃもう言霊の力という一点に尽きる。これ以外に無し！あつたらむしろ怖い。

「それは、私がムグツ！？」

フィニが正直に答えようとしたので掌で口を封じた。フィニの柔らかい唇の感触と、少し湿った柔らかい吐息が俺の掌を擦る。

なんだろう……物凄い背徳感だ……

「俺の力ですよ。なんせ俺、勇者って奴らしいですから。」

親指を立てて若干格好付けながら言ってみた。すぐ調子に乗る駄目人間の悪い癖です。

「ほほう。なるほどの。」

なんだか凄く悪い顔でツールは納得の声を洩らした。

## 三十八章 “ トールの実力 ”

落ち着いた……落ち着いたけど落ち着かない。  
それもそうだろう、未だ周囲には幼生のエインゲンバー達が突撃姿勢で固まっているのだから。

トールの『後唱法』というらしい詠唱のルールを外して考えると、先程のトールが発動した魔術の詠唱は【悪魔よ】【停止を求める時空の理】【襲撃者の動きを止めよ】となるわけだ。

考えるに、発動された魔術は対象の時間を止める魔術……言霊ほどじゃないが、これはこれでチートじゃないか？まあ言霊だったら止まれ の一言だけどさ。

「まあ良いわ。とりあえず悪魔術を解除する。そこを退け。」

どうやら『悪魔術』というらしい。

「解除したら……」

再び動き出す幼生のエインゲンバーを想像し、俺は慌ててフィニの腕を掴んでその場から離れる。フィニは驚いた様な声を出しながらも、俺と同じ想像に至ったのか、文句を言う事もなく俺に付いて来た。

「ふん。」

トールはつまらなさそうに鼻を鳴らし、指をその場で振った。その瞬間、まるで弾丸のように幼生エインゲンバーが一点に集中して

突進を開始する。もし動かずにいたら、体に風穴が開いたんじゃないかと思えるほどの威力で。

「逃げるのは至難の業じゃな。仕方ないのう。食うか。」

子供を食っちゃいけないんじゃないの？

「緊急避難と、後で言い訳できるようにせんと。」

トールはニヤリと笑って見せた。

それで気付く。トールはこの状況が欲しかったのだと。

トールが食いたかったのは通常のエインゲンバーではなく、その子供、幼生のエインゲンバーを食したかったのだ。

だが、ルヴィス帝国の法律で成獣以外を狩る事は禁止されている。だから、殺さざるを得ない状況が必要だったのか……

「お主ら、証人になるじゃろ？ 異国の旅人なれど、国家の客人となればのう。」

「知っていたんですか？」

なんと性格の悪い事だろう。

流石は思考を縛る話術の使い手だ。

「まさか、魔術に関して素人だとは思わなかったがの。」

そこは苦虫を噛み潰す様な苦渋の表情で言う。よほど悔しかったのだろう。



「さて、ゆっくり会話しておる時間は無いぞ。」

そのトールの言葉通り、のんびりしている時間など無い。突進を外した事を理解した幼生のエインゲンバー達が、クリクリした可愛らしい目でこちらを睨みながら、再び突進を開始しようとしているのだから。

フィニの気持ちとか、悪魔術とか、トールの策略とか、エインゲンバーの肉の味とか、フィニはやっぱり可愛いなとか、考えたい事は一杯あるのに……

考える事が多過ぎて、駄目人間の脳味噌はパンク寸前です。いくつか考える必要のない物もありそうだけど、気にしない気にしない。

「クク……幼生のエインゲンバー、どんな味がするんじゃないかなあ。楽しみじゃ。」

トールが薄汚いボロ布のような服の袖で口元を拭う。涎に土の色が混じって余計に汚くなった感がある。良い子には見せられない汚い大人の姿だろう。物理的な意味で。

ただ、生き物を殺すなんて、それもこんな（見た目だけは）可愛いらしい子供を殺すなんて、フィニにとって辛い事なのではないだろうか……

そう思って俺はフィニを見る。フィニはいたって普通の表情をしていた……あれ？

「フィニ、平気なのか？」

人に害をなすカレイプスを消し去った時でさえあれほどの涙を流

したフィニが、どうして幼い生き物を殺そうとしているツールを見て平気でいられるのか……

考えたいけど、考えてもらえない。

十数匹の幼生エインゲンバーが一斉にツールに向かって飛び掛かった。

「ワハハハア！！！」

ツールは機嫌良さに笑うと、自身も幼生エインゲンバーの突進の中に自ら突っ込んで行き、そのまま背後まで駆け抜けた。

それは刹那の閃き。特技動体視力の駄目人間こと俺の目にさえ、閃光が糸状に走ったようにしか映らなかった。

チン、とツールは武器など持っていないのに、刀を鞘に戻す時のような音。次いだズザーという地面を挟る音は幼生のエインゲンバーが地面に着地した音だ。

「え？」

フィニは何が起きたのか分かっていないのだろう。不思議そうな声を出す。

バサツという音が遅れて聞こえ、幼生エインゲンバー達は一匹残さず首筋から真っ赤な鮮血を噴き出してその場に崩れ落ちた。

「さて、鮮度が命じゃ。早速食うとするかの。貴様らにも食わせてやるぞ。依頼達成の報酬じゃ。」

と、トールは良い笑顔でそう言うのだった。

色々と考えたい事があつた俺だったが、この時だけは思わず生唾をゴクリと飲み込んでトールの言葉に頷いたのだった。

### 三十九章 “フィニの気持ち”

子供の様な輝かしい笑顔で焚火の準備を始めるツール。よほどエインゲンバーの肉を食すのが楽しみと見える。まあ、『人の思考を縛る話術の使い手』とかいう称号よりも前に『世界を渡り歩く美食家』なんて称号があるのだから、それなり以上に食べる事に関しては貪欲なのだろう。

そんな様子のツールを尻目に俺はフィニの様子を見る。相変わらず表情が曇ったりする様子は無い。むしろ、エインゲンバーの肉の味をどこか楽しみにしているかのような表情ですらある。

勿論のことながら俺はフィニが傷付かないのが一番なのだから、フィニが何とも思っていないのは大歓迎ではあるのだが、しかしどうにも俺の思い描くフィニ像との食い違いが気になる。

折角だから訊いてみる事にした。

「なあフィニ。」

「何ですか？ ケント。」

フィニは普通に俺に応える。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫、とは？」

「だってさ……その……カレイプスの時とか。」

「ああ、そのことですか……」

少しだけ落ち込んだ表情を見せるフィニ。

まだカレイプスを“消失”させたことはフィニの中に後悔として残っているのだろうか……

少しだけフィニに思い出したくない事を思い出させてしまった事で、俺はさりげなく自分の太腿を全力で抓って罰しておいた……痛い。

「氣を使ってくれているんですね。ありがとうございます。」

「え！？いや……その……／＼」

しかし、直後に俺に向けられた不意打ちのスマイルで俺は思わず氣が動転する。頬も真っ赤に染まった事だろう。慌ててそっぽを向いて隠す。

「カレイプスを、人が食べる事は出来ませんから……」

どうやら気付かれなかったようだ……が、しかし、どういうこと？  
駄目人間にも分かるように説明して欲しい。

「私だってお肉は食べます……命に感謝して……食べます……」

それは当り前の事。俺みたいな駄目人間だつて、そこに実際に感謝の気持ちがあるかは兎も角、食事の前には「いただきます」の一言くらいは言う。

フィニほどに優しい人間ならば、食事の前に命をくれる動物植物に本当に心の底から感謝をするのかも知れない。

実際、フィニは晩餐会の時など、誰も気付いていなかっただろうけど、さりげなく黙祷を捧げてから料理に手をつけていたのだから。

「食べられて救われる事もありますよ。でないと、無為に殺された生き物の魂が浮かばれないじゃないですか……」

頬を一筋の涙が伝う。その涙は何に対してなのか……

「元の世界で……私に食材を売ってくれない人がいました。だから、私は自分が食べる為に、家族が食べる為に、狩りをすることもあつたんです。食べる為、自分たちが生きる為……私は傲慢です。でも、殺された生物は食べられる事で救われるんだと、私は信じています。」

フィニにしては長い独白だった。

でも、お陰で分かった。言葉にするまでもないフィニの気持ち。俺みたいな駄目人間には、こうして説明して貰わなくては理解できなかった崇高な考え。

カレイプスは食べられない。それが肉質的な問題か、それとも毒でもあるのか、それは分からないが……食べられないカレイプスの魂が救われない。だから殺すのではなく“消失”させた。救われないかも知れないが、せめて安らかであれ、と。

でも、エインゲンバーは食べる事が出来る。命に感謝して食べる事で魂は救われる。それは、フィニにとって辛い事ではないのか……良かった。

「お主ら何をしとる。火を起こすぞ。手伝えい。」

ツールが俺達を呼んでいる。

「ああ、はいっスー」

フィニの気持ちも分かってスッキリした俺は、そのまま手伝おうとトールの方を向く。その背中にフィニが手を添え、体重を預けて来た。

思わず心臓がドクンと脈打って跳ね上がる。

「え？あ？い？お？う？」

緊張と混乱のあまり、俺の思考回路はまともに回らなくなり、言葉からは意味の無い疑問形が次々と溢れ出した。

すぐに離れたフィニの顔は湯で蛸以上に真っ赤だったが、俺の顔はきつと絵具のカーマイン以上に真っ赤だろうから指摘しないでおく。

「クス。ケントって面白い。」

あ、笑った。可愛い。

「失望しましたか？私が、そんな女で……」

しかし途端落ち込んだように俯いてしまうフィニ。

これは……男として気の利いた言葉の一つでも言わなくては！俺は駄目人間でも男なんだ！！

「そんなわけ……ないだろ？」

「え？」

だが、所詮俺は駄目人間。気の利いた言葉なんて知らないから、俺は自分の思う事を真っ直ぐフィニに伝える。

フィニは顔を上げて真摯な眼で俺を見つめて来た。

「むしろ安心したよ。やっぱりフィニは優しいんだなってさ。」

「そんな……私なんか……全然……」

再び顔が伏せられたが、それは悲しみによる物ではなさそうなので、俺はそれ以上言葉を発す必要は無いのだと悟った。

俯いているフィニが何を考えているのか……分らないけど、フィニが傷付いている様子は無いから、俺は安心してそこにいた。

「えいつ！」

ふいにフィニの掛け声。同時に、俺の唇に触られる柔らかい感

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

思考回路が完全にフリーズした。

「クス。ありがとうございます。少しだけ、気持ちの整理が付きました。」

と、言いながら、フィニは俺の唇に触れていた指を離した。



内緒のサインをするように、人差し指の腹を俺の上唇に当てていたのだ。

あれーチューじゃなかったのか……ちよつと残念。でもまあ、もし万が一チューなんてしていたら……うん、緊張で死んでたな。あの意味ラッキー？そんなわけない。

いやいや、そもそもこんな可愛い子が俺の唇に訳もなく触れるなんて、そんなこと天変地異が起こったってありえない……そうだからの間違いだ。

そうか！フィニは俺に「聞くに堪えないからそれ以上喋るな」と言いたかったんだ！自分が黙ってたから、もしかしたら俺がまた何かを言い出すかもと思ってたんだろうか。

でも、優しいフィニはこんな駄目人間な俺にでも気を使ってくれているんだろう。そんな言い方をしたら俺が傷付くと思って……

じゃあ仕方ないな。これ以上余計な事は言わないでおこう。幸いフィニも思いつめた表情じゃなくなったみたいだし。

「そうだな。ごめんなフィニ。」

「なんでケントが謝るんですか？クス……変なケント。」

優しい！俺みたいな駄目人間の戯言を無かった事にしてくれるなんて……！

やっぱりフィニは女神さまのように優しいよ。

「ほら、ツールがそろそろ痺れを切らしそうですよ。私達も行きましょう。」

「そうだな。」

フィニの晴れやかな笑顔に俺はタジタジしながら、肉を焼く準備をしているトールの下に二人並んで歩いたのだった。

### 三十九章 “フィニの気持ち”（後書き）

そんな勘違いする奴いねーよ。ってな感じの章でした。  
しかし、それが駄目人間クオリティー！（え

## 四十章 “トールの行動理由”

矢倉状に組まれた薪を囲む。っていうか、トール気合入り過ぎ。  
どんだけ楽しみにしてんねんっ！と、ついっつかり関西弁でツッコミを入れそうになったのは秘密だ。

「さて、火じゃの。ワシは正直『精霊術』は得意ではないんじゃないかのう。」

と、ここまできてトールは残念そうな声を洩らした。

「そうなんですか？」

「そうなんじゃよ。いや、できないわけではないんじやが、微調整がのう……消し炭にになってしまうかも知れん。」

凶悪過ぎる。

「あれ？でも、ランクルートの街の中じゃあ普通に火を起してなかったつけ？」

「たまたま上手く行ったんじゃ。下手したら、あの辺り一帯吹き飛んでいたかもな。」

そんな危ない事を街中でやらしたのか……

「うーむ……全ては幼生のエインゲンバーをこの口で食すためよ。」

なんだか苦勞話みたいな語り口調だが、言ってみれば俺とフィニが扱き使われた話である。してやられたとはこの事なのだろう。

考えてみれば変な話だ。街中で、それも通行の止まる迷惑になる位置で肉を焼く。苦情が出る。苦情処理に騎士団が出張る。

つまり騎士団は軍隊的な立ち位置とは別に警察的な側面も持っているということだろう。お役所仕事御苦労さん。

それは兎も角、騎士団が出張ってくる。本来はその中の誰かにでも押しつけようとしたのだろうけれど、偶然にも国家の客人だとか言う異国の二人がそこにいた。しめたとばかりに俺達に押し付けたというわけだ。

でも変じゃないか？この状況を作るには、成獣のエインゲンバーに勝てる実力が必要な上に、幼生のエインゲンバーに関する知識の欠如が不可欠だ。でなきゃ、幼生エインゲンバーを殺さざるを得ない状況が完成しない。

どうして、俺達には実力があり、かつ知識が無いと判断した？俺には実力もないし知識もないぞ。

「不思議そうな顔をしとるの。そんなにワシの行動が不可解か？」

そんなに不思議に思っているつもりは無いんだけど……俺って顔に出やすいのかな？

「ワシには貴様が、」

「あ、俺の名前ケント。いい加減さ、小僧とか貴様とかそんな呼び方やめろよな。ちなみにこっちの可愛いのがフィニ。」

空気を読まないのも駄目人間クオリティー。

不意に紹介されたフィニは咄嗟の事に驚いたのかやや頬を赤らめて俯いた。可愛い。

「ふん。ワシには貴様が不思議に思っている事など手に取るように分かるわい。」

あ、無視された。

よほどセリフを遮られたのが不愉快だったのだろう。明らかに不機嫌な表情になりつつも、トールは何事もなかったかのように同じ言葉を口にした。

「ま、貴様のアホ面が気に入ったんじゃよ。」

サラッと酷い事を言われた。

「何だとっ！こんなイケメンを捕まえて何を言うっ！！」

軽くナルシスト入りなのは勿論駄目人間クオリティー。

「そう我鳴るな小僧、底が知れるぞ。」

なのに、特にツッコむでも無く、トールは軽く受け流した。

「国家の客人、異国の旅人となれば、ルヴィスの、それもラシクルート付近にしか生息していないエインゲンバーに付いての知識など無いと踏んだだけじゃ。それに、風の噂では南の村でカレイプスを討伐したと聞くではないか。これ以上に適した人材などおら

んよ。」

ま、カレイプスは言い過ぎじゃろうがな。なんてクックと含んで笑いながらトールは言った。全然言い過ぎじゃないですけどねー、と口から出かったが、一応堪えておいた。

「でも、もともとはこの国の騎士団に依頼するつもりであったと言いましたよね？」

フィニがおずおずとそう切り出した。

確かにそうだ。ランクルート付近にのみ生息するエインゲンバーとなれば、異国の旅人となっている俺達が知らぬのは無理のない事だが、最初は騎士団に依頼するつもりであったとトールは語っている。まさか騎士団が幼生エインゲンバーに付いて詳しい知識が無いとは思えないし……

「あんなもん、口から出任せじゃ。」

さらっと言った!?

「ワシは始めから貴様ら二人を利用するつもりでいたし、その為に行動していたつもりじゃ。概ね、ワシの予想通りに事は進んだしの。愉快じゃ愉快。」

そんな風に嘯きながら軽快に笑う様子は、子供が自分の悪戯を自慢するかのようには誇らしげだった。つまり、苛立たしかった。

「さて、肉じゃ肉。食うぞ。」

と、そう言っただけで火も付いていなかった事に気付く。

「あ……」

なんか世界の終わりを見たかのような絶望の表情だった。どれだけ楽しみにしていたんだろう。

「フィニ。良い具合に火、付けてあげてくれ。」

なんだか無性に哀れに思えて、俺はフィニに火を付けるよう頼んでいた。俺が食べたいわけじゃないんだからなっ！勘違いするなよな！とかツンデレを気取ってみたり……絶対この世界じゃ通じないよな。

「あ、はい。」

フィニも似たような事を感じていたのか、特に躊躇いもせず頷く。

「燃えよ」

燃え盛る薪。轟々と炎を上げ、矢倉は一瞬で崩された。

「あの、フィニ？」

「すいません。私も力加減、苦手で……」

うおい！？マジで！？またフィニの可愛らし一面発見しちゃったぜ！じゃなくて！！

「ま、まあ火は燃えてるし、これで肉も焼けるっしょ。ほら、



トールのオツサン。肉焼くぜ。」

予め皮を剥ぎ、食べやすい大きさに切り刻まれている肉を指差す。ちなみに、切り刻んだのは俺。

バーチャル世代な俺は調理もゲーム感覚なので、実はそう言うのは得意だったりする。生きているのを殺すのは、正直ゴキブリが限界だけど、死んでいればそれはもう食糧なので平気なのだ。

「おお！」

トールも火が燃え上がっている事に今更ながら気付き、パアッと表情を綻ばせた。だから、どんだけ楽しみやねん。まあ俺も楽しみだけどさ。

「では、命に感謝していただきましょう。」

そんな風にフィニが祈りの言葉を捧げ、適当に木の棒に突刺された肉を火に翳して焼いた。

成獣の肉の方は筋張っていてあまり美味しいとは言えなかったが、しかし幼生の肉の柔らかさと甘さたるや、その美味しさは尋常ではなかった。

## 四十一章 “容疑”

依頼は達成された。どうにも納得のいかない結果ではあるが、何にせよエインゲンバーを捕獲し、ツールに献上すると言う当初の目的は達せられたわけで、もう俺達はツールに関わる必要は無いわけだ。

考えてみればこんな汚らしい形なりしたオッサンをよくもまあ信用した物である。いや、信用していたと言うほどに積極的にツールに関わったとは思えないけど、しかし助けられたというのも事実なわけで、汚らしいなんて言っちゃあ流石に悪いかなーとか考えたり考えなかったり……

「じゃあ俺達はとりあえずランクルートに帰ろうぜ。朝の散歩がとんでもないことになっちまった。この調子じゃあ街に帰る頃には日が変わっちゃうよ。」

空には既に赤みが掛り、夕暮れ時である事をそこはかたなく知らしめている。

街からこの場所へ来るまでに多分三、四時間歩いたから、帰りもそれだけ掛ると考えて……空の具合的には今五時から六時くらいだと思うから……まあ夕飯時には帰れるかな、なんて夕食の遅い俺駄目人間。

まあ今現在、腹がはち切れんばかりにたらふく肉を食べてしまったわけだが、三時間も歩けば腹も減るだろうと、ひとまず俺はフィニに帰ろうと言葉を掛けた。

「そう……ですね。」

フィニも思案しつつ同意を示してくれた。

「そうか。お主らランクルートに帰るのか？」

と、その時、何やら意味深な口調でトールが疑問を発す。

「いや、のう。戻らない方が良い様な気がするのじゃが……」

え、なぜ？と言葉を発す余裕は無かった。

「三人とも動くなっ！」

鋭い声がその場に響き渡った。

「チツ遅かったか……」と舌打ちと共に発せられたのはトールの  
呟きだ。

「え？え？」

俺は何が何やらわからず意味の無い音を発しながら口をパクパク  
させることしか出来なかった。

右後方には鬱蒼とした森、左手の後方には先のエインゲンバーの  
巣と思われる岩場から削り取られたかのような洞窟。そして、前方  
にあるのは先程矢倉を組んで火を起こし、肉を焼いて食べた隠れる  
ことなど出来ないだっ広い草原である。

そこから、まるで湧き出て来たかのように一人の人間が、次いで

沢山の似た甲冑を着込んだ無骨な騎士達が現れて来た。感覚的には地面から生えて来たのかと言った感じである。

見た感じ50人強の人数で、シュレン隊の三倍以上の人数。

甲冑には橙色の紋章が刻んであった。

シュレン達の着ていた鎧に刻まれていたこれと同じ模様は、確か青色だっただろうか？

「我々は帝国騎士団ハイラル隊である！貴殿等を幼生エインゲンバーの狩猟及び捕食の容疑で連行させていただく。」

その団体の中から一人、薄緑の髪を短めに切り揃えた、一目で歴戦の勇士と分かるほどに精悍な顔つきをした壮年の男性がそう口上を述べながら一步前へ踏み出してきた。

「そ、それは……その……」

「弁明は帝城で聞こう。」

なんとか釈明を試みるも、有無を言わさぬ調子で封殺された。

言葉に詰まってトールを見る。トールは険しい表情で口上を述べる男の顔を凝視していた。相当に情けない顔をしているであろう俺に気づかなかったようで何よりだ。

次いでフィニを見る。フィニは俺と同様に困った表情で俺を見返してきた。自分達がとんでもなく悪い事をしてしまった事に気付いた、と言った風体の表情である。

「手荒な事はしたくないので、大人しく御同行願いたい。」

口調こそ丁寧ではあるが、その言葉の節々には「抵抗するなら斬って捨てる」という明確な意志が感じ取れる。ここは逆らわないが吉と言う物だろう。

「一つだけ、訊かせて貰いたいんじゃないか?」

そんな中、トールが釈然としない事があるとしても言いたげにおずおずと口を挟んだ。

「まあ良からう。」

男はトールが質問することを許可した。

「先程『容疑』というたの。と言う事は、ワシらが幼生のエインゲンバーを食った証拠が無いどころか、その様子を目撃すらしておらん。何故、そうも明確に罪状を言う?」

んん? ちょっとトールの言ってる言葉の意味が分からないぞ。ちょっと待てよ。

容疑ってことは、つまり疑いだ。「お前ら子供のエインゲンバー食っただろ」と、今容疑を掛けられているわけだ。

……そうか! 俺達はさっき食べたばかりで、その時周りに人はいなかった。こんな大群が隠れていられるスペースもなかった。なのに、なんで俺達に『幼生エインゲンバーの狩猟及び捕食』なんて疑いが掛けられるんだと、そうトールは言ってるのか。

「そんな事か。何と言う事は無い。丁度任務を終えて街に帰

る途中、どこからか幼生エイゲンバーを食うためだとかいう計画が聞こえたのでな。任務の報告のために隊員の殆どは街へ帰らせつつ、こうして部隊の一部を引き連れてやって来たというだけだ。」

ということは、五十人強はいそうなこの大群は部隊のほんの一部に過ぎないってことか……って、そんな事はどうでもいい。肝心なのは、つまり、肉食ってる最中の俺達の会話を聞かれていたという事だ。

……どこで？どうして？？どうやって？？？

「流石は……音に聞こえた『千里眼』ということかの。」

千里眼って……

「『千里眼』などと言う言葉は聞こえが良すぎるな。私は所詮ハイラルⅡイデーⅡケスタリードという名の一個人でしかない。」

んー？ハイラルってどこかで聞いた事があるような……

「シュレン達の話にあった、帝国騎士団最強の騎士の名ですよ。」

戸惑う俺にこっそりとフィニが耳打ちしてくれる。

あーそっかー。あのねえ……あの……唯一帝国内でシュレンに勝つことのできる騎士だったっけ！？

「もしかして俺達って、物凄く厄介な人たちに目を付けられた？」

「かも、知れません。」

その後、俺とフィニ、そしてトールの両腕には何やらよく分からない模様の施された手錠を掛けられた。話を聞く限り、体内の魔力出力を乱す機能があるらしく、ようは魔術を封じる手錠とのことだ。

特に逆らう事は無く、俺達はハイラル隊の皆様に連れられてランクルートの街に帰る事になったのだった。

## 四十二章 “投獄”

気が付けば俺達には一人一部屋の個人部屋が用意されていた。

四畳半ほどの広さの部屋は鉄格子で区切られ、その中には硬質<sup>やわらかい</sup>なベッドにフワフワ<sup>いじまい</sup>の毛布、そして申し訳程度に区切られた区画に和式っぽい様相の廁<sup>トイレ</sup>が一つ……いや、まあ現実逃避はやめよう……言うまでもなく牢獄だった。

牢獄同士の間も鉄格子で区切られているので隣の牢獄に入っているフィニやトールの様子も分かる。  
ちなみに向かって左からトール、俺、フィニの順番だ。

武装は解除 とは言っても俺もフィニも武器らしい物は何も持っていないけど され、入念な身体検査をされた後、手首に填められた手錠はそのままにランクルート城の地下にあるらしい牢獄に放り込まれたというわけだ。

「緊急避難なら大丈夫じゃなかったのかよ」

半ば愚痴るように、俺はトールに対する恨み事……嫌味を口にする。

「ふーむ……帝国最強の騎士があそこまで頭が堅いとなるとのう……本当にこの国の騎士は心が狭くていかんのう。」

当の本人のトールは俺の批難には特に堪えた様子もなく、単に自分の読みが浅かった事を悔いているように見えた。



「話も何も聞いて貰えませんでしたね。」

ハイルルと言うあの男、「話は帝城で聞く」とか言いながら、俺達を牢獄に放り込むなり「裁決が下されるまでそこで待つように」とか何とか言っていてさっさとどこかへ行ってしまった。取り付く島も無しとはこの事だろう。

「しゃーないし脱獄しようか。」

サラッと言ってみる。場を明るくするためのジョークだと思ってもらえればそれで良い。

「あ、逃げますか？では、壊れよ。」

ガシャンという音と共にフィニの手に填められていた手錠がアッサリと砕け散った。

「何っ……じゃと!？」

トールの恐ろしい程に驚愕した声。当然だろう、言霊の最強っぷりを目の前で見せられたのだから。

それにしてもフィニは逃げる事に何ら抵抗は無いのだろうか？自分達は悪い事など何もしていないのだからこのような扱いは不当である、と言わんばかりの軽はずみな行動だよ。

そっぴや、フィニって案外喧嘩っ早い性格なんだよね。

「いや、逃げるなんて冗談だから！そんな荒っぽいことしちゃ駄目だって!」

「そうですか？では、直れ」

砕け散った手錠が再び寸分の狂いもなく元の形状に戻りフィニの腕に填められる。

ビデオの逆再生を見ているようで、何とも形容し難い光景である。

トールが啞然として言葉も出ない様子だった。

「『一語法』じゃと!？」

あ、驚いてたのそっち？

ウエルストンとの決闘騒ぎの時の反応もそうだったけど、どうも『一語法』というものは俺の予想以上に凄まじい物であるらしい。

伝説上の存在とか言ってたし、日本人の俺の感覚からすれば、そうだな……マンガやアニメの魔法の様な物を現実に見せつけられた感覚に近い……のかな？

「それに『魔封じの枷』を物ともせずに……」

この手錠って『魔封じの枷』っていうんだ。俺みたいな駄目人間でも分かりやすい。

「クス。冗談ですよケント。いくらなんでも誤解を解かずに逃げるなんてしませんよ。」

そりゃそうだ。むしろフィニのジョークを理解せずに真剣に受け取った俺の方が悪いという物だろう。

それにしても驚いてるトールはスルーなんだ……

最近気付いたけどフィニって若干<sup>サマ</sup>つ気あるよね。優しいのになあ……いや、むしろ優しいからこそなのかな？根は優しいし咲いてる花も優しいからこそ若干の棘付き的な……その棘も、まあ結構柔らかいけどね。

「驚いてるけどさ、トールの『後唱法』なんて詠唱せずに魔術発動するだろ？そっちのが凄くない？」

あの時間を止める魔術をやられたら、もしかしたらフィニでも勝てないかも知れない。なんせ魔術の発動まで一言も発しないのだ。フィニが止まれ と言言つよりもさらに速い。

となれば、下手しなくても一語法を超える詠唱法なのではないかと思っただけど……

「そうでもないんじゃないよ。どうしてワシが貴様らをすぐに助けなかったと思うんじゃない？わざわざ解除して動き出してから狩ったのは何故じゃ？」

むむ？トールから質問を質問で返されてしまった……うゝむむむ

……

助けなかった理由か……俺達が困ってる様子を見て楽しんでたのか？

解除してから狩った理由……実力を見せつける為とか……

「それと、見られたくない技のはずなのに、動きを止めたのはエインゲンバーだけで私たちには作用していなかった理由……もですね。」

「小娘の方は賢いの。その通りじゃよ。」

意味が分からない。

見られなくなかったのに、あの魔術に俺達を巻き込まなかった理由って……ああ、そうか分かった！

「条件があるのか！」

例えば、人には使えないとか、使っている間は動けないとか……  
そういうのがあるんだな。

「概ねその通りじゃの。やっと気付いたか。」

なるほど。いろいろと条件が厳しいせいで、一言で魔術を発動する一語法とはまた凄さに天地ほどの差もあるわけか。

「『後唱法』は『一語法』とは似て非なるものじゃよ。もつとも、『一語法』の使い手にわざわざ語って聞かせる必要などないだろうがの。」

いや、『言霊』と『一語法』もきつと似て非なるものだからちゃんと教えて欲しいなー、なんて言えるわけがない。

「まさか小娘が伝説の『一語法』の使い手だったとは……ふむ、そういえば名前、聞いていたかの？」

言ったよ！俺が教えたよ！！完全に聞いてなかったのかよ……！！

「フィニです。」

「フィニ……か。覚えておこうかの。」

「じゃ、じゃあ俺の名前も……」

「無能者の名前など覚えるに値せんわ。」

バツサリ言われてしまった。これは落ち込むしかない……思いつきり落ち込んだ。ズーンって感じで両膝を地面に付いて落ち込んだ。

俺みたいな駄目人間にだって感情はあるんだぞ……

「ケントは無能なんかじゃありません！」

落ち込む俺を見てフィニは声高く叫んだ。

「そうか。それは悪かったの。訂正しよう。名前は……そうケントじゃったな。」

あれ？随分とあっさり覆したな。まさかフィニの心の叫びが届いたとかいうわけでもあるまいに。

フィニも拍子抜けと言わんばかりのポカンとした表情で頭を傾げている。

「ケントにフィニ。覚えておくぞ。またいつか会おう事があれば、の。」

そんなまるで別れの挨拶の様な言葉をツールは口にする。その次の瞬間だった。

「ハリエニ―ラ様。お迎えにあがりました。」

音もなく、ともすれば始めから牢屋の中にいたかのようにそいつ

は現れ、そして片膝をついてトールに頭を垂れた。

## 四十三章 “忍者……それも『くノ一』”

疑問はそう、一つだけ。

「忍者？」

それも、皇帝のところにいたメイド忍者なんて言う愛と勇気がコラボレーションしたような紛い物じゃなく、鎖帷子に忍装束という『忍者』という単語からイメージする姿そのものである。

体格はスレンダーと言うよりも痩せぎすと言った感じの細身。一見すると小学生にも見えてしまいそうなほどに小柄だ。

さらに言えば、聞こえる声はソプラノな高い女の声。つまり、女忍者。すなわち『くノ一』。

何と言えば良いのだろう。

美しい？……違う。

可愛い？……目元はクリっとしているけれど、ってそうじゃなくて、真っ黒な忍装束によって口元は覆われているため、容姿全体はわからないため違う。

となれば、格好良い……そう、格好良いのである。やはり忍者と言えば、影に潜み、素早い動きで攪乱し、時には音も立てずに対象を暗殺するという、そんな格好良さの代表格。それも女忍者、『くノ一』なのだ。格好良い以外の形容詞など思いつかない。

「遅かったの。」

「ハッ、申し訳ありません。予想以上の警護の厳しさに少々  
梃子摺りました。」

ここで「敬語は難しいよね」とか言ったらどうなるかなー、みた  
いなことを一瞬考えたけど、空気を読む駄目人間の俺は頭を振って  
脳内から追い出した。

「しかし問題はあります。ここから脱出口までの経路上に  
ある障害は全て眠らせました。」

「ご苦労じゃったの。」

「勿体無きお言葉。」

そう言いながら忍者は再び恭しく頭を垂れる。トールって何者な  
んだ？

「あの、トール？」

何があだか分からなくて、俺は思わず空気も読まずにトールに声  
を掛けてしまう……その瞬間だった。

「ハリエニラ様の御名を口にすることすらおこがましいと  
言うのに、それに留まらず呼び捨てるとは、貴様一体どういう見  
だ？」

恐ろしく冷え切った絶対零度の声音で気付く。先の一瞬までトー  
ルの前で跪いていた『くノ一』がどうやったのか目にも止まらぬ速  
さで俺の背後に回り込み、そして俺の首筋に冷たい刃を押しつけて  
いたのだ。

油断していたせいもあるかもだけど、俺の動体視力でも追えなか



ったとは凄まじい速度……だけど、それっておかしくないか？どうやって俺の背後に？

先にも言った通り、俺達が押し込められた牢屋は一人一部屋で、言うまでもなく俺とトールの牢屋の間は鉄格子で区切られている。牢屋のカギは開いていないし、いくらこの『くノ一』が小柄だと言っても鉄格子の隙間を潜り抜けられるというほどもないし、言うまでもなく鉄格子も壊れては……いた。

何かしら鋭利な刃物で切断されたかのように、一人一人が余裕で通れるであろう程度の大きさで鉄格子が円状に切り裂かれていた……って、荒業かよっ！？

「ケント！？貴女、ケントから離れてください！」

フィニもワントンポ遅れて状況に気付いたらしい。驚きから怒りへ感情が切り替わり、今にも俺の首筋を搔つ切りそうな『くノ一』に向けて強く言葉をぶつける。

「いやー俺としても勘弁して欲しいな。なんて、ほら、呼び捨てた事なら謝るよ。ごめんなさい、ハリエニー様。えーと……これでいいか？」

「良いと思うのか？」

駄目ですかねー

なんて若干刃に力が込められたような気がする圧力を感じながら、俺は悠長に考えていた。

「離れよ」

言霊炸裂。

『くノー』は何か見えない壁に弾かれたように吹っ飛んだ。

「なっ今のは！？クツ、不覚！」

悔しげにそれだけを吐き捨てると『くノー』はシュツというわずかな衣擦れの音と共に再び姿を消す。しかし、タタタタという何かが走っているような音だけが牢内に不気味に木霊して、しかもその音は俺ではなくフィニに少しずつ近づいているようにも聞こえて……

「……っ！」

一瞬の後、『くノー』はフィニの背後に現れる。その手には銀色の煌き。フィニは、気付けていない！

俺とフィニの牢屋も鉄格子で分けられている。俺は今この場ではフィニを助けられない。『ヤバい』という三文字だけが俺の脳内に響き渡り、そして、

「ふざっけんなああああああ……！」

気付けば全身全霊を掛けて叫んでいた。

そのあまりの声音に鉄格子はビリビリと振動し、『くノー』も驚いたのかフィニの首筋に刃が触れる寸前で手が止まっている。

フィニが傷付いていない事に一応安心し、ホッと息を吐いてから『くノー』をギロツと睨む。

「デメエふざけんな！フィニの陶磁器みたいな綺麗な肌に少しでも傷付けてみる！泣いて謝っても赦さねえからな！！」

トールことハリエニーラ様とやらの不敬を働いた（らしい）のは俺である。矛先は俺に向きこそすれども、フィニを狙う理由は無いはずだ。

「ほれ小僧、ケントじゃったか？落ち着け。それにリザもじや。ワシは気にしておらん。そう熱り立つな。」

そこにまさかのトールから仲裁が入る。いやまあ、フィニが状況を見無視して「綺麗な肌だなんて、こんな時にケントったら……ノノ」なんて呟きながら照れている現状ではトールしか仲裁役はいないんだけどね。

「ハッ。申し訳ありませんハリエニーラ様。出過ぎた真似を致しました。」

「よいよい。」

リザと呼ばれた『くノ一』は再び一瞬でトールの下へ戻り、深々と頭を垂れて跪いた。

ただ、俺の前を横切るその一瞬にだけ、確かに彼女は俺に向けて言葉を発した。

ただ一言「チカイウチニコロス」と、どこか遠い世界から聞こえてくるような声音で囁いた。

「殺す」だなんて一日に10回も言われた事のある俺に、その程度は響かないぜ。って言おうと思ったけど、流石に怖いから、聞か

なかった事にして、別の質問をする事にした。

「結局、ト……ハリエニール様って何者なわけ？」

ギロツとリザが睨んできたので言い直す。

「ふーむ……こうなっては止む無しか。教えておいておこうか。」

「内密じゃぞ」と付け加えてトールは続ける。

「カテアテ集合国の国主じゃよ。」

と、内密の事だと言っのにまるで何でも無い事であるかのように、トールはアッサリと告げた。

#### 四十三章 “忍者……それも『くノ一』”（後書き）

活動報告でも書きましたが『神勇者と死神魔王』が削除されてしまい、ややモチベーションを持って行かれてしまいました。

まあ、投稿が遅れた言い訳にするつもりはありませんが、しかしやはりショックだったのか思ったよりも文章が進みませんでした。

これから頑張って行こうと思うので、見捨てずに読んでいただけたら幸いです。

さてさて、新キャラです。

彼女の作品内での役回りは実はまだいまいち定まっております（オイ

ですので、彼女はこんなキャラなんじゃないだろうか、とあれこれ想像して読んでいただければ幸いです^^

## 四十四章 “様子見のつもりが泥沼”

カテアテ集合同国。

それは、シュレンとウルナに地理を聞いた時に出た名前。

ルヴィス帝国の西にあるというこの国には「変わり者が多いらしい」とシュレンは言った。

第一、俺やフィニも最初はシュレンにカテアテ集合同国からの旅人だと思われていたようでもあるし。

どうやら、少なくともルヴィス帝国には、変な奴を見かけたらカテアテ集合同国の人間だと思っておけば良い、というような風習でもあるようだ。

つてな感じで、トールが去って行った後の牢屋の中でつらつらと思案に耽っていた。

ちなみに、トールの手錠はリザが手刀で一撃で粉々にしていた。

「フィニはどう思う?。」

駄目人間の思考能力では限界があるので、俺はフィニに話を振ってみる。

「そうですね。変わった方だとは思っていましたが、まさか国主であつたとは……」

フィニも概ね俺と同意見と言った所なのだろう。

まさかお国のトップが護衛も付けずにあんな汚らしい格好をして

歩き回っているとは……カテアテ集出国とやらは予想以上に変わり者が多そうだ。

それに、世界を渡り歩く美食家として有名ってことは、実際にこんな事を相当長年続けているという事で、今回は運悪く捕まっちゃったから自分の部下に頼んで救出して貰った、ってところなのかな。

「悪い奴だな。」

「そうですね。悪い奴ですね。」

フィニもクスクス笑いながら俺の言葉に同意を示した。

そんな悪い奴の口車に乗って、自分達の立場も忘れてルヴィス帝国の法に叛いた俺達は頭の悪い奴って事になっちゃうのかも知れないけど、そこはまあ、考えない事にしよう。

「それにしても退屈だな。いつまで俺達はここにいれば良いんだろう?」

リザとの騒ぎの時だって誰も駆けつけて来なかったし、何よりリザの言った「しかし問題はありません。ここから脱出口までの経路上にある障害は全て眠らせました。」という言葉の意味も気になる所。

となればこれはもう……

「様子を見に行くしかないな。」

幸いと言つべきか不幸にもと言つべきか、頑強そうな牢屋の鍵はものの見事にリザによって粉碎されている。脱獄してくださいと言

わんばかりだ。

「大丈夫でしょうか？私達は悪い事をしたから閉じ込められているのですが……」

どうやらフィニは逃げだす事に若干抵抗があるらしい。「やめた方が良い。けど、ここにこうしているのは退屈。」的なオーラを感じ取れる。

「ダイジョーブダイジョーブ。見つかったら謝れば良いんだって。」

「ありがとう」と「ごめんなさい」は万国共通の筈だ。え？脱獄？何それ美味しいの？

「そ、そうでしょうか……」

お、なんだかフィニが若干乗り気になってきたっぽい。もう一押し。

「大丈夫さ。万が一何かあっても、フィニだけは絶対に俺が守るから。」

「……／／／」

あれ？黙って俯いちゃった……ハッ！？もしかして、俺みたいな駄目人間じゃ頼りないと思われた！？

それは良くない。ここは押すばかりじゃなくて少し引いてみるか……

「まあ、フィニがどうしてもって言うなら、俺一人で行って来るよ。ちよっと寂しいけど、フィニの気持ちを尊ちょ……」



「行きます！」

俺の言葉を遮って、頬を赤くしたフィニが叫んだ。

「そ、そう？そりゃ良かった。じゃあとりあえずこの邪魔な手錠をこわ……」

「粉碎」

「壊れよ、じゃなくて!？」

ぶっ壊れた。原型さえも分からないほどに粉々に粉碎された。手錠が人間だったら「解せぬ」とか呟きそうなくらいバラバラになってしまった。良いんだろうか？

「さあ行きましょう。」

鉄格子の方は既にリザによって切り裂かれているから言霊を使うまでもない。

俺とフィニはそれぞれに宛がわれていた牢屋から抜け出すと、一端領き合ってから出口の方を目指した。

「なんだよ……これ。」

道理で誰も来なかったわけである。

「酷い……」

フィニも口元を掌で覆い、その光景に衝撃を受けていた。

「眠らせた……か。良く言っぜ。」

死屍累々。

この光景を表すのに的確な表現と言えはこの言葉しかないだろう。

牢屋の扉の外にいた二人、恐らくはこの牢屋の見張りだろう兵士たちはものの見事に昏倒させられていた。

「うう……」と唸っている所を見ると、どうやら生きてはいるようだ。

牢屋へ続く細道を抜けるとランクルート城の城門前広場がある。

そこにも何人もの兵士たちが倒れている。全員、先の見張りの兵士と同様の状態で死んではない様子。

怪我らしい怪我もしていないからフィニもどう治せば良いか迷っているようだ。

「おいこっちだ！二人も逃げているぞ！」

やや遠くから聞こえるそんな怒鳴り声。

聞き覚えのあるその声の主は……

「やば、ハイルだ。」

帝国最強らしい騎士が十人程度の部下を引き連れて、こちらに走って来ている。

「なんだこの惨状は！まさか奴らがやったのか！？」

そしてこの惨状に気付いたハイラルがさらに声を荒げ、さらにこちらに迫りくる速度が上がる。

あれー……なんかあらぬ嫌疑を掛けられてね？

「ケント……これは……」

フィニが不安そうに俺の服の裾をちゃんと抓む。

多分、あの牢屋は脱獄すると分かるシステムになっているのだから。

トールとリザは何かしらの方法でそれを避けて逃げたけど、俺達は間抜けにも何も考えずに牢屋から出てしまった。

それがこの結果なのか……となれば、騎士達はまだトールは牢屋内にいると思っっている筈。

その辺りから切り崩して活路を見出す！！

そう心に決めて、俺は大きく息を吸い込むと、騎士達の足を止めるべく第一声を放った。

「トール〓テン〓ハリエニーラは実はカテアテ集合国の国主なんだ！」

ハツタリで乗り切るつもりが、なんかとんでもない暴露話になった。

## 解説 “逆回転の歯車”

そろそろ彼の話をしよう。

名を來生賢人。年齢は18歳。体格は中肉中背。

頭は悪いが身体能力は標準強。

目の前で女性が傷付く事を極端に嫌う。

特技として動体視力が優れている。

『自他共に認める駄目人間』を自称する。

ここまでが彼が自分で認識している來生賢人と言う人間像である。しかし、彼の本質はそんな所にあるのではない。

駄目人間だと、自らを表現するその彼の言葉は奇しくも本質を突いていると言えなくもない。しかし、それは本質と言える中での表層、氷山の一角でしかないのである。

世界に存在する全ての人間を歯車に例えたとするならば、つまりこの世にいない人間などいないという説を肯定的に捉えた仮定で考えるならば、彼の存在はすなわち『逆回転の歯車』であるといえる。

きつちりと噛み合い、それぞれが互いの動きを補助しながら複雑な役割を作り出す歯車の中に、ポツンと一つだけ独立して逆回転する歯車の様な存在。それこそが彼の本質なのだ。それも、単体で回っているのならばまだしも、その存在は他の歯車と下手に噛み合ってしまうのだから性質が悪い。

知らないどころの話ではないのである。

彼一人がそこに存在するだけで、この世の全てを狂わせる。誰も彼もが彼の前では所謂『いつもの自分』を保てない。誰も彼もが不安定になる。誰も彼もが不安になる。自分は絶対にこんな奴に劣っていないと信じ込みたくなる。信じ込まなければ自我が保てなくなる。

そういう意味での駄目人間。「こんな奴に自分が劣っているわけがない」と、意識的にしろ無意識的にしろ相手にそう思わせる。意図せずして人間の深層心理に自らの存在を捻じ込むような、そんな特性。

彼が謎の声に導かれ世界を渡ってから、その彼の特性に何人も犠牲になっている。

シュレン「クル」ルグタンス……サレファ「レイ」バリアン……  
ウェルストン「バダ」ユカール……トール「テン」ハリエニラ……  
そして、リザ。

その全ての人間が、彼の前でいつもの調子を崩されている。それは彼らだけではない。その影響は大なり小なり、彼と言葉を交わした人間……否、彼と擦れ違った人間全てに現れている。

そういう星の元に生まれている。神に操作出来る確率の範囲外。天文学的確率なんて生易しい数字を遥かに超越する確率のもと、彼はこの世に生を受けたのだ。

繊細な世界の機構に仇なす存在。いるだけで人の輪を乱す逆回転の歯車。これでは神に、引いては世界に嫌われざるを得ない。

かと言って、全員がその影響を多大に受けているわけではない。一部、殆どその影響を受けていない人物がいる。

語るまでもない。代表例はフィニフィアン・シュルツである。他

にも数名。彼の影響にはかなり大きく個人差がある。その差がどこに現れているのか、定かではないのだが……

勿論、世界を渡った程度で彼の本質は揺るがない。渡った先の世界でも、彼は変わらずその『逆回転の歯車』としての性質をいかになく発揮し、人の精神を狂わせる。

フィニとは違う意味で世界を揺るがしかねない様な存在を、なぜ謎の声の神は彼の世界の神から受け取ったのか……『逆回転の歯車』が新たな世界で何を為すのか、どのような影響を残すのか、それは今はまだ分からない。

## 解説 “逆回転の齒車”（後書き）

すいません、この章の文章に滅茶苦茶手間取ってました。そう、滅茶苦茶手間取ってました。はい、大事な事なので二回言いました。

……ってな感じで、更新が遅れた件について誤魔化されてください  
^^;

嘘です、ごめんなさい。勿論これからもがんばるので見捨てないでください。

さて、ここにきてやっと、物語の根幹に関わる主人公の特性についてちょっとだけ明かしました。

ちよつと言いつつ、結構色々言いましたが^^;

まあ章自体は短いですし、実はこの章を読まなくても暫く話の展開で困る事は全くなかったりするんですが（オイ

実際、この章の最後に言っている通り、物語の進展については一切触れていませんし、こんな主人公とあんなヒロインの『神に嫌われ主人公ペア』がこの先どんな風に活躍していくのか、あれこれ想像してみたら楽しいんじゃないかと思えます^^

でもあんまり深読みし過ぎると、浅い展開に失望、なんて事にもなりかねないので程々に……（え

まあこんな感じです。

感想、評価など常に大歓迎ですので、この小説を読んで何か気になった事などありましたら一言だけでも感想ページに残して頂けたら嬉しく思います。

では、今回はこの辺で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6556o/>

---

微妙な勇者と最強なヒロイン

2011年10月7日07時42分発行